

325
2774



始



43M-37

325
279 1

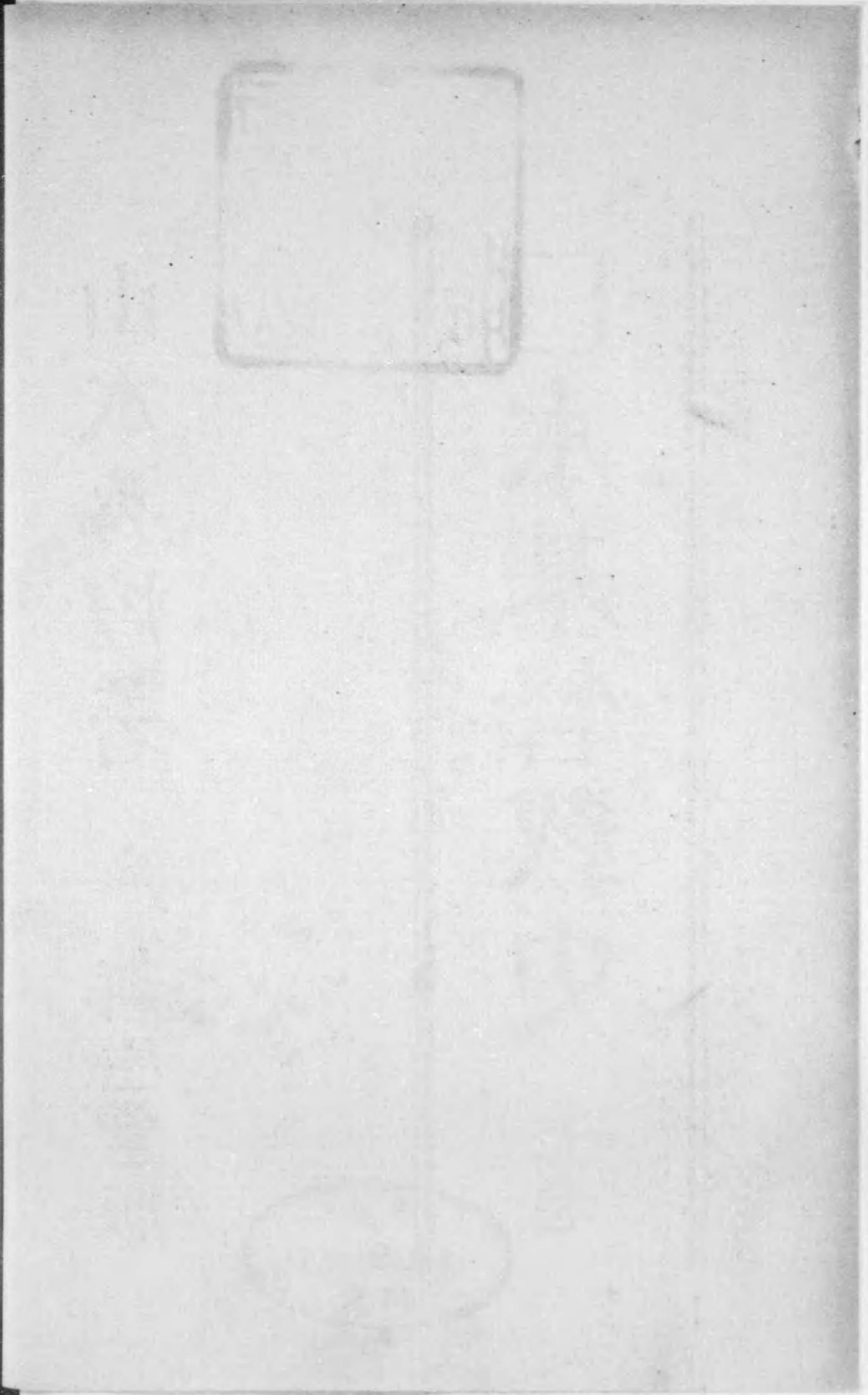
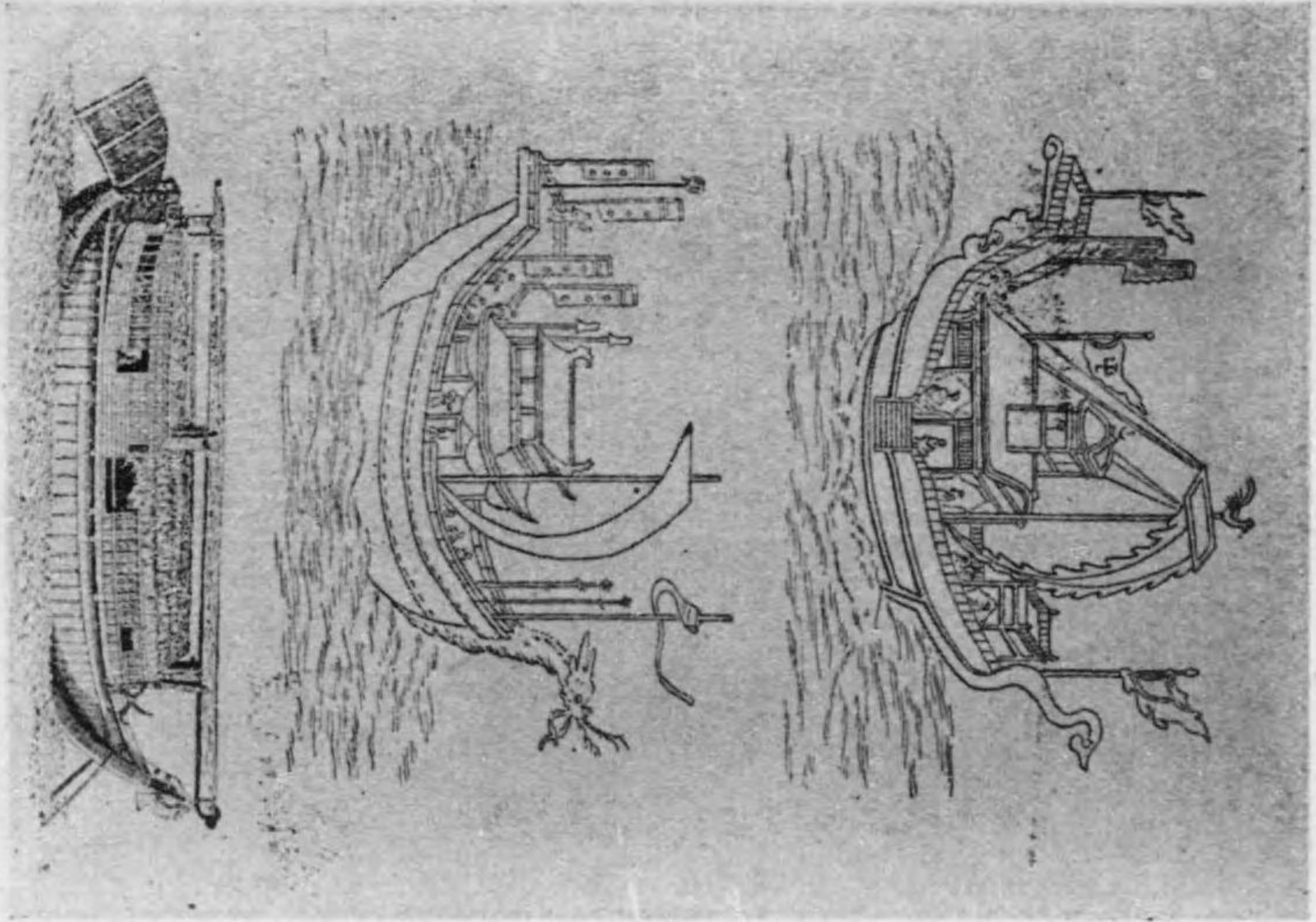


日本基督教史

上卷

山本秀煌著 · 新生堂版

大正
14. 9. 18
内交



周

表

山

道

軍

塔

僧

地

可

之

由

之

許

表

八

月

新

新

天地者道之尊者也
 日月星辰者道之明者也
 山川草木者道之生者也
 鳥獸魚鱗者道之畜者也
 凡此皆道之化也
 故君子必先慎乎德
 有德此有人
 有人此有土
 有土此有財
 有財此有用
 德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也
 凡為國者必先慎乎德
 有德此有人
 有人此有土
 有土此有財
 有財此有用
 德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也

1751 -
 德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也
 凡為國者
 必先慎乎德
 有德此有人
 有人此有土
 有土此有財
 有財此有用
 德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也



德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也

德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也

德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也

德者本也財者末也
 外本而求末
 不可得也

325-279

はしがき 増補改版に就て

一、近來我國の切支丹に關する諸方面の研究は頓に盛になり、其の遺物、遺跡、歴史等の世に公にされしもの尠からず、隨てそれ等に關する先輩諸氏の名著が續々出版さるるに至つたのは吾人の欣幸とする所で、これ等諸氏の勤勞努力を感謝して措くあたはざる所である。

一、本書は去る大正七年に初版を出したのであるが、續いて其の下巻を出版し、次に又近世日本基督教史上巻を上梓し終り、將に其の下巻の編纂に従事せんとて筆を執りつゝあつた際、はからずも、大正十二年九月一日の大震災、大火災に遭遇し出版物は勿論のこと、その紙型までも全部焼失して烏有に歸してしまつた、のみならず、版元である洛陽堂も榮枯盛衰の數に洩れずして震災前後さまざまの事故により終に没落の憂目を見るに至つたので、本書は久しく絶版となつて居たのである。然るに今回知已新生堂主人の好意により再び世に公にし得るに至つたのは著者の光榮とする所である。

一、大正七年初版上梓以來、先輩諸氏や讀者諸君の好意により諸方面より寄贈を受けた材料もあり又著者自身が旅行して蒐集したるものも多少あるが、それらは多く下巻の部にぞくするもの

はしがき

で、本書上巻の部に入るべきものは尠ないのである、だが、其の中から新に得たる材料と舊き材料とにより本書を増補し又訂正して多少其の内容を新にした又文章をも改めて現代式としたが、それは或は似而非者との非難を受くるかも知れないが、その非難は著者の敬んでも受くる所である、だが著者の苦心努力した點にも幾分の御同情を賜はらば幸甚の至である。さうして本書の改版が第一版よりどれ程進展してよくなつたかと云へば、それは讀者諸君の御判断に任せより外はないが本書も初版と同じく史書として不完全なるは勿論依然として吳下の阿蒙たるの觀あるのは著者の慚愧する所で、その點は偏へに讀者諸君の宥恕を願ひ今後の御示教を乞ふ次第である。

一、著者は昨年切支丹の古蹟や古文書等を研究する爲め西南地方に旅行したが、熊本では日本基督教會の牧師村田四郎君、九州學院の教諭上妻博之君の案内によつて同地の古蹟を踏査し、又細川侯爵家の古文書を閲覽することを得て大に得る所があつた。又山口では同地の牧師藤本保己君並に天主教の信徒長富雅二君の案内でザビエー聖師の古蹟を踏査し得たるは欣喜に堪へざる次第で切に以上四君の好意を感謝する。就中山口では現に萩に在留の佛國老宣教使ピリオン師の發起で故原敬氏を筆頭に全國知名の有志の贊助を得てザビエー紀念碑建設の計畫あり、其

の位置は往昔ザビエー聖師が大内義隆より下賜された大導寺の故蹟の附近で山口縣知事が委員長として之れが建設に着手し今や既に其の一部分を竣功したのである、それらの事に關しては近々アイデア書院から出版する拙著ザベリヨ（ザビエー）傳の中に詳述する積りだから、茲にはそれをはぶくことにする。

一、本書の再版に就て多大の援助と奨励とを與へられた諸君の好意を謝す、殊に本書の研究の材料たる「大友宗麟」の原稿を残して長逝せられた大分の人鶴谷佐太郎氏のことを追懐し謝意を表せざるを得ない。次に遣歐使節が威尼斯市民に贈つた感謝狀を本書に掲載することを快諾された在米聖書會社の藤賀杉溪氏に謝意を表し、終に本書の改版を快諾されて多大の援助を與へられた新生堂主人河本哲夫氏の厚意を感謝する。

大正拾四年九月一日大震災第二周年の

紀念日に於て

山 本 秀 煌

例言

一、本書の目的は足利幕府の末葉天文年間耶蘇組派の宣教使フランシスコ、ザビエーの來朝以來我日本に傳來せし基督教の事蹟を記述するにあり、其の一部は先に雜誌新人及び福音新報に掲載して世に公にせり、本邦古來より此種の書籍乏しからずと雖も多くは國禁嚴重なる時代に成りしものにして徳川幕府を憚り務めて事實を秘し或は之を抹殺し去りて却て荒唐無稽なる傳説を記載したる形跡あり、傳説は寓意としては面白きも史實としては無價値なり、降て明治維新以來稍々正確なる事蹟を叙述したる書物あらはれしも此又零冊斷片に過ぎず、渡邊修次郎氏の著内政外教衝突史は有益なる書なれど其書名の示すが如く専ら政教の關係を論述したるものにして基督教の歴史としては不備の點尠ならず、佛人クラッセ著の日本西教史は内容豊富記事詳密なりと雖も其引用する所の本邦の史實に往々誤謬あり殊に耶蘇組派に偏し他派の事蹟を闕漏せし點少なからざるを遺憾とす。

一、本書を編纂するに當て多大の時間と勞力とを費せしと雖も其記述する所固より完全ならず、其史實も亦歴史家の所謂第一材料に屬する者少なく其中多少著者の發見せし事實なきにあらざる

も多くは内外學者の研究に成れる所を引用し内外の諸書に散亂せる事實を蒐集し順序を正して之を排置せしに過ぎず、記述の不備脱漏は多かるべきも本書によりて我國基督教の來歴一斑を通觀するの便に供するを得ば幸なり。

一、足利室町時代の末より織豊二氏を経て徳川初期の頃に至るまでの基督教に關する事蹟は歐州の書籍に載するもの乏しからず、依て是等の書籍を參考とし之を本邦の舊記歴史に參照し取捨選修したり、參考書の重なるものは我國に在留せし宣教使の報告書に基きて編纂せし佛人クラッセ著大政官翻譯の西教史、英人エム、ステイチエンの切支丹大名記 The Christian Daimyos by Steichen. M. A. を始としオチス、ケレー著日本基督教の歴史 A History of Christianity in Japan By Otis Cary. D. D. ゴームス、ムントックの日本歴史 A History of Japan by James Murdoch. M. A. ブリンクリーの日本民族史 A History of the Japanese People by Capt E. Brinkley. R. A. クロスのザムエー傳 Cros's St. Francisco. de. Xavier. 亞細亞協會雜誌 The Transaction of the Asiatic Society. 倫敦タイムズ社出版の歴史家の歴史 Historians's History of the World. ユンヨンスの日本古今紀要 Hildreth's Japan as it was and is. 等とす、本邦の書籍に於ては新井白石の藩翰譜、及び西洋紀聞、近藤重藏著外蕃通書、亞媽港記、成島司直著徳川

實記、早稻田出版の時代史、通俗日本全史、福地源一郎著長崎五百季間、渡邊修次郎著内政外交衝突史、菅沼貞風著大日本商業史、肥塚龍著横濱開港五十季史、續々群書類從弟十二卷に收めある吉支丹物語、切支丹宗門來朝記、肥前國有馬古老物語、契利斯督實記、查妖餘錄、破提字子、大隈侯著開國大勢史、文明協會出版の歐米人の日本觀、及び其他の諸書とす維新前後の歴史に於る參考書は別に記する所あるべし。

一、本書の記述は専門的なるを避け信者と未信者とを問はず廣く一般讀者の通覽に供せんため日本歴史との關係又は個人的信仰の事蹟を詳記したり、予の短才微力なる其の内容に文章に不備の點尠なからざるも、やがてあらはるべき完全なる日本基督教史の先驅たらば足れり。此の死馬の骨に等しき本書を提供するは千里の駿馬を驅り出さんが爲に外ならず。

一、本書は基督教の起源より徳川三代家光の鎖國時代までを第壹卷とし、鎖國時代より明治維新後切支丹禁制高札撤去までを第二卷として出版するの豫定なりしが著者の都合により先づ第壹編より第參編までを一冊として、出版し續て第四編以下に及ばんとす。

一、本書の編纂に就て今日まで間接直接に多大の援助と奨励とを與へられし諸先輩諸朋友の厚意は深く感謝する所なり、出版に就きては我友加藤一夫氏に負ふ所少なからず、これ亦深く謝す

る所なり。

大正七年三月

四

山本秀煌

日本基督教史上卷目次

第壹編 基督教傳來之起原

第壹章 南蠻人の渡來……………一一二四

一 波斯人來朝

聖武天皇時代の景教、景教の感化、最澄空海、景教碑、最澄空海と景教の感化、最澄空海と景教アダム、灌頂と洗禮。

二 歐人の渡來

天孫錄の記事、古代の交通に文獻の徴すべきなし。

三 マルコ、ポロの日本記事

ポロは何人か、東洋紀行にあらはれたる日本、東洋紀行とコロンブス。

四 歐洲遠洋航海の發展

暗黒時代より文明に移る過渡期、葡皇の企圖東洋航路の發展、葡萄牙人の侵略、葡萄牙人艦港に據る、西班牙の遠洋航海の發展、羅馬法皇と新發見地、東洋に於

目次

一

ける葡西兩國の勢力。

五 歐洲人の日本發見

日本發見の年代、葡人ガルヴァノの日本發見に關する説、ガルヴァノの人物、東西交通史の記事。

六 メンデス、ヒントの日本紀行

ヒントの種子島漂泊談、ヒントの日本旅行は四回に渡る、ヒントの紀行には年代の誤がある、ヒントの第一回渡來談の経歴、ヒント等種子島々主と會見す、鐵砲を傳へるの記事、鐵砲の名手ザイモト種子島々主の御親者となる、島主火薬の製法を學ぶ、ヒントの記事は信用し難い、日葡貿易の始め、鐵砲傳來記。

第二章 聖フランシスコ、ザビエー……………二五—四九

一 ザビエーの略歴

東洋の大使徒、ザビエーの履歴、イグナシウス、ロヨラの略歴、耶穌組派の起原、ザビエーロヨラと共に伊大利に赴く。

二 ザビエーの東洋傳道

葡皇耶穌組派の宣敎使を聘す、ザビエー印度に向ふ、臥亞に達す、印度傳道の困難、ザビエー其友ロドリゲーに書を贈つて官吏を彈劾す。

三 日本の一青年印度に赴きザビエーに會す

ザビエー葡商から日本の事を聞く、其の青年は何人か、彌次郎に就て、彌次郎の履歴、彌次郎印度へ赴く、日本へ引廻す、彌次郎再び印度に至り聖師に會見す。

四 ザビエーと彌次郎

ザビエー彌次郎を聖信學校へ送る、ザビエーの書翰、彌次郎等洗禮を受く、日本行を決心したザビエーの書翰、ザビエーが印度で接した人々。

五 ザビエー印度を去り日本傳道の途に登る

印度在留の宣敎使、ザビエー印度を出發す、吉報に接す、日本の妖怪談、馬拉加知事の努方、ザビエー支那船に乗つて日本に向ふ、馬拉加より日本に来る航路、大災厄。

第貳編 足利末葉の基督教

第壹章 鹿兒島に於ける布敎の情況……………五〇—六三

一 島津貴久とザビエー

ザビエーの鹿兒島上陸、彌次郎島津公に謁見す、鹿兒島の場合を報するザビエーの書翰、ザビエー登城して貴久に謁す、島津貴久基督教を公許す。

二 鹿兒島の布教及び其結果

布教の方法如何、使徒信條に就て、ザビエーの日本語、日本語の研究、鹿兒島で結へる初穂、ザビエー老僧を訪問して宗教談を試む、アルメーダと老僧、ザビエーの傳道策。

三 佛僧等の反抗ザビエーの退去

切支丹佛僧とは何ぞ、佛僧の反抗起る、切支丹禁制となる、ザビエー平戸へ向ふ、彌次郎の末路

四 ザビエー平戸へ赴く途次市來城に至る

ザビエー市來に立寄る、市來の城主とは何人か、市來の教情を報するアルメーダの書翰、ザビエーの遺物を尊重す。

第貳章 ザビエーの遊説 附 平戸 山口、京都、府内の布教：六三一—二一八

一 平戸から京都へ

平戸港に就いて、ザビエー平戸に至る、平戸宣教の成績、ザビエー博多山口を経て上京す、旅行の困難、旅行中のザビエー、ザビエー嘲笑せらる。

二 京都に於けるザビエー

京都の實況、ザビエーが京都へ來た時、皇室の式微。

三 山口に於けるザビエー

ザビエー山口に至り大内義隆に謁見す、ザビエーの献上品、基督教の説教に對する士民の嘲笑、ザビエーの路傍説教、フェルナンデの熱心群衆を教化す、一紳士の回心より延いて五百人に及ぶ。

四 山口の佛僧とザビエー

佛僧の反抗、ザビエー盛に佛僧徒を攻撃す、山口の繁榮と其の文明、ザビエー日本人の聰明と學問とを認む、日本に派遣すべき宣教師の資格、ザビエーの天文學。

五 ザビエー退去後の山口の教情

ザビエー山口を去る、山口の内亂、山口の内亂の際に於る宣教師の避難。

六 豊後府内に於るザビエー

六
ザビエー豊後に至り大友義鎮に謁見す、豊後の葡萄牙人ザビエーを歓迎す、義鎮使者を遣はしザビエーを迎ふ、ザビエーが大友義鎮に謁見する時の行列。

七 大友宗麟と基督教

大友家の由来、大友義繼、義鎮ザビエーの説教を聞く、佛僧の憤慨、ヒントの記事に就いて、ザビエー人道を説いて貧民救助をす、む。

八 佛基の問答 其の一

ザビエーに関する種々の噂、豊後に於ける切支丹の感化、佛僧等ザビエーを法敵視す、ザビエー豊後の名僧と會見す、佛基問答の一、靈魂輪廻の説、ザビエーの答辨如何、倫理の問題に轉ず、佛僧等の暴狀、府内に排外運動起る。

九 佛基の問答 其の二

佛僧基督教を許可すべからざる理由を述べ、ザビエーの有神論と唯一神論、比喻を擧ぐ、基督教の要義を説く。

十 佛基問答の眞偽

佛基問答は果して事實か、第一の疑問、第二の疑點、第三の疑點、東西の文書にあらはれたる佛基問答。

十一 ザビエーの晩年

ザビエー日本を去る、ザビエーが中途日本を去つた理由、ザビエー臥亞に還る、其の死、聖徒に叙せらる。

第三章 九州地方に於る切支丹の盛況…………… 一一八—一四七

一 山口の切支丹

數名の宣教使渡來す、山口の切支丹教會の情況、大内義長の切支丹裁許狀、京都の僧二人山口に來り切支丹となる、山口に於ける切支丹の盛衰。

二 印度支部長ヌゲー來朝

支部長ヌゲー師の來朝、ヌゲー大友義鎮に謁見す、ルイ、アルメーヤ。

三 平戸の松浦氏と切支丹宣教使

比叡山、島津氏、松浦氏、宣教使を招聘す、松浦隆信と宣教使との關係、平戸へ宣教使を送る、鷹島、生島の信者、平戸に於る切支丹の隆盛、佛教徒との衝突。

四 大村純忠と切支丹宣教使

大村純忠其の領地横瀬浦を開く、當時の日本は外國人の居留も旅行も自由であつ

た、葡萄牙船横瀬浦へ移る、大村純忠の横瀬浦を開いた理由、純忠家臣等と共に洗禮を受く、純忠の受洗に関する西教史の記述。

五 切支丹に因んだ大村家の内憂外患

純忠の排佛毀社、大村家の内亂、老臣等の陰謀、純忠援兵を得て反徒を破る、純忠再度の危難、純忠家臣僧侶に諭告す。

六 宣教使トレー等の遭難

豊後の宣教使等大村の亂を聞きトレー等の安危を氣遣ふ、トレー師横瀬浦を去る、傳道者シルフ死す、葡萄牙船再び平戸に来る、宣教使と松浦氏との軋轢、福田浦長崎開港の由來、長崎切支丹教會の領地となる。

第四章 九州地方に於ける支切丹諸大名……………一四七—一九〇

一 基督教に接せし九州の諸大名

切支丹に歸依したる最初の大名、五島の領主宇久氏、島主家臣と共に切支丹の説教を聞く、切支丹に對する流言蜚語盛に起る、島王の世子及び家臣等洗禮を受く、世子ルイの熱心。

二 天草諸島の切支丹大名

志岐兵衛小幡鎮經、天草伊豆守種元。

三 肥前の有馬家一族

有馬修理太夫義貞、有馬修理太夫晴信。

四 九州の探題大友義鎮、宗麟

大友義鎮宗麟、宗麟佛教及び基督教を研究す、洗禮を受くる事の遅れたる理由の一、大友家麾下の三種族、洗禮を受くる事の遅れたる理由の二、洗禮を受くる事の遅れたる理由の三、其の最も重なる理由、義鎮天資聰明氣宇豪爽。

五 切支丹に關する大友家の紛争

義鎮の諸子、田原親堅の養子親虎、親虎洗禮を受け養父に譴責せらる。

六 豊薩の關係

日向の伊東家、伊東義祐を義鎮に乞ふ、大友義鎮洗禮を受く、大友氏高城に大敗す、大友氏の武威大に衰ふ、伊東氏の一族及び大友家の老臣洗禮を受く、戸次鑑連の書翰。

七 大友宗麟の排佛毀社

排佛毀社の理由如何、大友記にあらはれたる排佛毀社の記事、大友記の記事の眞偽、宗麟公切支丹に成りたまふと云ふ大友記の記述、佛教僧侶の横暴、由須原八幡の祭禮に關する珍事、由須原八幡宮の祭禮は大友家の年中行事の一。

八 彦山の攻撃

英彦山の縁起、英彦山の山伏行者の横暴、宗麟其の家臣清田、上野の兩將をして彦山を攻家せしむ。

九 土佐の國主一條兼定

土佐の一條家の由來、兼定の受洗、兼定の末路。

第五章 近畿地方に於る切支丹の布教……………一九〇—二〇五

一 京都及其附近の布教 其の一

比叡山の老僧宣教使を招く、宣教使グイレラの上京、比叡山の僧侶が宣教使を招いた理由、京都に於ける宣教使の活躍、有名なる佛僧改宗して切支丹となる、泉州堺市の布教、叡山の僧侶十三ヶ條の理由を擧て切支丹を訴ふ、檢斷の結果切支丹の勝利となる、西教史参考。

二 京都及び其の附近の布教 其の二

近畿地方の切支丹大名、高山飛騨守父子、内藤徳庵、島山高政、池田丹後守、グイレラの参殿、京都の政變、三好黨の軋轢、兩軍の信者共に會し基督降誕祭を祝す。

第六章 宣教使の動勢及び其の配置……………二〇五—二二四

一 司祭と修道士 其の一

宣教使の數、宣教使の配置、フロエー師旅行中の危難、フェルナンデ死す、其の略歴。

二 司祭と修道士 其の二

宣教使の不足を感ず、老宣教使トレーの昇天、宣教使グイレラ逝去す。

第三編 安土桃山時代の基督教

第壹章 織田信長と基督教……………二二四—二三八

一 信長と切支丹との關係、日本傳説の誤

織田信長と宣教使との關係、日本の傳説、傳説の誤、和田惟政フロエー師を信長に紹介す、西教史の記事、フロエー師京都に還る。

二 織田信長と宣教使との初對面

信長とフロエー師との會見、フロエー師佛僧徒と討論せんことを乞ふ、西教史の記事に壹ヶ年の誤あり。

三 日乘上人切支丹の宣教使を追はんと謀る

信長切支丹宣教使を保護す、織田家代々の勤王、佛教僧侶の横暴、信長に謁見した宣教使は誰か、信長大に切支丹を賞揚す。

四 元龜四年の政變が切支丹に及ぼせし影響

政變とは何ぞ、宣教使フロエーの遭難。

五 信長宣教使を以て腦髓に異狀ある人物とす

京都の切支丹倍々盛になる、信長切支丹の教を聴き且質問す、信長宣教使を別室に誘ひ其の説く教を信するや否やを買す。

六 京都南蠻寺に關する傳説

南蠻寺に就いて、永祿寺の事件は傳説の誤、昇天寺が本名、南蠻寺の位置に就て、

第二章 織田信長と基督教……其の二……………一三九—二六三

一 安土城下の切支丹寺及び修學院

安土城の落成、信長安土に切支丹の寺院及び學校の建築を許す、佐々木義盛の一族、織田信忠と基督教

二 近畿地方切支丹の盛況

復活祭の盛況、黒奴の舞踏、近畿地方切支丹大名の興廢盛衰、高山右近の降参、内藤如安と其の一族、白井サンゼンス、基督教信者の總數。

三 安土に於ける佛基の宗論 其の一

宗論開催の動機、奇怪なる記述、イルマンの説教、眞言を唱へた後の容貌、三世の鏡、南蠻寺興廢記の記事の批評、クルスに就て、傳説と宗門吟味要件、信長南蠻寺の取沙汰を聞いて怪しむ。

四 安土に於ける佛基の宗論 其の二

佛基宗論の開始、宣教使フルコム、伴天連の面容、佛基の問答。問答の中止、佛

佛基問答の評。

五 安土に於ける佛基の宗論 其の三

佛基問答に關する疑點多からず、南蠻寺に就いて、問答開始の期日に就いて、問答中止の理由に疑あり、信長と宣教使との關係には傳説に誤謬多し、所謂愚員の引倒し。

六 信長が基督教を保護せし理由如何

信長が宣教使を保護した理由、區々たる世論に耳をかさず。

第三章 大友、有馬、大村三家の遣歐使節……………二六四—二八〇

一 初て歐洲に赴いた日本人

最初の渡航者は何人か、

二 三家の遣歐使節

使節派遣の目的、日本傳道區の獨立、教育制度の擴張、コンザレー師の演説、遣歐使の一行、使節の出帆と其の行程、使節一行羅馬附近に達す。

三 羅馬法皇と三家の使節

使節の參内式、伊京萬千代、千々岩清左衛門、原、中浦の兩副使、大友宗麟が法

皇に奉つた書翰、葡僧日本民族を賞揚す、法皇使節を優待す、使節等四人金拍車の騎士に叙せらる。

四 使節羅馬を發し歸途に就く

使節の一行羅馬を發す、沿道の都市の送迎盛大を極む、八年目に日本に歸る、日本喜捨を謝する文、威尼斯人に贈つた感謝狀、使節派遣の結果、使節四人の將來、使節等の著書。

第四章 宣教使の動勢及び基督教の實況……………二八〇—二九五

一 カブラルの巡視

副支部長カブラル、カブラル師が信長に謁見する記、信長切支丹宣教使を賞揚し佛僧等を罵倒す、信長カブラル師を留めて城砦を一覽せしむ。

二 アレキサンドロ、ワリニヤーニの事跡

宣教使續々來朝す、五島に於るワリニヤーニ、ワリニヤーニ師羅馬へ行く、日本に歸還して宣教使會を開く、ワリニヤーニの日本傳道の方針、コエルホ支部長となる、ワリニヤーニと教育事業、其の他の事業、アルメーダの死、アルメーダ

の傳道振。

三 日本信徒の統計

日本全國を三部に區別す、第一部は近畿地方、第二部はシモ、大村、有馬の歌勢
第三部は四國、切支丹信者の總數、切支丹大名。

第五章 豊臣秀吉と基督教 (其の一)……………二九五—三二五

一 秀吉の基督教宣教使に對する態度

明智光秀の反亂に於る切支丹、秀吉宣教使を保護し其の布教を放任す、秀吉大坂に
切支丹寺及び學校を建設せしむ、秀吉と宣教使との會談、外征の準備につき宣教
丹の斡旋を乞ふ、切支丹布教の免許狀。

二 秀吉の家臣中の切支丹信者

小西行長と其の一族、小野木ゼーシ、田平高、蒲生氏郷、今王寺道三、牧村正
春、高山右近其の領地より佛僧ヲ遣ハス、池田丹後守。

三 秀吉之九州征伐と基督教 (一)

大友義鎮秀吉に援を乞ふ、九州の切支丹大名、九州に於る切支丹の盛況、大友義

鎮の一族及び其の郎等の切支丹、義統不肖にして大友家衰微す、フランシスカン
派僧侶の讒言。

四 秀吉の九州征伐と基督教 (二)

黒田孝高諸將を説いて改宗せしむ、宣教使の避難、大友義統の受洗、志賀親次、秀
吉島津氏を征服す、切支丹大名の轉封、九州切支丹の二大柱石倒る、大村丹後守
純忠薨す、大友宗麟薨す。

五 秀吉伴天連追放令を發す

追放令の發布、追放令全文、追放令發布の源因、施藥院全宗の讒言、施藥院全宗
の權威、秀吉の賞爵の背後に婦人あり、佛基の關係も源因の一つ、宣教使に對す
る四ヶ條の尋問、宣教使コエルホの答辨、奴隸賣買に就て。

第六章 豊臣秀吉と基督教 (其の二)……………三二五—三五七

一 追放令の犠牲者

最初の犠牲は高山右近、秀吉特使を以て高山右近を尋問す、高山右近の答辨、右
近の告別、右近其の父と共に追放せらる。

二 追放令に對する宣教使の動作

宣教使利會して善後策を講ず、宣教使會の決議、宣教使は退去するの覺悟であつたか、コエルホ退去令解除の策を講ず秀吉數多の切支丹寺を破壊せしむ、長崎港の没收、宣教使再び有馬領内に會議を開く、有馬晴信の提言、淺野長政の使命、加藤清正と小西行長、天草伊豆守種元の熱心、小西行長天草を領す。

三 追放令發布後の切支丹

切支丹を迫害する大名、松浦氏、大友義統、新に洗禮を受くる大名貴族、細川忠興夫人の受洗始末、細川夫人代行して切支丹寺に詣づ、細川夫人侍女マヨリより洗禮を受く、書翰の内容、細川忠興の憤怒。

四 印度總督の使節、遣歐使の歸朝

アリニヤニ印度に在りて追放令發布の事を聞く、アリニヤニ遣歐使を伴ふて日本に来る、遣歐使事件を公事となす、西國大名の室津に遣歐使を訪問する者多し、アリニヤニの使節に關する疑念、臥亞總督の書翰、アリニヤニ京都にて諸候の訪問を受く、アリニヤニ大村、大友、有馬の三家を訪問す、切支丹取締方勵行の建議、天草は切支丹の中心となる、宣教使を留めて人質とす、秀吉の答書。

五 征韓の役に於る切支丹大名

切支丹大名と佛教大名、朝鮮陣中の宣教使、朝鮮陣中没落の切支丹、朝鮮の役前後に改宗したる切支丹大名、阪崎田羽守、津輕爲信と其の二子、木村重高、細川興元。

第七章 豊臣秀吉と基督教 (其の三)……………三五八—四〇一

一 秀吉と比律賓大守との交渉 (其の一)

比律賓島の地形、日比の交通、原田孫七郎、秀吉が比律賓大守へ贈つた勸降書、比律賓大守答禮使を送る、答禮使の使命、西葡商人の衝突、葡西兩國の關係、法皇日本の宣教を耶蘇組派に委託す、蒲生氏郷耶蘇組派の人々を慰給す、新奉行寺澤廣高其の方針を一變す、日本の歐化熱、寺澤廣高の受洗及び建議。

二 秀吉と比律賓大守との交渉 (其の二)

原田孫七郎ヲ派宣教使を利用せんと謀る、比律賓大守の提出せんとした條約案、比使の當惑、西教史にあらはれたる秀吉と比使との關係、京都奉行前田玄以ババチストに諭告す、第二回の比律賓使者來る、耶派宣教使のヲ派宣教使に對する抗

三 サン、フェリツプ號事件（其の一）

西班牙船の漂泊、漂泊船に關する大關記の記述、西班牙船の貨物を沒收したる理由。

四 サン、フェリツプ號事件（其の二）

船長デ、ランダの暴言、切支丹大名記の評、比律賓で出版された船舶沒收始末の記事、傳道資金の問題。

五 秀吉の切支丹迫害

秀吉の嚴命に接した宣教使の態度、オルガンチノ師の態度、信徒死を決して京都に集る、諸侯宣教使の爲に辨解す、捕縛された宣教使と信徒、殉教者廿六人の氏名、殉教者の遺物を奪ふ、比律賓の間責使來る、羅馬法皇殉教者に聖徒號を贈る、秀吉再び宣教使に退去を命ず、秀吉の切支丹に對する政策、コドリゲー師病床の秀吉に謁見するの記。

第八章 關ヶ原役に於ける切支丹諸侯の興廢……………四〇一—四二二

一 秀吉薨去後の政教界

政界風雲急なり、宗教界は却て自由を得たり、政權の移動は日本基督教の前途を祝するが如し。

二 關ヶ原の役東西兩軍に分屬せる切支丹大名

關ヶ原役と切支丹、西軍に屬せる大名、東軍に屬せる大名、中立の態度を執つた切支丹大名、西軍に屬した諸將の没落

三 細川忠興夫人玉子姫迦羅奢の慘死

關ヶ原役の最初の犠牲、迦羅奢の覺悟、殉死を禁じ信教をすゝむ、迦羅奢の死、迦羅奢の葬式。

四 小西行長一家の運命

小西行長の末路、行長の刑死、行長の遺骸、行長の遺書、行長の遺孤殺さる、行長の女離婚せらる、小西華人能く防戦す、大友義統の運命。

五 東軍にぞくせし切支丹大名の運命

東軍にぞくせし諸將の恩賞、黒田長政 父子とその一族、細川忠興と其の一族、淺野幸長、切支丹大名は依然優勢。

目

次

挿入文書圖書目錄

三三

- 一 聖フランシスコ、ザビエーの肖像
- 二 大内義長の切支丹裁許狀
- 三 遣歐使節が威尼斯市に贈つた感謝狀
- 四 戰國時代の日本の船舶

附 録

- 一、秀吉が印度總督に與へたる返書草案
- 二、秀吉が比律賓大守に贈つたる勸降書

第壹編 基督教傳來之起原



第一章 南蠻人の渡來

一 波斯人來朝

史を繰いて見るに我が日本帝國が歐州人に接して基督教の思想に觸れたのは遠く奈良朝時代の昔であつたかの如く思はれる。續日本記聖武天皇記によれば、天平八年秋七月庚午入唐副使從五位上、中臣朝臣名代等、唐人三人、波斯人一人拜朝すとあり、又十一月戊寅天皇臨朝詔授入唐副使從五位上、中臣朝臣名代等從四位下、景人皇甫東朝、波斯人李密醫等授位有差とあり、聖武天皇の天平八年は、唐の玄宗皇帝の開元二十四年、西曆七三六年で、基督教の一派ネストリアン即ち景教が始て支那へ入つてから既に壹百年を経過した頃であつて、其の最も隆盛を極めた時代であつた。始め景教はスリアのエデッサを本據として四方に布教し居たが、後ち波斯に追はれたので、支那へ渡つた宣教使等は多く波斯の醫學修道院の僧侶であつた。それ故に支那に於てはネストリアン派の基督教を波斯教と云ひ、其の寺院を波斯寺又は大秦寺と稱し、其の宣教使を波斯人と云つたのである。されば、此の李密醫とは何人であらうか、其

の波斯人ペルシャ人とあるのは景教に關係深き人物であり、ネストアリン派の宣教醫士ミリーミリー其人であつた事は容易に推定し得らるるのである。

聖武天皇の皇后は藤原不比等ふひとの第二女安宿媛と云ひ、光明皇后と稱す、皇后が悲田ひでん施藥せやくの二院を設けて天下の餓恙を恤み、又温室を建て、貴賤千人に浴せしめて、大に慈善事業を起し給ふたのは世の周知する所であつて、之を以て人々は佛教の感化なりと信じてゐた、實に是れこそは或は唐朝に盛であつた景教を通じて我國にまで及ぼした基督教思想の感化であらうとは知る者も無かつた。説をなす者の曰く、光明皇后の光明の二字は景教の景の字義即ち大なる光明てふ意義より出たるものであると。其の眞偽は容易に斷定し難いとは云へ、我が國が唐朝との交通により、又此の李密醫の來朝によつて、多少景教的基督教の思想に接し其の感化を受けたのは疑ふべからざる事實である。

次に我が國の名僧空海くわい、最澄さいていの兩大師が入唐した頃（紀元八〇四年）は景教碑建設の二十三年後で、支那に於て景教の基督教が最も盛なる時代であつたので、勢其の感化を蒙らねばならぬ環境にあつたのである。

景教碑は紀元七百八十一年唐の徳宗建中二年に建てられたるものにして其の幅五尺、高さ一丈の建碑で上には一千八百七十字の刻文あり、題して「景教流行中國碑」と云ふ。其刻文の選者は即ち波斯僧の景浄アダムである。景教は即ちネストリアン派の基督教で、唐の太宗の時、波斯の大徳阿羅本あらほんによつて支那に傳へられたもので、碑文には太宗文皇帝。光華啓運。明聖臨人。大秦國有上徳。曰阿羅本。占青雲而戴眞經。望風律以馳難險。貞觀九祀至於長安。帝使宰臣房公玄齡。惣仗西郊。賓迎入内。翻經書殿。問道禁闕。深知正眞。特令傳授。云々とある。

「弘法空海」、傳教最澄の長安に着せし時には、市内に四大景寺あり、一大景教碑あり、卓識英邁の資を以て新知識を得るに熱中せる大師其人にして、十字架を冠し、異文字を刻せる碑文を見ず、皇帝の御影を揚ぐ、奇異の様式を表せる寺院を訪問せざるの理田あるべからず。もし大師にして景教中國流行碑の大榜を見れば、必ずや、その何ものなるか、その所謂處女より生れたる彌戸詞（メサイア）とは何ものなるか、その贖罪昇天しよんてんとは何事なるかを問究めんとするは勿論、先づその寺院に入り、東西の語と通じたる大徳景浄けいじやうに逢ひ、その教義を質問し、且その光翼ひかりよく（神の顯現を表す）の奇標を

見て、その説明を求めて、その好奇心を満足せしめたるは火を見るよりも明かなり」と弘法大師と景教との關係の研究に熱心なるゴルドン氏は述べて居る。

然かのみならず空海(弘法)最澄(傳教)の兩大師が入唐した時は景教碑文の選者たる大德景淨アダムが長安の名刹西明寺に於て、印度僧般若法師と協力して六波羅密多經の翻譯に従事しつゝあつた頃だと云ふ。而して其の西明寺は即ち空海(弘法)の寄宿した精舎であつて其の梵語の教師は即ち景淨の友般若法師であつたと云ひ傳ふるのを見れば、空海が般若法師を通じて景淨アダムに會し其の教に接したのは明かである最澄(傳教)は支那から歸朝せるとき多くの經論佛像を携へて來り、又始めて灌頂を高雄に於て修めたと云ふ。灌頂とは即ち發心の人に對し諸佛大悲の水を以て其の頂に灌ぎ、身行圓滿の佛果を證することを得せしむるの教意であると云ふ。是れは或は基督教の洗禮より出たものではあるまいか、故に最澄、空海の傳へた天台、眞言の中には多少基督教の景教的思想の混入したものと見るのもあながち架空の想像ではないのである。然るに其の後に至つて支那の景教は武宗皇帝會昌五年(八四五年)の禁止に遭ひ、次第に衰微し、隨つて基督教思想の輸入も杜絶の状態となつてしまつたのである。

最澄空海と
景淨アダム

灌頂と洗禮

二 歐人の渡來

耶蘇天誅前録の記事に、保元平治年間(西歷一一五六年—一一五九年)「耶蘇宗門の者黒船に乗りて來り此國に入りて人民に宗旨を勸説したれども時人之に歸依する者なかりしかば大に失望して歸國したり」とあるが、此の事蹟は明かでない。又顯承述略には、「歐人の皇國に來る世戚な天文、大隅の葡人を以て始となす、然れども葡人の前、既に東航者ある者の如し、我國中古、漢、韓、渤海の外西南より至る者を南蠻とし、東北より至る者を靺鞨とす、是れ概稱するのみ、其の實は南より至る者必ずしも南よりせず、北より至る者必ずしも北よりせず、西にして西より至り、北にして北より至る者は漢、韓、渤海のみ、西人は即ち古より舟楫に馴れ波濤に熟す海路の通ずる所遠くして通ぜざるなし、吾謂らく文治の靺鞨は靺鞨にあらずして或は歐人ならん、其の云ふ所兵學、數學、地理、星象の如き歐人に酷似する者あり、歐人の東洋に至る既に歷山港より紅海に通じ印度諸方に彷徨する又既に久し、其の南部に至る者亦焉ぞ東洋彷徨の歐人にあらざるを知らんや、或は之を以て俄羅斯人(露西亞人)と云ふ者あれども、是亦然らず、俄人國を建る久しと雖ども明初にありては末だ西洋の技術を曉

天誅前録の記

らす、然ば即ち歐人の皇國に來る葡人に先づ既に二百年前にあらんか、姑く表して之を出す」とある。思ふに其の後も我國は支那を通じて西洋の事物、思想に接し西洋人も亦支那の媒介によつて我が國の事情を知つたのであらうが、不幸にも明確に文獻の徵すべきものがない。我が國人は世界に唐、天竺のあるを知つてゐたが、西洋諸國のあるのを知らなかつた。彼も亦東洋に支那帝國のあるのを知つて居たが、絶東の日本に關しては聞く處もなかつた。然るに十三世期の頃に至つて始めて我が日本帝國を歐羅巴諸國に紹介した者がある。即ちマルコ、ポロ Mark Polo の東洋紀行がそれだ、此の紀行によつて始めて歐人は絶東にジャバングーと云へる黄金國のあるを聞知したが、尙ほ半信半疑の間に迷ひつゝあつたのである。

三 マルコポロの日本記事

マルコ、ポロは伊太利國、威尼斯市の人で、其の家は元貴族であつた。西曆一二七四年(龜山天皇の御宇)弱冠にして其の父ニコロ、ポロに従つて蒙古に至つて、元の世祖忽必烈汗に事ふる事十有餘年、其の間蒙古民族の語學を研究して大いに見聞を廣め、又しばしば忽必烈汗の使命を奉じて支那内地を旅行し、時には外國へ使した事も

古代の交通
に文獻の徵
すべきなし

カポロは何人

あつた。其の東洋紀行中に余が螢雪の勞空しからず幾干もなくして四ヶ國の文字に通じたので、蒙古王は賢人なりとして大に余を愛し、遂に或る國の使者を命じたとある。元の劉都の西域記に樞密副使博羅東京國へ遣はさるとあるのは即ち是れを云ふのである。斯くして彼は支那内地は勿論其の諸國を周遊して地理民俗を視察し終り、一二九三年即ち我が永仁元年忽必烈汗の皇女の博となり、叔父マフエフ、ポロと俱に支那を發し、印度及び中央亞細亞を経てベルシヤに至り、皇子アルグニに皇女を娶すの使命を終へて、コンスタンチノウブルを経て威尼斯に歸着したのは一二九五年の事であつた。然るに間もなく威尼斯は隣邦ゼノアと戰を交ゆるに至つて、マルコ、ポロは艦長として祖國の爲奮闘したが、不幸にして戦利あらず、俘虜となつてゼノアに引致せられてしまつた。其の時獄中に於て同囚の徒ルスチシヤに口授して往年の旅行談を筆記せしめ地圖を附して世に公にしたものこそは即ち有名な東洋紀行であつて、其の内日本に關する記事は次の如くである。

ジャバングーは大陸を距ること一千五百哩の洋中にある東方の大島であり、その人民は色白く文明にして美麗である。彼等は偶像崇拜者で何人にも隷屬せず。又彼等は

東洋紀行に
あらはれた
る日本

黄金を島内に採掘し、王は之を輸出するのを許さぬ爲に、その所有する黄金の量は無盡藏である。且つ是の島は大陸よりして遠く隔絶する爲に、此處に赴く商人は非常に稀であつて、従つて斯くも多量の黄金を堆積するに至つたのだ。此の島の王の居住する一大宮殿の屋宇の全部は美麗な黄金を以て蓋はれ、其の價格の如何に巨大であるかは測り知るべくもない。のみならず、宮殿一切の敷石、其の各室の床板も皆石板の如き指二本位の厚さの黄金板を以て敷きつめ、其の窓も亦黄金であるから此の宮殿の總價格は想像も及ばぬ程である。彼等は又多くの眞珠を有して居り、其の色は蔷薇色であつて、美しく、大きく、圓く、白眞珠と同様に高價である。大汗忽必烈は此の島の巨富を聞き知つて之を占領せんとして大軍を興し云々と、以下元冠の事蹟を述べ、且つ日本人は驚くべき勇氣があつて、目下全世界を席卷せんとする英王忽必烈汗に抵抗して其の大軍を撃破した一事を以てしても日本人の勇氣を證するに足りると述べてゐる。又黄海岸の地圖に題して、此の東海岸に一大島國があると云ふてゐる。けれど、此の有益なる紀行地圖も當時ゼノア人の注意を喚起することもなく、時勢の暗黒場裡に包まれて空しく二百有餘年を経過してしまつたが、歐洲文藝の復興によつて再び

東洋紀行と
コロンブス

世に公にせられ、大探検家コロンブス Christopher Columbus の眼に觸れて始めて其の眞價を顯したのである。コロンブスは歐洲大陸の西には必ず未知の陸地がある事を確信してゐた。彼が苦辛、慘憺の結果終に西班牙女皇イサベラ Queen Isabella の賛助を得て其の計畫を實行するに至つたのは、マルコ・ポロの紀行によつて尠からず刺戟された故であつた。斯くしてコロンブスが始めて発見した土地は、西大陸の玖馬島 Cuba であつたが、彼は是をジャバングーと思ひ、玖馬島と日本島の間には亞米利加大陸があり、ジャバングーは是の大陸を隔る數千里一望際涯なき太平洋の西方にある事を知らなかつたのである。而して、眞のジャバングーを発見したものは葡萄牙人であつた。今其の始末を述ぶるに當つて、先づ彼等が東洋航海を開通して印度に總督府を置くに至つた顛末を述べなくてはならない。

四 歐洲遠洋航海の發展

其の頃歐洲は中古の暗黒時代より將に近代の文明時代に移らんとする所謂過度期であつて、文藝の復興、宗教の改革、遠洋航海の發達、植民政策の勃興、貿易の進歩等續々相踵で起り、政治に、宗教に、文學に、經濟に、未曾有の變動を惹き起しつゝあつた

暗黒時代より
文明に移る
過度期

時代であつた。而して東洋にまでその影響の波及したるものも尠くなかつたが、就中、遠洋航海の進歩は日本の基督教宣布に直接の關係を有するものである。第十五世紀の初頃から西班牙、葡萄牙、英吉利、佛蘭西、阿蘭陀の諸國は漸く遠洋航海の業に志して船舶を造り、貿易を勉めたが、一四九二年コロンブスが亞米利加を發見して以來、是等の諸國は争ふて遠征隊を組成して探検と占領とを務めて止まなかつた。是より先さ、葡萄牙皇帝デヨンの第三子ドン、ヘンリー（一三九四生—一四六〇死）は葡萄牙の貿易を海外に擴張して威尼斯の海上權を奪ひ取らんとする志を持ち、威尼斯人の航路とは別箇の水路を経て印度へ達する計畫を案出したのである。つまり當時舟楫の通じてゐた處は波羅海、地中海、大西洋の東岸。亞布利加の西岸であつて所謂遠洋航海を試みる者もなく、隨て貿易も亦世界の一小部分に制限せられてゐた。而して東洋貿易は、サラセン人の手を経て行はれ、彼等が東洋から當時の所謂貿易の三大通路を経て、黒海若くは地中海の沿岸に輸出する波斯、印度、支那の貿易品は、伊太利人、就中、威尼斯の商人が之を買収して歐洲諸國の市場に分配して、二百余年間其の利益を壟斷して繁榮を極めてゐたのである。かくの如くにしてヘンリーは頻りに探検隊を派遣して亞布利加西岸の沿海諸

葡皇の企圖
東洋航路の
展發

葡萄牙人の
侵略

島を發見し之を侵略し來つたのであるが、一四八六年バルソロミュー、ダイアスは喜望峯を發見し、尋でヴァスコ、ダ、ガマ Vasco Da Gama（自一四九七年至一四九八年）の冒險的航海となり、遂に印度へ直航の水路を發見してマドラスの沿岸マラバルへ達する事が出來た（萬國史）是れ實に一四九八年五月二十日であつた。爾來葡萄牙は全力を盡して探検侵略を務め、漸次東進して臥亞 Goa を略し、此處に總督府を置いて植民地を鎮め、更に進んで馬拉加 Malacca 寒捕東、香料諸島 Spice Island の諸所に據り、遂に支那に達し廣東の沿岸に貿易を開き、一五一六年使節を北京に派遣して通商の許可を請ふた、けれども明帝は葡萄牙人が馬拉加を奪つた事を悦ばず、その使節を抑留して其の貿易を禁止してしまつた。然るに當時の葡萄牙人は勇悍にも此の禁令を顧みず、進んで寧波、廣東、媽港の諸津に商館を建設し、盛に貿易を營み、東洋の通商權を掌握して其の利益を獨占したのである。或人の曰く媽港は葡萄牙人が明帝の爲めに海賊を逮捕した功を以て開港の許可を得たものであると、それは即ち今の澳門であつて我國に於ては天川と稱した所である。葡萄牙人は此處に砲台を築いて邊海を防禦し、東洋貿易貨物の集散地となしたるのである。而して葡萄牙人が此地を支那政府か

葡萄牙人媽
港に據る

西班牙の遠
洋航海の發

ら租借したのは一五八七年即ち我が天正十五年の事であつた。

西班牙はコロンブスが亞米利加を發見して以來、盛に新地の發見と之が經營とに勉め、進で南北亞米利加中央を一貫し、墨西哥を平定して之を新西班牙と稱し、(一五二二年)遂には其の版圖を大太平洋に面せしむるに至つた、同時にマゼラン Magellan 遠征隊は南亞米利加の南角に一の海峡を發見し、此の航路によつて大太平洋に出でて亞細亞に達し、更に比律賓群島を發見するに至つた。然るに、此處に於てマゼランは武運拙く土人の毒矢に當て戰死したが、其の艦隊中の一艘は更に西航して西班牙のセビイ Seville 港に歸港して爰に初て開關以來未曾有の世界一周の壯舉に成功して世の耳目を驚動せしめたのである。(萬國史)

羅馬法皇と
新發見地

是より先き羅馬法王アレキサンドル第六世はコロンブスが亞米利加を發見して歸航して以來、葡、西兩國民が續々と新地を發見するのを聞き、之が爲め將來國際的物議の興るのを慮り、其の豫防として地球の南極より北極へ一線を畫し、大西洋中のアゾル群島を去ること西方一百リグ以西の新發見地を以て基督教王國に隸屬せざる者は凡て西班牙の領土となし、是より以東の新地は葡萄牙が占領して互に相侵すべからずと

東洋に於け
る葡西兩國
の勢力

の勅令を降して、兩國の新地占領を公認したのである。(後世に至つて此の線を二百七十リグ西方に移した、リグは我が約一里九丁余、)

斯くて葡萄牙は亞布利加西岸より印度の沿岸諸島を領し、支那の沿岸に其の商權を擴張し、又西班牙は南北亞米利加の大部及び比津賓以東の諸島を侵略したので、葡西兩國は東より西より又南よりして我が日本へ接近し、遂に多年の間彼等が垂涎して居たジャバングーを發見せずにはおかぬ状態となつたのである。(比津賓の占領は是時より數十年後の一五七二年である)。

五 歐洲人の日本發見

さて日本諸島が歐羅巴人に發見された記事に關しては内外の諸書に載る記事も區々として一定して居ない、シーボルトの日本史には、黒船が初めて日本の海岸に來たのは一五三〇年(享祿三年)の事であつて、其の時には大友宗明へ進物として鐵砲二挺を持ち來つたと云ひ、我が國の記録にも天文十年七月黒船豊後の神宮浦へ漂泊すとあるが詳でない。これに就て内外學者の一致する説は天文十二年の頃薩摩の國種子島へ漂泊した葡萄牙船を以て歐人渡來の初となしたのである。

日本發見の
年代

葡萄牙の人アントニオ、ガルヴァノ Antonio Galvano はその世界各地発見史中に、日本発見の始末を記して云ふには、我等の主の降生一五四二年(天文十一年)に、デイゴ、デ、フライタスと稱する者が船長としてシヤムの地、ドドラ市に滞在してゐた頃、三人の葡萄牙人脱船してジャンクに乗り支那方面に遁走した、その三人の名はアントニオ、デ、モト Antony de Moto. フランシス、ジモロウ Francis Gimoro. アントニオ、ペロタ Antonio Perota (又はアントニオ、ダ、モタ Antonio da Mota. フランシスコ、ザイモト Francisco Jeimoto アントニオ、ペクソト Antonio Pexoto)と云ふのである。此の三人は其の進路を、北緯三十余度の所にあるリアンボウ(ニンボウ)の方面に取つたが、途中暴風雨に遭ひ余儀なく陸地を遠く離れて、数日の間疾走して北緯三十二度の東方に一島を発見した。彼等は之れを日本と稱したのである。これ即ちマルコポロが富裕の島として記したジャバングーナなのであらう、しかも此島は金銀その他の財寶を多く所有してゐるのである」と。その発見した島とは内外の著書に徴して種子島なる事は明である。著者ガルヴァノは親しく葡萄牙の東洋植民地の經營に當り、一時モラツカスの知事として手腕を振ひ、その國家に忠なる事は、當然自己の所有

に歸すべきものさへも、一切を擧げて國庫に收めて毫も私する所のない程の清廉であり、只管植民地の繁榮を謀り、夙々として努めて止まなかつた。其の廉潔誠忠なる事當時稀れに見る人格者であつた。一五四〇年(天文九年)任期满ちて本國に還ると、何故か葡萄牙政府は、彼の期待に反して、何等その功に酬ゆる所もなかつたので、其の晩年十七年間は或る慈善團體の厄介となり、貧困無聊の生涯を送つたと云はれてゐる。彼の世界各地発見史はその間に作つたものであつて、彼の死後一五五七年に出版せられた。その内容は大洪水時代から一五五五年に至るまでの世界各地発見の簡單なる年代様記のものであるが、就中東洋に於ける西班牙、葡萄牙の植民地発見の始末は、彼自らが其の經營に當つたのであつて、其の記述は非常に正確であると云ふ。年代より見ると時には日本発見は彼の歸國二年の後であるが、東洋の事情に通ぜる彼の手になつた記事は正確なものであらう。又村上博士は其の著東西交通史に、「葡萄牙の都リスボンのアジュダの離宮の圖書館に有する日本教會史(一五四九年ヨリ一六三四年に至る歴史にして一五七五年以後日本に來りし宣教師の物せじものなり)には日本を発見せし歐人に就き、ガルヴァノ其他の書を引用して左の如く説けり。此の船は(ドドラより遁走したるジャンク)薩摩の海中にある種子島と云ふ一島に寄

港し彼の葡萄牙人等はこゝにて銃の用法を教へたりしが、これより銃は日本に傳はれり、云云と記して居る。以上の記述によると、日本の發見者は前記の三人であつて當時の島主種子島時堯は彼等から初めて鐵砲を傳へたのである。然し其の他にも發見の名譽を争ふ者も尠くないのであるが、彼の有名なピントの如きも、其の競争者の一人であつた。

六 メンデス、ピントの日本紀行

小説的日本紀行の著を以て有名なるフェルナンド、メンデス、ピント Fernand Mendez Pinto は自ら其の書中に初めて日本の種子島へ漂流して島主に鐵砲を傳へた歐洲人は、彼と其の友人ザイモト Diego Zimoto とボナ Christopher Borells の三人であると述べてゐる。其の紀行に載せる所によると、彼は一五〇九年葡萄牙のモントメリョルの生れであつて、幼時の頃家計の食しき爲、十二歳の時叔父の紹介によつて、リスボンの或る貴婦人の家に奉公したが、或る事變が突發した爲に他國に赴き、三十八年の間東洋を漂流して一五五八年に歸國した、その閱歷を書して子孫に傳へたものが彼の日本紀行である。其の云ふ處によれば、彼が日本に來たのは前後四回であつて、

ピントの種
子島 漂泊談

ピントの
木旅行の
回に渡る
四日

其の第一回は一五四五年天文十四年に種子島に渡り、又大友義鑑(宗麟の父)を訪問した。又日本へ始めて鐵砲の傳はつたのも此の時であつた。第二回には一五四六年天文十五年一商人として豊後府内に來り、大友氏と貿易を初めんとしたが、是の時に大友義鑑殺弒の變起り内訌の爲に志を達し得ずして鹿兒島に至つた。第三回は一五五一年天文二〇年であつて、復府内に來り、大友氏と貿易し義鎮(宗麟)に厚遇せられた。此の時に耶蘇組派の聖師ザビエロを伴つて馬拉加に歸つたのである。第四回は一五五六年弘治二年印度總督の使節として宣教使ヌグー Nuges と共にまた府中に至つた、これはさきに義鎮が葡萄牙と通商條約を結ばんが爲に使を臥亞に送つた返答であつた。ピントの紀行には年號に往々誤りがある。第一回渡來の一五四五年は一五四三年天文十二年の誤り、又第二回の一五四六年は一五五〇年天文十九年の誤りに相違ないのである。となれば義鑑の弒殺は天文十九年(二月十日)の出來事である、然し彼が彌次郎を同伴して印度へ還つたのを事實とするならば矢張り一五四六年と認めなくてはならないのであつて、此の點は其の記事に於ける大なる矛盾である。而して後の渡來談は皆事實なりとしても第一回の渡來談は甚だ信するに足らざるものと云はなければならぬ。

ピントの
行には年
誤りがあ
るに紀

ピントは故あつて本國を脱走して以來捕虜の難、海賊の難、破船の難、等に遭遇し、あらゆる辛苦艱難を嘗め、數寄の運命に翻弄せられて數年の間東海に漂流し、其の後遂に支那人の手に渡りクアンシーと言ふ所に禁錮せられたが、其の時鞆鞆人は北京を包圍中であつたので助けられて鞆鞆より交跡支那へ赴く使節一行の隨行を命せられて其の地に出かけたが、ピント等葡人の一行八人は、此の地より脱走して海賊に投じ、東方に向つた、是よりして彼の第一回紀行談は始るのである。

一五四五年一月十二日（天文十三年閏十一月二十九日）ピント等一行は交跡支那より出帆してクアンゲハルンを経、支那帝國のサンシャン（媽港の海島）に達した。これは此處よりのマラッカ行の便船を見出す爲であつたが、不幸にも葡萄牙船は早や既に五日程前に出帆し居つたので、止むなくセリーグ（一リーグは約三哩）隔たつたラムバカウ（媽港）に出かけたが、折よくもバタナとルコルから來た二艘の船があつたのでこれに便乗せんと望んだ。然るに其の時ピント等一行中に爭論起り、終には一命を賭しても雌雄を争はんと意氣込むに至つて、マレー船二艘はその執拗頑固なのに恐れて逃亡してしまつた。此の時偶々支那の海賊サミボセが本國の艦隊に攻撃せられ辛くも殘艦

を卒ひて此の港に逃れて來たので、ピント等一行はマラッカへの便船を見付けるまで暫時此の海賊の部下となり、時節到來を待ち受けやうと、同行八人の内五人は一船に、殘る三人即ちピント、ザイモト、ポレロは他の一隻に分乗して出帆したが、途中風難の爲め一隻は難破し、ピント等の一隻は辛ふじて沈没を免がれた。然るに第三日目に又また暴風雨起り櫓權もその用を爲さず、數日間波のまにまに翻弄せられて大洋に漂流し、終に琉球島へ避難することが出來た。琉球は我が行の船長が豫てより知悉する所であつたが、此の邊は潮流はげしく風向も又變化しやすく風浪と戦ふこと二十三日間、漸く陸地を發見し一同歡喜して七十尋も此の島近く漕ぎ寄せた。その時六名の土人に乗せた二艘の小船が我が本船に近より一應の挨拶の後我等一行が何處より來たかを詰問した。我等は支那國より來たものである。許さるゝならば持合せの貨物を以て貿易を營む爲であると、答へると彼は又言つた、曰く、此の島は種子島と云ふ、島主ナンタクイム（Nautaquim 種子島時堯か）は今汝等の眼前に横はる大島日本の慣例に従つて相當の運上を拂ふならば喜んで汝等の請を容るであらうと。

斯る次第で彼等の指令によつて本船をその南岸ミアイジマ（赤尾木か）と稱する賀

易港に廻航すると、各種の食料品を積んだ多くの小船が我が本船の周圍に集まつて來た。島主は夥多の紳士紳商を従へて我等の船を訪づれたが、ピント等三人は其の容貌が異て居るので忽ち島主に注目せられ、此の三人は何れの人々であるかと問はれたので船長ネコダは答へて、此の人々はマラッカより乗つた者で其の生國は葡萄牙と言ふ波路遙かに隔たりたる國より故あつて數年前に彼の地から渡來したものであると物語つた。島主は大に驚いた。さうして従者をかへり見て云ふには、豫ねて古き書冊にて波の面を飛鳥の如く飛び廻りあらゆる國々を切り従へたと聞くチエンチコヂン等 Chenchicogins ではなからうか、斯る人々が友誼と好意とを懐いて來たのは我々の非常な幸であると云つて、傍に居合せた通辯役の琉球婦人によつて船長ネコダに尙もくはしく此三人の經歷を尋ね、船長のある事なき事等誠しやかに述べ立てる言葉に感心して彼等の上陸を許して貿易をなさしめたが、商品の價格は非常なる高價に賣れ渡り元價二千五百兩のものを以て三萬餘圓の收入を受取り莫大の利益を得たのであると。その鐵砲を傳へるの記事を載せて見やう。

我等三人のものは、皆一藝にも通じないものであつたが、中にボレロ、ザイモトの

鐵砲を傳へる
の記事

みは豫てから砲術にあつては名人とも言はれて居た程で、此の間も毎日鐵砲打を樂みとしてゐたが、或日、とある池沼のかた邊りに來た時に、一群の水鳥の遊び居るのを見たので立所に二十六羽を射落した。其の時、里人等はザイモトの手練の早業を見て、今始ての事であるので、目を眩くらき、口を吐あいで、暫くの間は呆然として佇立してゐたが、只事ではないと、大急ぎに、人を馳せて、島司にこれを告げに行つた。丁度島司ナンタタイムは乗馬の儘で此所を通り過ぎた所で、始めは何事にも氣が付かなかつたが、ザイモトが棒の如きものを肩に擔ひ、二人の支那人は夥多の野鴨を携へて、沼のかたほとりから出て來たのを見て不審に思つたのである。つまり此の國に於てはいまだに鐵砲と稱するものはなかつたので、彼等見物の面々の驚くのも尤もであり、只管魔術に相異ないと感嘆せぬ者はなかつた。

ザイモトは島司始め山なす人々が環視するのにいよ／＼乗氣になり、是れ見よがしに、三發を放した所が、狙ひも違はず一羽の鳶とびと二羽のきし、はと、とを射落した。此の時見物の人々の驚愕と賞讃はどの様であつたらうか。これを見た物數寄の島司は、直ちにザイモトを自分の後方に乘せ、群がる人々を押し分け先達の武卒十四人

鐵砲の名士ザ
イモトの御親者
となる

は錫杖を振りつゝ聲高らかに、

「我等が君と仰ぎ奉るナンタクイム殿より卿等此の島に住みと住まへる民衆共に申渡す仔細あり。そは此の大世界の端より遙に難險の海波を凌ぎて渡り來られしこのチエンチコチンの君は、今日より吾君の御親者とならせらるれば、此の君に對し奉り苟くも無禮の振舞あるものは、立所に斬罪に處すべけん」と、さげびつゝ出かけた。民衆は上の御説に一人として異議を唱へるものもなく、低頭平身其の言を拜聴した（中略）斯くしてザイモトは島司の一方ならぬ厚意に酬るんが爲に自分の小銃を之れに贈ると、島司は非常にその厚情を徳とし謝禮として銀千兩を彼に贈つたのである。

島主火薬の製法を學ぶ

同時に島司はザイモトに願つて火薬の製法を學ばんとしたので、ザイモトは快よく之を諾し直ちに其の製法を傳へた所が、島司は自らそれを製造するに至つた。今は島司も他事は打捨てゝも朝夕鐵砲を弄び、恰も狂氣の如くになり、或は銃の模型を作り、銃を鍛練する事に余念がなかつた。元來器用なのは日本人の稟性であらう。製作の法も遂には成功したものと見えて我等が五ヶ月の後出帆する頃には既に

ピントの記事は信用し難い

六百餘挺を製作したと言つて居た云々。

以上ピントの記事は一讀して虚偽と思はれる點が少くない。彼の紀行は事實を云はんが爲よりも寧ろ遊戲の爲めに作られたものである」と酷評する者があるが、要するにピントは虚偽者と評された人物であつて其の記事の大部分は小説的であり、讀んで面白いが事實としては信用するに足らぬものである、故に學者は一般に前記カルヴァノ記述を事實としアントニー、デ、モト等三人を以て日本最初の渡來者とするのである。

日葡貿易の始め

斯して葡萄牙船が種子島に漂泊し初て日本を發見して以來鹿兒島、平戸へ集る黒船は年々増加して盛に貿易を行ふに至つた。彼等は南道より來た者であるとして日本人は之を南蠻人と稱したのである。

鐵砲傳來記

西村天因氏の鐵砲傳來記によれば

時宛時種子島西之村浦に一大船あり何の國より來るを知らず船客百餘人其語通せず、中に大明の儒王あり五峰と云ふ、西之村の主宰織部丞なる者頗る文字を解す、五峰に逢ひ杖を以て砂上に書して曰く船中の何人の國の人たるぞ、五峰即ち書して曰く此は是れ西南蠻種の買胡粗ば君臣の義を知ると雖も未だ禮節のあるを知らず故に杯酒して盃せず、手食して箸せず徒に嗜慾を知りて文字の其の理に通するを知らず、所謂買胡一到一處輒ち止る者なり、其所有を以て其所無に易ふるのみ。織部丞書して曰く此を去る十三里赤尾木と云ふ我宗

家世々居る所の地なり、津に數千戸あり、南商北賈賑るが如し、今此に船を繫と雖も要津の深くして且濶せざるの勝れるに、如かず、遂に之を惠時(時堯の父)及び時堯に告ぐ、時堯即ち扁艇數十艘を繰して至らしむ、時に天文十二年癸卯(西曆一五四三)八月二十七日船赤尾木の津に入る、此時日州龍源の徒來りて津口に寓す略經書に通じ五峰と相見て甚善し、賈胡の長二人あり一を辨良叔含ひらしんかと云ひ、一を喜利支多孟太きりしだもんたいと云ふ、手に一物を携ふ長さ二三尺其体中通じて外直重を以て質とす。其中常に通すと雖も其底密塞を要す、其傍に一穴あり通火の道なり、形象物の比すべきなし、其用たる妙薬を其中に入れ添るに小圓鉛を以て先づ一小白を岩畔に置き彼の物を取りて其身を修め其眼を眇にして其一穴より火を放つ時は立ちどころに中らざるなし、飛電驚雷人耳をして聳せしむ、時堯以て希世の珍となす、初め其名を知らず、既にして名けて鐵砲と云ふ、時堯重譯して二人の蠻族に謂て曰く我願くは之を學ばん、蠻種曰く君若し學ばんと欲せば我も亦其蘊奥を告げん、蘊奥得て聞くべきか、蠻種曰く心を正くすると目を眇にするにあるのみ、盡く其の蘊奥を傳ふ。時人始は驚き中には恐れて而して終に翕然之を齊ふして曰く亦願くは之を學ばんと、時堯價を問はず蠻種の二鐵砲を求めて、家珍となす、小臣藤原小四郎をして火藥調合の法を學ばしむ、時堯朝磨夕碎止まず、是に於て百發百中一も失うものなし、時に紀州根來寺に杉房某公なる者り、使を遣じ鐵砲を求む、時堯曰く我島偏小なりと雖も豈一物を惜んやと、即ち津田監物を遣し之を杉房に送らしめ、且つ之をして製藥の法と放火の遺を知らしむ。時堯劍工八坂金兵衛清定をして鐵砲製造の法を學ばしむ。賈胡秘して教ふるを欲せず、清定黒船に至り船長に請ふて曰く鐵砲製造の法を學ぶを得ば酬ゆるに我女若狹を以てせんと、船長若狹の美を見て心動き終に其法を傳へ若狹

を携へて去る云々。(これは南浦文之が種子島久時に代つて作つた鐵砲記により其の末文を附記したものだらう)

第二章 聖フランシスコ、ザビエーの來朝

一 ザビエーの略歴

日葡兩國の交通、貿易が行はれて後七年、耶蘇組派の宣敎使聖フランシスコ、ザビエー St. Francisco Xavier は基督教宣布の大使命を帯びて我日本に來朝した。時は一五四九年の八月十五日で、我天文十八年七月三日聖母馬利亞昇天祭の日、聖ザビエー一行を乗せた支那の商船は九州鹿兒島の港に到着したのである。ザビエーは東洋の大使徒と尊稱された聖徒であつた。一五〇六年(永正三年)四月七日西班牙國ナヴァールのザビエー Navarre Xavier 城内に生れた、其の父はナヴァール王の支族であり封建の名士であつた。ザビエーは歳十九を以てパリ大學に遊び哲學、神學を専攻し、業成つて後、哲學を大學に講じて名聲噴々たるものがあつた、當時パリ大學は歐州學海の中心、天下の名士碩學の叢淵であつた故に、其の頃勃興したプロテスタント派の學士も亦

此處に來つて頻りに新教を宣傳したので、之に耳を傾けるものも尠くなかつた。ザビエーも亦其の一人であつた。偶々耶蘇組派の開祖イグナシウス、ロヨラ Ignatius Loyola も亦バリーに來り、ザビエーと相知るに至つて、其の熱烈なる勸諭によつて大に悟る所あり、身を投じてロヨラの門下となり、靈的鍛練の法を修め難行苦業して其の精神を練磨し、其の宗教的生命に一大變化を生じて、献身的宗教家となるに至つた。是より先き、一五一七年（永正十四年）日耳曼の僧侶マルチン、ルウテル Martin Luther が羅馬基督公會の腐敗を哀み、其の誤謬迷信を指摘して宗教改革を唱ふるや、響の物に應ずるが如くに、天下靡然として之に傾き、其の勢大河の決するが如く滔々として止まず、數年ならずして歐洲基督教國の大半はプロテスタント教即ちルウテルの唱へた新教に歸依し、さしも横暴を極めた羅馬公教會即ち舊教の命脈も將に旦夕に迫まる有様であつたが、此時イグナシウス、ロヨラなる者あり、深く之を憂ひ身を以て其衰運を挽回せんと志に燃えて、天下に遊説して同志を募り、將に大に爲すあらんするに至つた。彼は元西班牙の武士であつて（自一四九一—至一五九一）貴族の家柄であつた。曾て西佛戰爭に従事し、バンベルナの攻圍中勇戦して足部に負傷し、家に歸つて専ら療養しつ

イグナシウス
ロヨラの略歴

ゝあつた時聖徒傳を讀で感奮し、頻りに沈思冥想に耽り、其の武士的精神の夢想は宗教的憧憬と相混じて茲に不思議な幻像を出現し、封建武士の赫々たる榮譽の念は次第に薄らぎ聖ドミニク St. Dominic 若くは聖フランシス St. Francis の如き聖徒たる光榮に浴せんとするの念は次第に高まり、病癒て後は、楯と劔とを馬利亞の像前に掛けて基督の武士となり、聖教の爲に奮闘せん事を誓ひ、直に修道院に入り、嚴格なる厭世的な生活の中に難行苦業を積み、尋でマンレサの洞穴にこもつて沈思冥想の末大に悟り、其の罪惡に苦むの煩悶は寧ろ惡魔の聲であるとして之を退けて以來忽ち恍惚として無限の歡喜に溺れ、嘗に自己が救はれたのを確信するのみならず、進で羅馬公教會の爲に奮闘努力すべき大々の任務のあるを自覺するに至り、バリーに出でて神學を修め、傍ら、遊説して同志を集め、終にザビエー、ファール Faber を始め他に四名の志士を得て、一五三四年茲に一團體を組織して Company of Jesus or Society of Jesus 耶蘇の組と稱すに至つた。ゼスイトとは他より與へた名稱である。これより六ヶ年後一五四〇年に至つて法皇の認可を受け、惣長として選ばれたのはロヨラであつた。此組の規約として組員の遵守すべき事は獨身、清貧、服従の三つとし、親縁を絶つて獨身生活をなし、

耶蘇組派の起原

清貧に甘じて世の慾望を去り、命令の在る處水火をも避けずして之を奉ずべきの絶対服従を誓約し、内は羅馬公教會を援護して新教に當り、外は異教徒を教化して公教會の勢力を擴張するを以て目的としたのである。是れは宗教改革運動の反動的勢力が産出した有力なる團體であつて、其の傳道、教育には極めて熱心であり、至る處に効蹟を擧げて公教會の爲に盡瘁した。羅馬公教會が一時喪失した勢力を恢復し、ハンガリー、ポーランド、ボヘミア、南日耳曼の諸國を其勢力圏内に取戻したのは因より反動の然らしめた事であるとは云へ、ゼイスト團體の行爲があづかつて力あつたのは事實である。ゼスイド團體は屢々世の非難を蒙つたが、其の非難は後の腐敗したるものに對する非難であつて、之を創立新進のゼスイト組に適用するは識者の首肯し能はざる所である。斯くてザビエーはロヨラ等と共に伊太利に赴き法皇の祝福を受け、轉じてエルサレムに至つて回教徒を教化せんとの企畫であつたが、戰亂の爲め其の志望を果す事も出來ず、却て伊太利に留つて各大學を教化することとなり、ザビエーはボロニヤ大學の所在地に遣はされて病院、獄舎を訪問し、囚徒、患者の不幸を慰め、賤民窟を尋ねて貧民を賑はし、或は兒童を集めて之を教誨し、若くは路傍に立つて説教し、か

ザビエー
ラと共に伊太
利に赴く

くして名聲頓に擧り、德望四方に聞えるに至つた。偶々羅馬市民が饑饉の爲甚だしく困弊した際、ザビエー等卒先して其の救助を謀り、富者よりは物を集めて之を貧者に施す等。其の仁惠至らざる所なき有様であつた。

二 ザビエーの東洋傳道

其の頃葡萄牙皇帝ジョン第三世は新にその版圖に加つた印度の人民を教化せん爲に熱心有爲の宣敎使を求めて居たが、偶々ゼスイト組のことを聞き、法皇に奏請して該組の宣敎使を聘して印度へ派遣することを乞ふたので、ロヨラは葡萄牙人シモン、ロドケリー Simon Rodrigues 及び西班牙人ニコラス、ボバヂラ Nicolas Bobadria を擧げて之に應じた。然るにボバヂラは病の爲に突然起つ能はざるに至つて、ザビエーはロヨラに指命せられて之に代つたが、同行者の一人ロドケリーは既に發足した後であつたので、忽卒に準備を整へ同僚の跡を追ふて羅馬を出發しなくてはならなかつた。彼は辛ふじて弊衣を繕ひ、法皇の祝福を受ける爲め、僅少の時間を得たのみであつたと云ふ。途中久し振りに其の郷關を通過したが、相見るの樂があれば又相別れる苦もある、我が母の爲には現世に於て見えんよりは寧ろ永遠の世界に於て相見んこと

葡皇耶蘇組派
の宣敎使を聘す

を期待すると云つて、其老母を訪ふて訣別をしなかつたと云ふ説があるが、ザビエー傳の著者タロスや、ステワルドは此の事實を否定し、彼の老母は此の時には既に死去して世に在らなかつたと云ふて居る。彼が葡萄牙の地に達するや、葡皇は師の禮を以て彼を迎え至らざる所なき待遇をしたのであるが、ザビエーは一切之を辭退し、依然清貧に安んじて自ら食を乞ひ、布教慈善に熱中し、其感化力は國王の宮中に及び、其腐敗した風儀を改善するに至つて、國王の厚き信任を博し、兩人を永く葡國に留めて置くことを願つた。爰に於てザビエーのみは印度に赴いて、ロドリゲスは葡國に留まることゝなつた。

斯くてザビエーは葡萄牙艦隊の新任印度總督アルホンソ。マルチン公を載せて印度へ赴くの便を得、之に同船して一五四一年(天文十年)四月七日リスボンを出發した、時に歳三十七、ゼスイト組に入つて以來七年の後であつた。その航海中總督及び艦長は特別の禮を以て厚くザビエーを待遇したが、ザビエーは却て之を避け、其の受ける處の食物は之を病者に與へ、已は水夫等と食を偕にし、又水夫等の病に罹つた者の間に伍してその看護慰籍に務め、死に瀕するものがあれば之に最後の教誨を與へて諄々

ザビエー印度
に向ふ

臥亞に着す

として倦まず、それが爲に自ら數次病毒に感染して命を失はんばかりに至つた。ザビエーの便乗した艦隊はリスボンを出帆して以來途中亞弗利加東岸のモザンビクターに寄港して六ヶ月を経過し、それより航行してマリンヂ、ソコタラを経て、一五四二年五月六日印度の臥亞に到着した。臥亞は即ち葡萄牙印度總督府の所在地である。當時此處に在留して居た葡人の風儀は頹敗其の極に達してゐたので、ザビエーは之を見て大に嗟嘆し土人を教化するに先んじて此等葡人の品行を矯正しなければならぬと感じ、熱心に此の改善に勤めて大に功を奏した。尋で土人の教化に従事し、錫倫、馬拉加、香料群島其他葡萄牙領の各地に數年の間布教して大に内外人の信用尊敬を得たのである。けれども是の地方は回々教の勢力強く、且つ其の接する處の土人は多く愚昧なる蠻人であつて、教化上頗る困難であつた。殊に葡國の官吏、商人等の土人に對する態度は尠からず傳道上の妨害をなし、甚だしきに至つては公然宣教使等を壓迫する者さへあつた。故にザビエーは是等の官吏、商人等を彈劾し、葡萄牙皇帝に書を贈つて印度に在る葡國の官吏及び商人等が土人を虐待する事と、彼等の非基督教的の行爲は、土人教化上の大妨害である事を述べ、陛下が統治したまふ領地に於ても、亦他所に於ても

印度傳道の困難

外面敬虔の態度を装ひ内心實に惡むき姦策を懷くもの尠からず、爲に臣等の説く所の天主の教も其の實行を期し得ざらしむるものであると云ひ、印度に基督教を擴張する唯一の良策は陛下が印度の總督及び奉行等に勅書を下して專斷横恣なる官吏を懲戒するにありと論じ、結局陛下は官吏に勅諭を下して彼等に基督教宣布上に大責任あるを諭し、陛下の任命したる有司にして布教に全力を盡すことをとなく、空しく任期を終へて歸國するものがあれば、之を懲戒に付し其の財産を沒收して慈善會に附與し、且數年間の禁獄に處して縲紲の苦を嘗めしむべしだ。此の場合に彼等が如何なる辯護を爲すも決して宥恕酌量することなしと、豫め訓令せられたいと上奏したのである。又其の友ロドリグーへ贈つた書に曰く、(大意)余の實驗する所によれば、印度にて神の道を擴張する方法は唯一あるのみだ、印度總督の態度がそれだ。されば何人が印度總督の印綬を帶ぶるも皇帝陛下は其の任命の際之に訓令を下して左の如き警告を與へられたい、曰く朕は印度に於ける基督教傳道に關しては宣教使よりも寧ろ總督に信賴するものである。されば朕は卿に命令す、卿宜しく錫倫島セイロンを基督教化しコモソモソ岬の基督教團體を擴張すへしと。更に又陛下は總督に對して斯くのたまはすべしだ。朕は卿が印度の任

ザビエー其友
ロドリグーに
書を贈つて官
吏を彈劾す

地に於て數多の信者を起し朕の良心を安せずんば、卿がリスボンへ歸るの日、誓て卿を捕へ、獄舎に投ずべし、而して卿は永く獄中に留るべく、朕は又卿の財産を沒收すべしと。國皇陛下が斯の如き命令を下して總督を訓誨し、是の命令に服せざる者を處するに嚴刑を以てして始て印度に數多の信者を得べきである。然らずんば他に印度人を教化するの道がない。」と。思ふにザビエーは印度駐在の官吏が虐政を行つて基督教宣布の妨害せるを憤慨して、斯る過激の上奏をしたのであらうが、殊更に政府の干渉を求めたのではなく、却つて政權を利用せんとしたのである。

三 日本一青年印度に赴きザビエーに會す

ザビエーは印度の傳道に失望し他の地方に赴かんと志望を懷いて居たと云ふ事だ。果してさうであつたか、どうかは疑問であるが、何しろ彼は印度在留の葡國の官吏、商人等の土人に對する態度が改善せざる以上、土人を教化するの不可能なるを痛切に感じて居た、然るに偶々印度より日本に往來して居た葡商から日本の國風、人情等を傳聞し、それは印度に勝る善き傳道地であると思つて居た際、料らずも馬拉加マラカに流浪して來た日本の一青年に邂逅して之と會談し、大に感ずる所あつて日本に來るの

ザビエー葡商
から日本の事
を聞く

其の青年は何人が

決心をなしたのであると云ふ。其の青年は何人であつたらうか、それに就いて内外の諸書に載する所區々にして一定して居ない。西洋の文書には、此の青年の名をアンジラウ、或はアングエル、又はヤジラウと云ふ。大村家の秘録には天文十二年の頃、和州の醫者種子島にあるを証し、蠻國へ連れ行き、バデレン（師父の義）に仕立て再び連れ來り密に法を弘とあり。邪教大意には天文の末、フランシスコ、ザビエーがロレンスと云ふ日本人を伴ふてロオマの京から豊後の府内に來れり、ロレンスは和州の産で本名を了西と云ふ、薩州よりロオマに渡り、天主教を學び、再び日本に歸り來たものだとある。然るに西教史によれば、ロレンスはザビエーが山口で傳道して居た頃、入門して傳道者となり、京坂地方で盛に布教に従事した人だが、ロオマに渡つた事はない。又基督實記には、アンジラウ名は了西とある。以上は皆同一の人物を指したのでなければ其の氏名錯誤の嫌あつて明確でない。されば西教史やその他の西洋文書に記する所を以て正確と認めねばならぬ。

西教史によると、其の日本人はアングエルと云ふ三十五歳の青年であると。ワリニヤ一ニと云ふ宣教使はアングエルとはヤジラウの事だと云つた。されば、アングエルとヤジ

彌次郎に就て

彌次郎の履歴

ラウとは同一の人物で、彌次郎と云ふのが、その本名であらう。彼は門地も賤しからず、資産にも富めりとある。彼が鹿兒島に居つた時、葡萄牙商人と相知り、其の馬拉加へ赴いた時には、從者二人を随へて居たのみならず、歸國後、容易に島津公に謁見し得たる等の事實より推して考れば、彼の家は外國貿易に従事し、且つ島津家へ出入して居た豪商であつたかも知れない。ピントは彼を薩摩の武士であると云つて居るが、或は帶刀御免の家柄であつたかも知れないが、武士と云ふのは疑はしい。彼が故郷の鹿兒島を去つて印度に赴いた事情は、彌次郎自身が認めた書翰の中に詳記してある。その書翰はクロスのザビエー傳に載せてあるが、一五四八年（天文十七年）十一月廿九日附を以て彌次郎自ら其の履歴を詳記して印度の臥亞から羅馬の耶蘇組本部へ贈つたものである。此の書翰に記する所によると、彌次郎は少年の頃故郷鹿兒島で偶々争鬪の餘、人を殺し、被害者の親戚の追跡する所となり、遁れて寺院に入り、漸くにて虎口を脱し得たが、爾來一日として安き心なく、憂悶慘々其の罪を哀んで止まなかつた。其の折鹿兒島灣に來航して居た葡萄牙商船の中に、曾て彌次郎の親しく交際して居たアロンゾ、ウアスAlonso, Vazと云ふ人が居た。彼は船長にして又商人であるが、彌次郎の

近狀を聞きして深く哀しみ、一日夜に彼を招き相見て諭すに一時外國へ遁れて身の安全を謀るべきを以てした。然るに、グアズの船は、出帆の期日未だ定らず、兎かうして遅延する間にも危害の彌次郎の身に迫らんことを恐れ、グアズは添書を以て彌次郎の身を其友フェルナンド、アルヴァレス *Fernand Alvarez* に托した。アルヴァレスは此の時鹿兒島近傍の他港に碇泊して居た商船の長で、逆々印度へ歸航せんとして居た人だ。そこで、彌次郎は即夜從者二人を伴ひ鹿兒島を出發して他港に赴いた。他港とは多分坊の津のことであらう。さうして港内に舟が、りして居た葡船に赴き、添書を渡して乗船を乞ふたが、豈料哉此の船はフェルナンド、アルヴァレスのそれではなくして、ジョルジ、アルヴァレスの船であつた。されど、此の船長も亦幸に親切の人で、然もザビエーを尊敬して居つたから、彌次郎の請を容れて同船を諾し、馬拉加に居る聖師ザビエーの許へ同行せんことを約した。彌次郎大に喜び、聖師に見ゆるの一日時も速に來らんことを望んで止まなかつた。斯くて鹿兒島を出帆して印度へ赴くの途中、船長ジョルジの懇切なる待遇と、其の熱心なる訓誨とにより、略基督教の大意を解しバプテスマを領せんとの志望日々に切なるものがあつた。雖て馬拉加に到着して見れば、豈料

彌次郎印度へ
赴く

らんや、聖師は香料群島巡回中で此處には居なかつた、而して其の歸着の程も何れの日ともわからないので痛く落膽し只管不遇を嗟嘆するのみであつた。當時彌次郎は馬拉加在留の宣教使にバプテスマを授けられんことを願つたのであるが、バプテスマを受ける者は異教徒の夫たるべからずとのケ條に照し拒絶されたと云ふ事である。蓋し彌次郎は既に妻帯して居たのみならず、便船次第日本に歸還せんとして居たからだ。そこで、彌次郎は失望の餘り本國へ歸らうと決心し、貿易風の吹き初めた頃、再び海路を支那に取つて歸國の途に就いた。航路七、八日、離て日本の海岸に近づいた頃、俄然暴風吹き起り、海中に漂泊すること四日にして、又々最初出帆した支那の一港へ吹き戻された。爰に至つて悵然として愁傷するのみであつたが、不思議にも、此の際鹿兒島で別れた其の友アロンズ、グアズが日本から馬拉加へ赴くのに會し、少なからぬ慰を得た。アロンズ、グアズは一別以來の事情を聞き、更に印度へ同行せんことを彌次郎に勧めた。同船の貴人セレンス、ホーラルホーも亦大に之を賛成し、彼處に行かば、必ずザビエー聖師を見るの機會を得るのみならず、宣教使の一人をも同伴して日本へ歸來するを得べしとさへ云つて、頻りに彼を奨励したので、彌次郎は再び意を決し同船し

日本へ引廻す

彌次郎再び印度に至り聖師に會見す

て馬拉加へ引廻した。然るに今回は幸にザビエー聖師も歸還して其處の寺院に居たので折しも此處にて再會したジョルジ、アルヴァレスの紹介を得て聖師に面謁するを得、詳にその志望を語つた。ザビエーは彌次郎を見て大に喜んだ、神は余を日本に遣はさんとして先づ此の青年を送つて余を迎へしむるのであらうと云つて、彌次郎を歓迎し、且つ彼が切望する安心の法を授くべしと約束した。彌次郎は聖師に謁見したのみで満足に思つて居たのに、今、面前懇切なる溫言に接し、感極つて流涕し、聖師に隨從して一生を終らんと決心するに至つた。彌次郎は幸に少しは葡萄牙語を解したので、爾來しばしばザビエーに見えて教を受け、且つ日本の事情を語つて他日の參考に供した、其の政治、宗教、人情、風俗には多少の誤謬がないでもないが、その大體は當時の日本を能く寫したるもので、彼は多少學問の素養もあつた人のやうだ。

四 ザビエーと彌次郎

ザビエーは彌次郎を見て、其の伶俐なるを愛し、彼をして秩序的に基督教を學ばしめんと欲し、彌次郎をジョルジ、アルヴァレスに托して臥亞の聖信學校に送つた。聖信學校は又の名を聖保羅學校とも稱ふ、印度惟一の簡易の神學校である。さうしてザビエー

ザビエー彌次に耶を聖信學校に送る

自身はコモリン岬の傳道を視察しつゝ、臥亞に赴かんとて別路を取つた。彌次郎が日本を出帆して馬拉加に向つたのは一五四七年(天文十六年)の四月にして、馬拉加に到着したのは十一月頃であつた。さうして此處に留まること僅々八日間、其の臥亞に著したのは一五四八年(天文十七年)の三月二十日であつた。ザビエーが一五四八年一月二十八日附を以て羅馬にある耶蘇組派本部へ贈つた書翰中に左の如く云つて居る。(コソより多分馬拉加で彌次郎に別れ別路臥亞に赴く途中であつたらう)

ザビエーの書翰

馬拉加に一人の最も熱心にして忠實なる葡萄牙人がある。彼は二年前始めて發見された日本と呼ぶ群島より成立つ國の事を逐一詳細に語つて云ふ、彼の國民は一般に他の國民に優れて事物の道理を喜ぶ性質なれば布教上印度に勝る好結果を得るだらうと。而して此の商人が同伴して來た日本人で彌次郎と呼べる青年がある云々と以下彌次郎の略歴を述べ、且つ曰く、一般の日本人にして此の彌次郎の如きものであるならば、日本人は實に吾等が今までに發見した國々の民に比して大に勝れたる人民である。彌次郎は聖教の講義を聴く時には一々信仰のケ條を己が手帳に記入し、又聖堂に於る集會で習ひ覺えたことは悉く暗記して居る、彼は其の性質至て淡泊に

して。何事でも憚ることなく質問し又能く勉強して居るから、やがて眞理を辯知するに至るだらう。彼は馬拉加へ到着後八日にして印度へ赴いた。×××余一日彌次郎に向ひ余若し御身と與に日本國に渡つて基督教を傳へたら、其の住民は客易に聖教を受納れるか、どうか、御身の意見如何と尋ねたら、彼は答て我國の人々は概ね皆他人の言ふことを妄りに信せず、其の聞く所に就て飽まで質問し、又其人の言行一致するを見て然る後に其の是非を判断するのだ、是故に宣教使が彼等の質問に十分の説明をなして之れに満足を與へ、又特に品行にして聊かでも其信用を失ふことがないならば、總て身分ある者と否とを問はず、皆悉く善に進み義に勇むの心を以て、我聖き基督の教に歸依すべし云々と語つた。

日本より歸り來る商人等は皆余に行て日本に布教すべしと勸めて止まない余にして日本へ渡航せば其の功蹟の擧ること印度地方の比でない。何故なれば日本人は道理を認めると同時に、之れに服従するの勇氣ある人民だからだと物語つて居る。此の如く日本國は異教徒等の忌むべき迷夢を覺醒し、主の榮光を發揚すべき適當の働き場所と信せらるゝにより、今より二ケ年の中に、余自ら日本へ赴くか、さなくば御組の

中から他の宣教使を派遣するか、何れにしても、是の國民を主基督の聖恩に沐浴せしめたいとの決心は須臾も忘るゝことが出來ないのである。日本への航路には暴風と海賊との危険あれど、余輩は身命を天主の聖旨に任せたるものなれば、是れしきの事に恐れて天主に對する義務を怠るべきでない。乞ふ余の爲めに祈禱せられよ。云々（以下略す）

さて彌次郎は臥亞の聖信學校に於てコスモ、ド、トラー Cosmo, de Torres 師父の指導の下に基督教を研究すること數閱月にして略其の教義に通じ、信仰も次第に進んだので、終に一五四八年の五旬節に於て從者二人と偕に、臥亞城下の監督司教たるアルプツケルクのデヨアン公より特別の儀式を以てバツテスマを受けた、東洋の一孤島たる日本帝國最初の基督教者として羅馬公教會に入門して其の一員となつた。彌次郎はパウロと云ふ教名を授けられ、從者二人はデヨアン、アントニオと云ふ教名を受けた。此れより彌次郎は耶蘇組派の定規に従ひ四週間の冥想を勤めた。所謂精神鍛鍊法を條行したのである。それは耶蘇組派の開組ロヨラの信仰的體驗からあみだしたるもので、信仰を鍛鍊するに、最も有効なものとして傳へられて居る。これより彌次郎の

彌次郎等洗禮を受く

信仰は倍々堅く、主耶穌の恩寵に感激して、切りに同胞日本人の救拯に熱心し、昂奮の餘り、時には日本人の救はれる爲ならば、たとへ我が生命を天主に捧ぐるも亦我が喜であると呼んだ。サビエーやトレーは彌次郎の熱烈なる信仰に動かされ、自分等の熱心の足りないことを恥ぢ三省して倍々天主への御奉公に奮勵して居ると云つた。サビエーは彌次郎と起臥を共にしつゝ之れを指導して居る間に、親しく日本の事情を聽きて倍々日本を慕ふの情が起つた、彌次郎の印度へ來航したのは天主かサビエーを日本に遣はし給ふの意旨であらうと確信して感謝に堪へず、彼が日本傳道の意味はいよ／＼強固となつた。サビエーが一五四九年の一月耶穌組派の總長ロヨラの許へ送つた書翰の一節に、

若し葡萄牙人が新に信者となる土人を親切に取扱ひ呉れさへすれば容易に夥多の信者を得べけれど、事實は之れに反し、新しい信者は葡萄牙人に嫌惡せられ、又迫害せらるゝものの如く外教人に認めらるるので、彼等は信者となるを好まぬのである故に余は是の地に居て働くも無益であると思ふから、他の地方に移つて傳道したい。或る確實なる者より聞く所によれば支那の東方に日本と云ふ國がある。此の國

日本行を決
心したザビエ
ーの書翰

にはマホメット教もユダヤ人も未だ入込まず、全く外教人のみで、彼等は殊に心理性理等の如き新しい事を見聞せんことを好む由なれば、余は一刻も早く日本へ渡航したい。彼地に於る我等の勞働は大なる効果があるだらうと思惟す。日本は臥亞域下を距ること千三百里にして、其の航海には颱風又は海賊等の危険あり、四隻の船の中二隻が安然に到着するならば極めて幸福なる航海であると聞いて余が如何ばかりの歡喜を以て此の行を企圖しつゝあるかは筆紙に盡し難い。是等の危険は余が今日まで冒し來たつたものに比すれば遙に大なれど、余は爲めに此の企圖を止めない。何となれば我等の教主は一旦彼の地に十字架を植うれば必ず好結果あるべきを余の心に示し給ふたからである云々。又日本へ渡航後は此の地に行はるゝ佛教を研究して之れが報告をなすべしと附加した。

ザビエーは印度にて接觸したる人民のあまりに愚昧にして徳義の念うすきと、葡萄牙人の土人の上に加へる壓迫とで、布教上の努力も効果尠なきを嘆き、寧ろ此の際日本の如き文化の進んだ國に傳道したいと望んだのである。蓋しザビエーは印度に於ては多く蠻民の地にのみ傳道したので婆羅門の學者や、佛教の學徒には接しなかつたやう

ザビエーが印
度で接した人
々

だ。彼にして印度哲學や佛教に關して學ぶ所があつたならば、日本の布教に資する所が多かつたのであらう。又同時に葡萄牙皇帝に奉つた書には皇帝の印度統治に關する責任を述べて諫言を奉り、印度の總督、有司等が依然其の行爲を改めないで布教上の妨害を爲すが故に、已を得ず、彼等の干渉し能はざる日本の地に赴き傳道に従事せんとするのであると言上した。

五 ザビエー印度を去り日本傳道の途に登る

初めザビエーの印度に來た時は同行者僅に二人であつたが、其後コスモ、ド、トレーのフランシスカン派から轉じて耶蘇組派に入るあり、バエツ、ガスバル等十二人の歐洲より來會するあり、印度に於る耶蘇組派の勢力が幾分か優勢となつたので、ザビエーは印度在留葡萄牙人の諫止を排し、愈々日本に來やうと決心した。そこで、パウロ、ド、カメリノに印度の後事を托し、アントニオ、ゴメスを臥亞の聖信學校長に任じ、又部下の宣敎使等を各地に分遣し、自分はコスモ、ド、トレー師父及びジャン、フェルナンデス Juan, Fernandes 修道士の二人と、彌次郎等二人の日本人及び支那人一名を伴ひ、一五四九年四月二十五日コシン府を發し、五月三十一日馬拉加へ着し、便船を求

印度在留の宣
敎使

ザビエー印度
へ出發す

吉報に接す

日本の妖怪談

めた。當時馬拉加には曩にザビエーが派遣したる宣敎使の勢力により、基督教も盛に行はれ、葡萄牙の貴族で新に耶蘇組に加入したものもあつた。此の地に滞在中、ザビエーは日本に在る葡萄牙の商人から一の喜ばしい報告に接した。それは日本の諸侯の一人から印度總督へ使節を送り宣敎使の派遣を乞ふたと云ふ事だ。其の動機として左の如き奇談が傳へられた。一日葡萄牙の一人商人が日本の某地に於て一軒の空き屋敷を賃して止宿所とした。然るに是の家は土地で有名な妖怪屋敷で、何人も怖れて往むものなき廢屋であつた。葡人はそれを知らずして借りたのだ。果して其の夜三更の頃、噂の妖怪が現はれて葡人の雇人を襲ひ之を氣絶せしめた、そこで主人は早速家敷の周圍に十字架を立て魔除としたが、其の効能にや、不思議にもそれより以後は妖怪が出なくなつた、日本の化物も十字架の威力に恐れたのであらう、このことを傳へ聞いた村民は痛く驚き各々争つて其の門前に十字架を樹て魔除とした、妖怪退治の功德に感じたのだ。然るに其の事いつしか、領主の御聞に達し早速葡萄牙人を召して十字架の由來と其の功德を聞き、遂に基督教を容るるに決したのである。その領主とは多分大友宗麟を指したものだらう、又其の妖怪談は傳説に過ぎずで、事實如何は固より保証の

馬拉加知事の
努力

ザビエーは斯る吉報に接して心勇み、速に發程したいと思ふて準備に忙しかつた。其の頃の馬拉加の知事ペテロ公は、夫の遠洋航海で有名となつたヴァス、コ、デ、ガマの第三子で、異邦の傳道の爲には殊に努力を惜まなかつた人で、ザビエーの爲にもさまざまの便宜を與へた。ザビエーの航海に關する一切の費用を辯じ、且つ日本の傳道に要する物品は勿論、日本の國帝に謁見する時の贈呈品として金二百フアナム(一フアナムは五圓)胡椒三百斤、其の外貴重品の品々を贈與した。それはザビエーが日本で大内義隆に贈つた品々だ。馬拉加知事の好意はザビエーに取つて多大の援助であつた。されば、ザビエーは葡萄牙皇帝に上書して馬拉加知事の行爲を賞讃して其の厚意を謝し推賞至らざるなきであつた。ザビエーは六月中には是非とも馬拉加を出帆し年内に日本に到着したいと期待して居たので、知事は彼の爲に便船を得やうとさまざまに焦慮したが、當時の事だから便船は至つて稀で、偶々あつても途中處々に寄港する商船で、直行の便船を得ることは殆んど不可能であつた。然のみならず、彌次郎は葡萄牙商人の怪しき操行を見聞して居たので、之れが爲め日本人が基督教に墮くやうな事があつて

ザビエー支那
船に乗つて日
本に向ふ

はならぬと懸念し、此の際、寧ろ葡萄牙船以外の他國の船に乗つて日本へ直行するの便利なるを主張した。因て知事は特にザビエーの爲め支那の海賊の頭目ラセタと云ふ者から人質を收め、彼の船にザビエーの一行を托して日本に直行せしむる事にした。馬拉加出帆は一五四九年(天文十八年)六月二十四日にして長途の航海中、暴風、海賊の難を始め其の他にさまざまの危険に遭遇せるも、天主の恩寵により一行皆無事で、一五四九年八月十五日(天文十八年七月三日)聖母馬利亞昇天祭の日を以て鹿兒島に安着した。其の航海中の事情はザビエーが鹿兒島より臥亞の師父へ贈つた書翰に詳記してある。其の略に曰く

パブテズマのヨハネの祝日、即ち六月廿四日馬拉加を出航し、天主の深き御恩寵により八月の頃日本國へ到着した。初め我等は馬拉加の知事と共に日本渡航の事を約束し、外教信者たる支那の商船に乗込んだ。天主の恩惠淺からず安穩にして人々皆喜び居たのだが、船長は兎角日本へ直航する船路を避け、島々の間を巡回して徒に時日を遷延した。然るに、我等にあつては實に恐るべきものが三つある、一は主の殊に賜へる此順風の時機を失ふに至るべき事で、二には此順風を失ふたらんには遂に

馬拉加より日
本に來る航海

日本渡航の目的を達すること能はざるに至らんことだ、三には支那の海港に寄航する時は早くとも來春の順風を待つにあらざれば、解纜する能はざることだ、因て百方船長を慰諭して日本へ直行せしめんとしたが、彼等の頑迷なる易占によりて是事を決せんとし、やがて水夫等は船の日本國に到着するも馬拉加へ歸航し得べきや否やを占なつて見たが、一たび日本國に到着すれば再び馬拉加へ廻航し難かるべしとの易占を得たので、彼等は冬期間、支那の海港に留り、來歲を待て日本へ渡航すべしと主張し、我等も之が爲め一方ならぬ苦心した。

交趾支那に向て進行中、我等の頭上に一大災厄が落ち來つた、聖女マリア、マタレナの祝日即ち七月廿二日の晩景より海上、俄かに暴れ出し、波濤頗る高く、船体の動搖一方ならざりしが、其折同行者の一人にして我等の從者たるエマヌエルと云へる支那人が過つて甲板より船底に墜落して負傷したので、一同は皆彼が即死せるならんと思つたのに、不思議にも天主の御助により唯僅に負傷したのみで命を免かれた然るに其の翌日船長の愛娘は烈風怒濤の爲めに甲板より洵ひ奔にれ終に空しく海底の藻屑となつた、此悲惨の出來事により、船長は云ふに及ばず、船員一同哀痛悲

嘆やる方なく、迷信者の常として直に偶像に祈念し、一人の神憑者に由り其原因を求めたところが、エマヌエルにして即死したらんには娘子は此災難を免れたるなるべしとあつたので、さなきだに我等を嫌忘せる船長以下の人々の我等に對する憎惡忿激は益々甚しく、一同は唯々天主の厚き仁恵と一同の勇膽とによりて僅に虎口を脱し九死に一生を得たのである、嗚呼此の禍難、災厄より我等を救ひ出し給ひたる神の鴻恩に對し如何に感謝の意を表すべきかを知らないのである。斯くて船廣東を過ぎ、福建の一港に入りて碇泊せんとせしに、海賊船の港口を巡邏するに逢ひ、之を避けて廣東府へ引戻さんとしたが、逆風にして船の進行難儀となつたから、順風に乗じて日本へ直行することとなり、自然の風波も、人爲の風波も全く治まつて、天日晴朗、波瀾靜定したので、再び帆をあげ、恵み深き天主の御助によつて、我々の救主耶蘇基督降生の一五四九年即ち聖母の昇天日の朝、恙がなく日本の鹿兒島と云へる處へ着いた。上陸後、我善良なるバウロの親戚等へ紹介せられ、殊の外懇勤なる接待を受けて居る。云々

第貳編 足利末葉の基督教

第一章 鹿兒島に於ける布教の情況

一 島津貴久とザビエー

東洋の大使徒フランシスコ、ザビエーが日本傳道の使命を帯びて鹿兒島に上陸したのは後奈良帝の天文十八年七月三日一五四九年八月十五日にして足利氏の末葉群雄割據の時代であつた。是より先き、葡萄牙の商船はしばしば九州諸港へ來航したのであるも、其の目的は單に通商貿易に外ならずであつたが、ザビエー等宣教使の渡來により爰に始て日本と歐州諸國との間に政教の關係を生ずるの端緒を開いた。是れ日本歴史に特筆大書すべき一大事件である。

ザビエーの一行は鹿兒島へ上陸しパウロ彌次郎の家に客となり、其の親戚朋友より懇懃なる接待を受けた。鹿兒島の領主島津修理太夫貴久は彌次郎が印度より異人を伴ひ來たことを傳聞し、先づ彌次郎を召て親しく葡萄牙人の風俗、人情及び其の國力等を尋ねた、彌次郎は其の見聞した所を述べて詳に諮問に答へたが、其の語つた所の珍談、奇説は深く貴久の感興を惹起した。應て談宗教に移り、彌次郎言上して曰く、臣

ザビエーの鹿兒島上陸

彌次郎島津公に謁見す

は印度より宣教使を同伴し來れり。彼等は皆方正博學の師にして眞神の教を傳へんとて、遙々來朝したものである、臣も既に其の教を奉じ、爾來心中極めて平穩なるを得た、是の如きは日本の宗門に於て未だ曾て實驗せざる所であると、因て基督教の大意を語り且つ聖母馬利亞嬰兒耶穌を抱くの油畫を御覽に供した。貴久自ら敬意を表して之を拜し、列席の家臣をして其例にならしめた。母公も亦其侍女と共に之を拜した。これは固より信仰あつて拜したのではなく佛畫に對すると同一の心を以て拜したに過ぎないのである。

ザビエーの書翰は此際此の消息を傳へて曰く、パウロ彌次郎の故郷に於ては其の市邑の長官及び主備隊の司令官を始として一般士民の鄭重なる待遇を受け、殊に我等葡萄牙より來つた宣教師に對しては深く驚異する所があるやうだ、而して彼等はパウロ彌次郎が基督教に改宗したるを敢て異まざるのみならず、却て之を嘉稱して大に尊敬を拂ひ、其の親戚たる否とを問はず、人々皆彌次郎が遠き印度に渡航して日本にて見ることの出來ないものを視察して來た勇氣を賞讃すること一方ならずである。國主も亦彌次郎を賞讃し之を殿中へ召し見て大に喜び、頗る鄭重の取扱をなし

鹿兒島の情況を報するザビエーの書

且つ尋ねるに葡萄牙の習慣、風俗及び其の權勢等の事を以てした。彌次郎は詳に答へて國主の意を満足せしめた。國主は當時鹿兒島を距ること三リーグの處に在城ましますのだ、彌次郎は語り終て我等が印度より携へ來た所の油繪即ち聖母馬利亞の懷に抱かるゝ嬰兒耶穌の圖書を御覽に供したるに、國主は之れを視て非常に感賞し遂に油繪の前へ進みより躑きて敬禮をなし、又近侍の者をして之を拜せしめた。國主の母公は特に是の油繪を賞讃し給ひて之が模寫圖を得たく御思召し、彌次郎が鹿兒島へ歸つた後侍臣をバウロの家へ遣はし、價の如何に拘はらず之を贈致せよとの倚頼があつたが、惜哉當時鹿兒島には之を模寫するに精功なる技術家がないので其の御倚頼に應ずる能はざる旨を答へ、又基督教に關する信仰の要義を書き送るべき旨を申し來たので、彌次郎は數日勉勵の後、國語を以て基督教の大意を認め之を母公の許へ上つた。云々(貴久公の居城は鹿兒島を距る三リーグとあり一リーグは五哩にして我貳里餘丁に當る其居城は伊集院であつたと云ふ)

數日の後(西曆九月二十九日)ザビエーは國主貴久の召に應じて登城し、彌次郎の通譯を以て今回日本國へ渡來したる目途、及び基督教の大意を述べて貴久及び母公の同情を博し、併て基督教の公許を請願した。貴久之れを嘉みし未だ幾平ならずして基督

ザビエー登城
すして貴久に謁

島津貴久基督
教を公許す

教公許の布令を發し、其の臣民にして基督教を信奉する者あるも他教の者之を妨害すべからずとの旨を、偏く國中へ傳達された。ザビエー其の當時の事を記して曰く。大天使聖ミカエルの祝日(九月二十九日)鹿兒島國主の殿中に至つた。國主は厚き禮遇を以て我等を款待し、切角基督教の爲に熱心奮勵すべき旨を語りたまふた、是の國主にして眞正の教義を理解せらゝに至らんか、惡魔は憤激に堪へないだらう。數日の後、國主より基督教の布教を公許したる旨を一般人民に布告せられた。因て我等は基督教の信條を國語に譯し之に詳細なる説明を附して偏く遠近に配布し布教上の便宜をはかつた。日本人は能く文字を解するが故に布教上頗る便利だ。バウロも亦種々必要なる教義を譯して一般人民に配布した。云々。ザビエーは四十日に満たずして十二宗徒の經文の註解並に天主の誠命を譯したと西教史には記してある。

二 鹿兒島の布教及び其結果

ザビエーは如何なる方法を以て布教し、又、どんな教義を宣傳したのだらうか、彼は其の初め國語に譯したる基督教の信條若くは十誡等を羅馬字にて書き、之を民衆に讀み聞かせ、彌次郎をして之が説明をはさしめたと云ふ事だ、基督教の信條とは西教

布教の方法如
何

使徒信條に就

史に云ふ拾二宗徒の經文で、アポストルクリード即ち使徒信條の事だ。ザビエーは印度で使徒信條の註解を著し、それを基礎として布教して居た、日本でもその註解付の信條を邦語に譯して之を教へその教義を宣傳したのだ。其の後に來た宣教使が宣傳した教義も亦殆んど同一で、ザビエーの註釋使徒信條以外に出なかつたやうだが、唯併しそれに羅馬教會の定教を加へて、舊教的色彩が次第に濃厚になつたらしい、されば當時の切支丹宗が如何なる教義を宣傳して居たかが解るのである。その邦語の譯文はまだ發見せられないやうだが、英文譯の方はステワルトのザビエー傳に載せてある。ザビエーは馬拉加より日本へ渡る途中、船の中で彌次郎から日本語を學んで居たのだが、何しろ三四ヶ月の修學では、まだ勿論未熟であつた。そこで彌次郎を指導して説教をなさしめた。第一に從來日本に行はるる教法は稗史、小説を根本としたるもので眞理でない事、第二には天主の誠令を説き、次に教法の數ヶ條を比較し理非を區別して説き示し、終りに人々の難問質義に答へたと西教史は記して居る。

或は云ふ、ザビエーは至る處にて其の國語を自由に語り得るの異能を賜はつて居たので、日本でも布教上言語には些少の故障もなかつたのだと。然るにザビエー自身の告

ザビエーの日本語

日本語の研究

白によれば、布教上國語を理解し能はざるの不便を痛く感じ、之が研究練習に従事して居たのである。曰く「若し我等にして日本の國語に通じて居たならば此の荒原を開拓するのは容易の業であらう。我等は晝夜の別なく彌次郎と共に、其の親戚朋友の間に奔走し彼等をして速に基督教に改宗せしめんとして居る。現今、我基督教に入つた日本人々は、皆堅固なる精神を有し、能く文字を解するを以て、速に基督の眞理を理解するに至つた。我等は布教上の便宜を得んが爲に、専ら國語の研究を務めつゝあるが故に、其の結果日本人民をして悉く基督信者たらしむるの日蓋し遠きにあらざるべしだ。唯憾らくは我等、今日にあつては、猶ほ木嶋人の如く、日本人が議論を仕掛けたり談話を試みたりしても、國語を解する能はざるを以て、遂に無言にして相別るゝのみだ。是故に我等は専ら國語を修むるの必要に迫られ、小學兒童となつて會話を練習し稍國語の一斑を伺ひ得た。此の異教國にあつて天主の聖寵の大なる此の如きは實に感謝に堪へない」と。ザビエーは其の後此の地に於て或る豪家の愛娘某女の頻死せるを祈禱によりて蘇生せしめたとの説があるも、それはザビエーに聖徒號を贈るに必要な証左として彼の死後殊更に捏造された小説的奇跡のやうだ、彼を崇拜する歴史家マツ

シユー如きは此等の奇跡を事實とするも、ザビエーにして知るあらば必ず之を否定するであらう。

鹿兒島で結ぶ
る初穂

鹿兒島に於ける基督教の結ぶる初穂は彌次郎の親戚故舊にして、それより次第に其の數を加へ、ザビエーが是の地に滞在一ケ年有餘の間に洗禮を受けし者百名乃至百五十拾名の數に達した。其の中一人の漁夫あり教名をベルナルドと云ふ、ザビエーに従ふて京都へ至り、又印度及び歐羅巴に赴いたが惜哉、夫の地に於て病死した。佛僧侶にして基督教研究の爲、又彌次郎の親戚にして視察の爲印度へ渡航し此處にて洗禮を領したるものもあつた。ザビエーは屢々佛教の寺院を訪問し佛僧等と交際して宗論をなした。禪宗の住持で博識の聞え高きニンジツトと云ふ老僧があつた、ザビエーは彼と親交を結び、しばしば往來して宗教談を試みた。一日ザビエーが是の老僧を寺院に訪ふた時、數人の佛僧等の端坐して冥想に耽りつつあるを見、怪で其の故を尋ねた。老僧答へて曰く是れは我が禪宗の要義たる座禪を修し、眞理を探究しつゝあるのだ。然れども今は眞面目に之を行ふものなく、彼等の冥想は何等の眞理に觸れずして徒に空想を追ひ、布施の多少、衣服の醜美、飲食の味不味、さてはあらゆる快樂の追求に餘念なく、空しく

ザビエー老僧
を訪問して宗
教談を試む

アルメーダと
老僧

く時間を消費するに過ぎずだと、それは座禪にあらずして耶禪なのだ。ザビエーの書翰にあらはるゝ所によれば、是の老僧は齡既に八十歳以上にして、其の名のニンジツトとは眞の心と云ふ意義だと云ふ事だ。彼は靈魂の不滅を信せず、人間の靈魂は其の肉體と共に消滅するものと云つて居た。彼は頗る交際を好み、ザビエー等が葡萄牙より六千有餘里の航路を渡つて遙々日本へ來り、神の教義を談じ、基督教の布教に熱心なるに敬服して居た。其の後數年を経て修道士アルメーダ Almeida が鹿兒島へ來た時、是の老僧は尙ほ生存し居て、アルメーダに會し、之に語つて曰く、余はザビエー師の説教を理解したいと望んだのだが通譯がなかつたので其の教義を解することが出来なかつたのは遺憾であつた。余は死するに先んじて洗禮を受けんことを願ふも、余の位置名望に妨げられて爾かなし能はざるのは残念であると、然るに其の後彼は他の佛寺の住職にしてザビエーの知己なる某僧侶と僧に秘密に洗禮を受けんことを望んだけれど、アルメーダは之を拒絶したと云ふ事だ。

ザビエーの傳道策は先づ其の國の主權者を説き其の允許と保護とを得て而して後ち廣く天下に布教せんとするものゝ如く、其の志は初より京都に赴き天子、將軍の勅許

ザビエーの傳
道策

を得るにあつたのだ。然るに彼が日本の西南の端にして京都より遠く隔つたる邊陲の地に上陸したのは、當時鹿兒島は外國船の往來する唯一の港にして、且つ彌次郎の故郷であつたから、他港に比して便利が多かつた故だ。されば、ザビエーは最初より永く鹿兒島に留まるの意思なく、時機を見て京都へ赴き後奈良天皇に拜謁することが其の宿志であつた。依て或時其の意を島津公に洩した、公は便船を仕立て其の志を遂げしめやうと約束したが、當時京都は戦亂の巷と化して、危険尠からざるを以て、暫く上京を延期して時機を待つこととなり、其の間此の地に在て語學を修め、教書を譯し、且つ布教に勤めつゝあつたのだが、爰に虞らざるの災害起つて是の地を退去せざるべからざるに至つた。

三 佛僧等の反抗ザビエーの退去

初め基督教の我國に傳へらるゝや、其の宣教使は皆印度を経て來朝したので、之を佛教の別派と思惟し之を切支丹佛法と唱へ、其の神を天主如來と稱し、又宣教使で佛教の服裝を纏ふて居た人もあつたので、佛門の者と同じく之を僧と稱した、鹿兒島の佛僧等も同様の考を以て宣教使を觀察し之と交際し喜で其の所説を聽いて居たが、其

切支丹佛教とは何ぞ

佛僧の反抗起る

の教義を研究する従ひ、之れが佛法の別派にあらざるを悟つたのみならず、ザビエーの傳ふる所の新宗教は絶対的の排他主義であるのを發見して、漸く不安の念を生じ、其の不品行を指摘攻撃せらるゝに至つて恐怖し、猛然起て反抗するに至つた。祖先の宗教たる神佛を排斥する所の宗教を容るゝのは國家の害毒であると主張して基督教を攻撃し、又謠言を放て宣教使を毀傷した。甚しきに至つては、血痕の附着したる襪を宣教使の住宅附近に投棄し置き、彼等は人肉を食する者であると誣いた。終に島津公に建言してザビエー等を國外へ放逐せんことを乞ふに至つた。當時島津公のザビエーに對する態度一變して頗る冷淡となつて居た。蓋し公の彼等を欺待して切支丹の教を許可したのは、幾分か彼等を尊敬するの念もあるにはあつたらうが、其の實宣教使を餌として葡萄牙船を鹿兒島へ引寄せ外國貿易より生ずる利益を專有して富國強兵の策を建てるもの素志であつたやうだ。然るに、事豫期に反し、葡萄牙商船の鹿兒島へ入港するもの次第に減じ、却て其の敵國たる肥前の平戸へ入港する船舶多きを加へたる由を傳聞し、不快の念禁ずる能はざるものがあつたのに、今佛僧等の建言に接し事態容易ならざるを覺り、遂に先きの公許を取消し、爾來切支丹を信奉する者は死罪に行ふべき

切支丹禁制となる

ザビエー平戸
へ向ふ

彌次郎の末路

旨を布達して基督教の布教を禁止するに至つた。爰に於てザビエーは親しく島津公に謁見して説く所あらんとせしが、形勢の非なるを視て、斷然是の地を退去するに決した。さうして後事を彌次郎に托し、ザビエーの一行は平戸へ向て發足した。是れ實に一五五〇年(天文十九年)にして鹿兒島に在りしこ壹ケ年有餘の後であつた。

フロエス師の書翰及びビントの日記によれば、其の後バウロ彌次郎は佛僧等の爲に痛く迫害せられ、ザビエー師に別れし後六ヶ月にして鹿兒島を去り、支那に赴き、ニッポー附近にて賊手に罹り殺されたと云ふ事だ。或は云ふ海外に奔り八幡船に乗込み、海賊軍に投じて戦死したのであると。然るに信徒は依然として切支丹宗を信奉し、領主も亦其の後しばらく宣教使を招待したので是より數年の後、一五六二年頃アルメーダ(修道士)が是の地を巡回せる時、熱心なる信徒あまたあつて教勢中々盛であつたと云ふ事だ。

四 ザビエー平戸へ赴く途次市來城に至る

ザビエー平戸へ赴くの途次、市來いちきに立ち寄つた。茲にミカエルと云ふ武士の信者があつた。鹿兒島にて洗禮を受けた者だ。ザビエー一行はミカエルの斡旋によつて島津

ザビエー市來
に立寄る

市來の城主と
は何人が

市來の教情を
報するアルメ
ーダの書翰

公の家臣にして市來の城主某の召を蒙り城内へ入つて布教し、城主の夫人及び其の世子を始め十七名の武士に洗禮を授けた。斯くて此處に留まること十有二日、去るに臨んで城内清淨の地を卜して教會堂を建設せしめ、安息日ごとに集會して問答書を読ましめた。ミカエルをして司會者たらしめた。市來の城主は何人なるか詳かでない、西教史にはイカンドノと記し、猪鹿倉いぐくら氏の事ならんかとあり、サベリヨ書翰集には單に伊賀守とあり、切支丹諸大名に記者は新納伊勢守だと云ふが、何れか是なるを知らずだ。ザビエーが此處を去つた後はミカエルが主となつて信徒を指導し、ザビエーの遺訓を遵奉して勤勉努力し數人の新信者を得た。其の後十二年を経てアルメーダが此地を巡回した時、親しく其の實況を視察して印度へ送つた報告書がある、其の大意に曰く、市來城主の城柵は甚だ高層にして頂上より下を瞰下すれば眼眸を眩感するばかりである。城の周圍をめぐる堀は甚だ深く。是れ皆人力を以て掘つたものだ。城柵の中央に天主臺あり之を本城と稱す。余は此處の客となつて厚き待遇を受けた。特に城主の奥方及びザビエー師が親しく洗禮を授けた所の十餘名の信者から最と鄭重なる饗應を受けた。彼等は皆一同集つて余にザビエー師の安否及び日本傳道一般の状況を問

ひ、其の旺盛なるを聞いて喜び合つた。彼等は久しく宣教使に會しなかつたので余の至るを見て痛く喜び、さまざまの珍らしい談話をなした。ザビエー師が去つた後はミカエルが主として信者を指導し、其の宣教によつて信者の數百餘名の多きに達した。彼等は天主の此地に行ひ玉ひたる様々の奇徳を余に語つて云へるやう、聖師が此の地を去られし時、遺し置かれた自筆の祈禱文及び讚美歌集あり、彼等は之を寶物の如く珍重して居たが、不思議にも、此等の書物を病人の頭上に戴かすると如何なる危篤の病人でも忽ち全癒しないものはなく、曾て城主の奥方が病で其の生命危篤に迫つた時も是の書物を頭上に戴いて快癒した。又聖師の遺物の一なる責身杖を以て毎週一回身體を鞭ちて責身の業を修め居た云々と。斯くてアルメーダは城内に於て布教し若干の人々に洗禮を授けた。城主の子息二人も亦其中にあつた。其の中に一人の學識あるものあり、アルメーダより聽いた所の教を悉く筆記して一書を著した、是の者は城主の次男某と共に信者の指導者となり、主の日及び祝祭日には信者悉く相會して基督傳中の一章を読み交る／＼談議した、彼等信徒間の交際は極めて親密にして其の信仰の熱心なるには驚くべき程であつた、城主も亦基督教を信奉したい志あれど其の主君を憚つて

ザビエーの遺物を尊重す

洗禮を受くるに至らなかつた。

第貳章 ザビエーの遊説

附 平戸、山口、京都、府内の布教

一 平戸から京都へ

切支丹に關聯して最も有名なる平戸港は肥前國北松浦郡なる平戸島の一港にして昔時より日支兩國交通の要津である。葡萄牙船の初て平戸へ來航したのは後奈良天皇の天文十八年の冬にしてザビエーが鹿兒島へ上陸してより二三ヶ月の後であつた。ザビエーが曾て鹿兒島より是の地へ來たことがあるやうだ。其の一五四九年十一月五日附の第壹回の報告書は是處へ來航した葡萄牙商船に托して歐洲及び印度へ發送したものであると云ふ。平戸港は其入口に岩石又は淺瀬多くして航海に危険であるとはいへ、一旦入港せば風雨の艱を避くるに屈竟の良港であるので商船は爾來是港に往來し貿易市場を開始して繁榮を極めた。是の時より以後明正天皇の寛永十七年に至るまで、九拾貳年間我國歐洲貿易の門戸であつた。さてもザビエーは鹿兒島を退き市來を

平戸に就いて

ザビエー平戸に至る

經て平戸へ達するや、在留葡萄牙人は喜で之を迎へ、聖師を遇すること極めて厚く、祝砲を放て其の安着を祝した。其の登城するに當りてや、盛なる行列をなして彼を護衛し大に敬意を表した。平戸の領主松浦隆信はザビエーを見て大いに喜び彼を遇すること頗る鄭重を極め最も寛大なる條件を附して布教を許可した。人々争ふて其の教を受けた。蓋し上流社會の士人は政略上よりザビエー等を欵待し、下流の衆民は上流社會の人々に習ふて彼等を尊敬したに過ぎなかつたのだが、それでもザビエーが是地に留まること僅に數週日にして得たる信者の數は百有餘にして、鹿兒島に於て一年間に得たる信者の數よりも多かつた。説教は稍日本語に通じたフェルナンデ之に當り、或は翻譯書を以て教義を傳ふるに勤めた。ザビエーは此の如く平戸布教の好成績を見て大に望をぞくし、松浦氏の如き小君主の威光に頼つてさへ、斯る好結果を來すのを見れば、日本全國を統御したまふ天皇の許可を得、其の庇蔭によりて布教せば、日本全國を動かすこと敢て難きに非すと信じた。一日も速に京都へ登り、天皇の勅許を得たいと思つた。そこで此地の布教をコスモ、ド、トールに托し、ザビエーは修道士フェルナンデ及び二人の日本信者を伴ひて平戸を發し、一五五〇年(天文十九年十月下旬)

平戸宣教の成績

ザビエー博多山口を経て京す

陸路博多へ至り、此處にて或る禪宗の寺院を訪問して教義を宣傳した。佛僧等が未來の生存を信せずして死者の爲に供養をなし布施を受くるの不當なるを詰責し、且つ痛く其の不品行を誡めた、博多より船にて周防の山口に至り此地に留つて布教すること一ヶ月有餘にして、千五百五〇年の十二月山口を發して京都へ登つた。途中因難の狀況は西教史に詳記してある、左に之れを引照する。

旅行の困難

「諸聖師は九月下旬(十二月の誤か)を以て山口を出發せしが、其の地にては此月既に嚴冬の氣節にして積雪街衢を理め、居民は家を出ることを得ず、僅に檐下に沿ひて往來するのみ、殊に風はげしく其危険なること海上の颶風に於ると同じ、其他江水の氾濫し林木の深鬱たる所を經過するの難あり、殊に其頃皇帝と將軍との間に事故ありて軍兵道路に充塞せしが、聖師、師徒は又路費を充分に所有せず、途中大に生計に苦めり。而るに嚮きに平戸の商人等が金圓若干を聖師に供給し又印度の總督より資金及び日本皇帝への進物を調達する爲め葡萄牙王の儲金千「エキユ」(「エキユ」は「三フランク」)を聖師の許へ送達せしが聖師は商人の恩金を受けず、葡萄牙王の金を以て貧困なる耶穌教徒及び洗禮を受けし日本人の需用に給與せり。斯くて聖師、師徒極寒を凌ぎ艱難を経て

旅行せしが、途中諸川又は出水の場所を涉り、三人共に嚴寒を凌ぐべき衣服を着せず、食はベルナルドが懐ふところに糲ふとろを蓄へしのみにて、一日日夕に驛遞よこしまに入れども肢體凍冷し、食物を缺き大に疲勞し旅舎を求めしが、其貧窶せむしの態なるを看て何れの家に於ても投宿を肯ぜざりしにより、三人は已を得ず村内に露宿せしが、幸ひ敝屋を見出し、漸く風雨を凌ぐことを得たり、然れども三人の最も困厄せしは道路を熟知せざりしによつて、多く途に迷ひしことなり、一日深林中に於て路を失ひしが、京へ行く騎馬の人に出會し、聖師は其人に對し其行李を擔ふて隨行すべしとて、三人の者を引誘することを依頼せしに、忽ち承領し、其の行李を聖師に渡し馬を馳せて進行す。聖師、師徒は其れに従ひて疾行し、叢棘中を經過し、大に膝を傷つく、是の如きこと數日に及べり。

聖師同行の二徒は遙かに後れて進行せしが、聖師が騎者に棄てられし所に於て追及びしに、聖師は大に疲勞し、漸く立を得し程にて、荆棘、石塊等の爲に足を傷き兩足とも血に染み、殊に寒氣に冒され腫れたる膝を幾個所に於て突き破れり。然れども聖師は此の難苦に屈せず進行し、途中常に聖歌を詠じ同行の者を獎勵する外歌聲を輟め

旅行中のザビエー

實に其經過せし艱難を知るものは生命を失はざるを怪めり。偕とも聖師は如何なる艱苦をも厭はずと雖ども山口を出るの一月後堺に至りし時、大寒熱に罹り、遂に病床に就くを以て、同行の者は藥を服することを勧めしに聖師は更に其の意に従はず、唯命を天に任せしが、幸に平癒せり。

斯くて聖師は病漸く恢復し猶身體衰弱せりと雖ども更に厭はず再び途に就き、府邑を經過する毎に經書を講じ、其間三偏つゞデウス、デウス、デウスと唱へ、嘗て説教をなさざることなかりき。蓋しデウスと云ふは拉典語にて神と云ふ義なり、聖師は日本語に於て適當の辞を見出さず、教徒が神佛の名と眞神の名を混用せんことを恐れ、眞神を指名する爲め故こゝさらには是語を用ゆ。而して日本人等は聖師が敝衣を着し狀貌の醜惡なるを見て、曾に其説教を聴かざるのみならず、聖師に對し種々惡口し、甚しきに至りては、デウス、デウス、デウスと言て嘲弄し、聖師に向て瓦石を投ずるものあり云々。

ザビエーの佛教信者に對する攻撃は鹿兒島以來頓に激烈となつた。其の破邪顯正的言動は大に佛僧等の憤怒を招いた。彼は堺に於て公然日本の諸宗派を誹謗し諸神を嘲

ザビエー嘲笑せらる

悔する者と看なされて、しばしば害されんとした。就中佛教徒の爲めに捕へられ、市外で、石にて撃殺されんとした事が二度あつたとは、其の當時は末信者で後に切支丹信者となつた堺市の人が傳へた談だ。ザビエーは堺市の某氏に宛たる紹介状を持つて居た。幸ふじて其の人を見出した。さうして其の人の幹施によつて戒嚴令の布かれたやうな取締の嚴重なる往來を無難に通過して京都に登ることを得たのである。

二 京都に於るザビエー

是有名なる都府は日本國の首府及び宗教の本山にして皇帝及び天臺座主の城地である^{この}と聞き、ザビエー聖師は其地に於て基督教を宣布し、十字架の旗を立てんと期待し居たのだが、實況を觀察するに於て大に其の意外なるを發見して驚いた。京と云ふ字は日本語で大に觀るべきありと云ふ義の由なれど、兵火に罹つて府下頽廢し、今は唯古の影跡を残すのみだ、其の頃も又將軍の叛逆により府下尙ほ擾亂し、將軍に同盟した諸候等は皆其の領國へ退去した。是故に聖師は其企望を行ふべき時機にあらざることを知つたのだが、尙ほ將軍及び皇帝に謁見せんことを渴望せしも其身の貧寒なるを以て衆人に擯斥せられ、屢々宮闕へ伺候せしも、宮人等は其の謁見を取扱ふ爲に佛國の六百

「エキユ」に當る日本金壹萬「カイツ」を求めた。此れはクラツセの西教史にあらはれた京都の狀況だ。ザビエーは其の書翰の中に恚う述べて居る。日本國の首府たる京都は昔時十八萬人以上の人口を有して居たが今は拾萬人に過ぎない。建物も大に破壊して見る影もない。此の國の天子將軍には妄りに拜謁を許されない。時として拜謁を許さるゝことあるも、之れが爲め大金を費さねばならぬのだ」と。同行者の一人修道士フエルナンデの傳ふる所によれば、是時天子へ拜謁の取次を願つた人より進物の有無を尋ねられた故、拜謁の許可をさへ得ば、直に平戸より進物を取寄すからと答へておいたのだが、満足を與ふことが出来なかつたと見え、何れの時、拜謁の許可を得べきか殆ど知るべからずであつた。因てザビエーは其の間日々市中に於て新宗教を傳へしも、引き続きいた戦亂の爲め人心恟々として堵に安んぜずと云つた風で、切支丹の説教を珍らしきものとして聴聞せしも敢て深く意に留るものはなかつたと云ふ事だ。ザビエーは京都へ來て以來、皇帝に拜謁して新宗教宣布の許可を得んと試みしも、容易に拜謁を許されず。又日々市中に出でて福音の宣傳に努めしも、戦亂其の他の妨害あつて耳を傾くる者もなかつたので、大に失望したやうだ。斯る狀況であつたので、ザビ

エーが傳聞によつて其の心に想像して居た帝都と、實際目撃した京都の實況とは、殆ど霄壤の差があつたのみならず、つらく日本の實情を視察するに、今や普天の下も王土あらざるの地多く、卒士の濱亦王濱に非ずで、天子將軍の命令は日本全國津々浦々にまで行はるゝものと思惟せしに、事豫想に反し戰國優亂の結果其の主權の所在さへ明ならず。天皇の勅命、將軍の教書も、五畿内以外には殆ど其の効力なきを認め、斯くては幸に勅許を得るも其の詮なく、寧ろ西國の權威ある諸侯に頼るに若かずとし、京都に留まること僅に十有五日にして退て堺に至り、其れより舟にて平戸へ還つた、蓋し其の目的は山口候大内氏により布教の便をはからん爲めであつた。

ザビエーの一行が京都に到着したの一五五一年一月即ち我朝の後奈良天皇の天文九年十二月で、其の頃十四代將軍義輝は近江に走り、三好長慶が其の族三好宗三及び細川晴元等と相争つて居た時で、京都は最も混亂の巷ちまたと化して居た。應仁の亂後足利氏の威權大に衰へて居たが、其の時に當つて其の衰微倍々甚しく、中央の權力全く弛み、綱紀の紊亂其の極に達した。地方の豪族互に相争奪して各々獨立の姿となり、復た天子、將軍の威權に服せず、主權の動搖と共に皇室の式微も亦其の極に達した。地方

ザビエーが京
都へ来た時

皇室の式微

の御料地は多く武家の横領する所となり、朝廷の祭祀、節會等の諸儀式の如きも勿論停止となつた。御大葬、御即位式の如き御大禮さへも費用缺乏の爲に容易に行はせらるゝことが出来なくて、漸く勤王の諸侯若くは本願寺の献金により辛ふじて舉行せられたのだと云ふ事だ。慶長軍記抄若くは老人雜話などいふ書物には禁中の微々たること邊土の民屋に異ならずとあつて、天文四年二月、日華門及び同廓大風に吹き倒され、て以來、修築の如き事は勿論行はるべくもあらず、築塙もなければ、竹の垣根に茨など結び付て外圍となしたれど、處々破れたる所より兒童等入込み禁中の御椽にて土こねなどして遊び紫宸殿の御築地やぶれ、三條の橋のほとりより内侍所の御あかしの光見え、右近の橋の下で茶を煎じて賣る老人があつたと云ふ。又後奈良帝の御親筆を賜はつた事の多かつたのは、當時銀に紙片をつけ、百人一首とか、伊勢物語とか書いて御簾に結ぶつけ置き、日を経て參れば宸筆をそへて差出されたのだと傳へて居る。果して然ば皇室の式微千古無比の時代であつたのだ。皇宮でさへ然りだ、況哉普通の民屋に於ておやで、京都市中の荒廢は眼もあてられぬ程のみじめな狀であつたのだ。應仁の亂後打續く戰亂で全市殆ど兵燹にかゝり、蕩として廣原の如く、盜賊横行、亂

民跋扈、軍兵も亦亂暴狼籍を逞ふしたので市中の混亂、市民の不安は想像の外であつた。ザビエーの目撃した京都は斯る混亂、荒廢の巷であつて、彼が其目的を達し得なかつたのも亦止を得ないのである。

三 山口に於るザビエー

初めてザビエーが平戸を發足せしより、其の再び歸り來るまで、其間數閱月に過ぎずと雖も、平戸の教勢は次第に發展し、バプテスマを受けたものも數拾名あつた。然れどもザビエーの志は政權を利用して速に布教の効果を見んとするに在れば、それには當時西國大名の中にて威權赫々たる大内氏に頼るを最も便宜なりと思惟した。そこで平戸の傳道は依然トレーに一任し、ザビエーはフェルナンデ、及びヘルナルトを伴ひ山口に赴いた。日本人は外形を重んじ富者は勿論、貧者でさへも服裝の賤しき者を輕蔑するの風があるから襤褸の法衣では、到底日本人の尊敬を得る所以でないと、忠告せられ、彼は從來身に纏ひし敝衣を脱し、新調の衣服を着け、盛裝して山口の領主大内義隆に謁した。彼は印度總督並に臥亞の監督より托されたる書翰并に洋琴、時計、遠眼鏡、美麗に表裝した書籍及び其他の物品を献上した。義隆大に喜び、ザビエ

ザビエー山口に謁見す

ザビエーの獻上品

ーを引見して厚く之を遇し、直に切支丹の布教を許可し、且つ贈るに黄金を以てした。ザビエー辭し受けず、即ち廢寺を興へて其の説教所とした。廢寺とは即ち有名な大道寺の事だ。其の後四ヶ月にして切支丹宗門許可の布告は山口市の辻々に高く示された、是時ザビエーが贈呈したる時計及び洋琴は我國に始めて舶來せし品々にして、本邦古記には天竺より渡れる珍器なりと云て之れを珍重した、義隆記には是珍品を評して天竺人より贈れる種々の物品には響鐘の聲に應じて十二の時刻を報ずるに晝夜の長短を違へず。又十三の琴の經調を用ゐざるも五調子を奏し十二調子を吟じ得る不思議の樂器、并に老眼のものにてもいと鮮明に形影相照らして、永く曇りを生ずるの患なき鏡二面あり、其の外世に不思議なる珍寶數種なりし云々と記してある。

是より先き、ザビエーは京都へ赴くの途次、山口に立寄り、大守大内義隆に謁見し、基督教宣布の許可を請ふたが、要領を得なかつた。或は貴族の邸宅を訪ひ、又は市中の四ツ辻に立ち、盛に切支丹の教義の宣傳せしも、唯徒に群衆の嘲笑を招いたのみで毫も其の効がなかつた。當時説教はフェルナンデ之に當り、其の熱心に述べた主意は、眞神を忘却して偶像を拜することの罪なる事、男女間の操行壞亂せること、婦人墮胎の

基督教の説教に對する市民の嘲笑

罪、男色の醜行等であつたが、山口の土民は之れを聽て其の頑固なるを嘲り、其の言語の侏離にして其の衣服の敝惡なるを笑ひ、市中の童子は彼等の後に追従して、爰に一神一妻の説を唱る外道の愚僧ありと喧呼するに至つた。さにとザビエー等は今日涙を垂れて福音の種子を播くは後日に至り收獲の喜を得んか爲だと思つて、聊か慰むる處があつたのだが、今や再び其の地に來り公然宣教の許可を得たるは感謝に堪へざる次第であつたらう。

ザビエーは基督教宣布の免許を得たから、今は何等憚る所もなく毎日貳回づゝ城下に出て路傍に立つて説教して居た。忽ち群衆は四方より集り來つて新宗教の説を聽いた。又ザビエー等の住宅へ押しかけ來つて質問、論議する所があつた。西教史に記する所によれば、或者は權謀にして其の主君に倭せんが爲に、又或者は宣教使等の行爲を視察し、且は其の所説を研究せんが爲にして、就中佛教の僧侶等は新宗教の教義を研究すべき目的を以て來つた、而して最初は佛僧等もザビエーを見て頗る満足の意を表はして居たが、彼等の沈溺する不義不徳を指摘して正面より攻撃せらるゝに至つて怒を含み、ザビエー等を害し、其の宣教を妨害すべき策略を企圖した。然るに、諸人

ザビエーの路
説教フェルナンデ
の熱心群衆を
教化す

はザビエーの住居に群衆して種々の質問を爲し夜の耽けるのを知らないといふ風で、ザビエーは之れが爲め時間を消費し宗教上の勤行をなすの逸さへなかつたといふ事だ。

さてザビエーの熱烈なる説教も數日の間更に其の効が見えなかつたが、爰に偶然の出來事起つて數多の回心者を得るの動機となつた。其の次第は一日フェルナンデは市街繁華の場所に立て常の如く熱心に教を説きつゝあつた、數多の人々忽ち集り來つて其の周圍に群集し、道行く人も歩を停めて聽聞した、貴顯の土人も多く其の中に雜集して居た。斯くてフェルナンデの言論ますます、熱烈となり至誠面にあらはれける、一心不亂の態度は少からず聽衆を感動せしめた、さうして其の所説の妙所に至るや、人々覺えず感嘆の聲を發し、將に熱狂せんした、其の刹那突然群衆の中より跳り出でたる惡漢があつた、乍ちフェルナンデの傍に走り行き、大聲を發して、嘲罵し、此の外道奴と罵りながら、忽ち其の面に唾して去つた。群衆は手を打て之れを笑ひ、且つ窃にフェルナンデの態度を伺つて居たが、意外にも彼は更に動ずる色なく、從容として靜に手巾を出して其の面を拭ひ、毫も暴行を意に介せざるものゝ如く、更に説教をつづけ

一紳士の回心
より延いて五
百人に及ぶ

て居たので、見る者其の温厚にして忍耐ぶかきに感服した。此の時聴衆中に一人の紳士が居た、彼は平常痛く切支の教を排斥して居たが、此の場面に於るフェルナンデの態度を目撃して深く其の忍耐寛容の精神に感じ、説教の終つた後、直にザビエーを其の家を訪ひ、切支丹の教義を質問し、遂に回心して洗禮を受くるに至つた。この事一たび市中に傳はるや、此の時まで他人の思惑を憚りて逡巡し、其の信仰を秘して居た者共は、皆争ふて新宗教に歸依し、二ヶ月間に洗禮を受けるもの五百人の多數に達した、その中に一人の青年あり。魯連須と云ふ、彼は元來佛僧にして學林に學んだ者だとも云ひ或は辻講談を渡世とせし琵琶法師であつたとも云ひ、その素生に關しては種々の異説あるも要するに、彼は聰明にして學識あり、才氣發辣、辯舌、爽なる人物であつた。吉利支丹ものごと譯等の書に、肥前人魯連須と稱し宣教師の通詞たりし人ありと云ふは同人の事だ。彼は此時より耶蘇イエス組派に入門し、爾來三拾年間宣教師の通譯となり、又傳道師として九州から近畿地方に活躍し、信長の御前に於て基督教を説き、又は數多の諸大名を説服して切支丹に歸依せしめた人だ。これより山口に於る基督教はますます盛大となり、信者三千人を數ふるに至り、内藤隆世ながよの如き名門の士も其の教を受くるに至つた。

佛僧の反航

四 山口の佛僧とザビエー

切支丹の隆盛なるを見て不安の念を起した者は佛僧であつた。彼等は種々の謠言、蜚語を放て切支丹の排斥を試み、遂に領主に言上してザビエー等を讒訴し之れを放逐せんことを乞ふた。義隆之れを聞き切支丹公許の爲め佛僧等の反抗を招かんことを掛念したのであるが、流石ながいしに外交に經驗ある彼は、印度總督の使節として來山したザビエーを故なくして追放することも爲し難く、又一方にはザビエー等より天文、地理に關する新説を聽いて其の博識に感服し大に尊敬の意を表して居た士人も多かつたので義隆は陽に干渉する事はしなかつたが、陰に切支丹信者を苦めたといふ事だ。

ザビエーは至る所にて佛教を批評し、佛僧等の不行跡を指摘して用捨なく正面より之れを攻撃した。彼の佛教に關する知識は幾ばくの程度なりしや知るべからざれど、思ふに彼が印度にて接觸した人々はブラマ教又は佛教の徒に非ずして、蒙昧蠻野の愚民に過ぎなかつたので、彼は佛教に關して何等學ぶ所がなかつたのは明白だ。されば佛教に關する彼の知識は日本に於る佛僧等の所説、又は改宗者の説によつて知つたものなれば、固より深奥なる教義に觸るるに由なく、所謂俗間的佛教であつたらう、されば

ザビエー盛に
佛僧徒を攻撃す

其の程度も知るべきで其の攻撃は往々にて緊背に觸れず、爲に佛僧等の嘲笑を招いたこともあつたらう。されど彼が佛僧等の不徳、不義の行爲を指摘して之れを詰責するに至つては、其の鋭鋒當るべからざるものあり、爲に僧侶等をして顔色なからしめた是れ其忿怒を招きし所以である。その攻撃や痛快なりしならんも、徒に佛僧等を憤らしめ、爲に布教上の妨害を招いたのは、傳道の方法として其の宜きを得たるや否やは頗る疑問であるが、蓋し勢止を得ざるものがあつたのだらう。

當時山口は西國の雄藩で防、長、豊、筑、藝、備、七州の守護たる大内氏の城下にして、その人口五萬、支那、朝鮮貿易の門戸にして其の繁榮中國第一の都會であつた。應仁の亂後、京都の月卿、雲客の亂を避けて來り投ずるもの多く各宗の名僧知識も亦多く集り鴻城市街は長袖圓顛の群居する所となり、文物鬱然として興り。恰も日本文明の中心たるの觀があつた。城主大内氏は足利將軍義教（六代將軍）以來明國勘合印を掌つて居たので、常に私船を出して盛に支那貿易を營み、之によりて海外の利を得るのみならず、明國と交通の結果、その文明を輸入し文教亦大に起つた。夫の朱學の開祖桂庵及び南學の祖南村梅軒等が、此の地に生れたのは決して偶然ならずと云ふべきだ。而して

山口の繁榮と
其の文明

山口の最も盛なりしは義興の時代であつたが、其の子義隆嗣ぐに至り、先代の富強を受けて漸く奢侈に流れ、文弱に陥り、大内氏の社稷將に傾かんとするの兆があらはれたとはいへ、義隆の學問に熱心なる廣く書を海の内外に求め、一切經の如き之を朝鮮に得、又王朝の儒家清原伊治が傳ふる所の新註の四書五經を得て、之を明國及び朝鮮に於て印刷せしめ、諸臣と共に之を輪讀し、又他の良書を得て之を印刷せしこと尠なからずで、所謂大内版がそれである。又其管下の僧侶に訓告して修學を勧め、學問を奨勵をしたる結果、僧侶、士人の儒學を修め佛學を研究せしものも多く出でた。義隆は文弱を以て遂に國を喪ひしと雖も、戰國初期に於る鴻城文物の盛は、百世の下、人をして艶羨に堪へざらしむるものがあつたと云ふ。ザビエーにして幾分にも佛教若くは儒學に關する知識を有し、通譯その人を得て學僧、士人と議論を上下したならば、爰に東西哲學、宗教の論戰を開き前古未曾有の偉觀を呈したのであらう。

ザビエーは佛僧等と正式に問答をなさなかつたと雖も、その宣教を山口に開始するに當つて、新宗教を研究する目的を以て來訪した佛僧學者の嚴しき難問、質議を受けしが如く、流石のザビエーも日本人の聰明と、佛僧等の學識とを認めたるものゝ如

ザビエー日本
人の聰明と學
問とを認む

日本に派遣す
べき宣教使の
資格

く、彼が耶蘇組派の總長ロヨラの許へ送つた書翰中に、日本に派遣すべき宣教使を精選すべきを力説し、其の資格を述べて曰く、身体強壯にして能く氣候に耐へ、堅忍不拔の精神を有せざるべからざること、(一)人物聰明にして、神學上の知識充分なる人ならざるべからざること、(二)天文學及び其他の學問に精通する人ならざるべからざること、(三)信仰堅實にして能く迫害に耐へる者ならざるべからざること、(四)道徳圓滿、言行一致の人ならざるべからざること、(五)就中、學識豊富なる人物の必要を述べて曰く、日本國に善良にして學問に上達したる師父を派遣せらるべしと云ふ所以は、他なし、此國には確實なる人物あつて、學識は乏しきも皆正實なる考案を持て居る、而して此等の人々と議論して其謬見を辯明するや、彼等は種々の書物を調べ來つて議論を新にせり、且つ年久しく勉強したる學士あり、此等學士は我等が宣ぶる教義に就て頻りに質問する所あり云々。又彼は佛教研究の必要を認め、山口に耶蘇組派の大學を設置し、宣教使をして日本語を學ばしめ、且つ佛教諸派の研究をなさしめ、日本に於て佛教の學校と相匹敵するに至らしめんとの計畫もあつたのである。

ザビエーが山口に在留中、洗禮を授けた五百名の改宗者は固より新宗教たる切支丹

ザビエーの天
文學

の教義に感服して信仰を起せしものならんも、若しその改宗者中に僧侶、學士等があつたとせば、彼等はザビエーが説いた所の教義に感服せしよりも、寧ろその所有せし所の學識、就中天文學上の知識に敬服し、其結果としてその説く所の宗教を信ずるに至つたものらしい。「日本人は他國人よりも能く道理に通ずるの性質を有して居る、彼等は學問を好むも、未だ地球の圓體なること及びその運行の理を知るものがなかつたので、我等はその理由若くは雷電等の起る所以を説明せしに、彼等は熱心に之を聽聞し、殊に上流の學士等は之が爲め吾等を尊敬するの念を起し、尙此の説の蘊奥を研究せんと喜び居たり。我等は學問上の便宜によつて國民一般の心に我が宗教を悟らしむことを得た」とは、ザビエーが其報告書中に述べし所だ。當時ザビエーが有せし天文學上の知識は今日より觀れば寧ろ憫笑すべき幼稚な學說であつたにしても、彼は此の知識を利用して比較的無知なる日本人に對し、地球の圓體なること、彗星のあらはる、所以、さては雷電、風雨等の原因を説明し得たるを誇りとしたのであらう。されど、ザビエーの天文學は舊説にして此の彈丸黒子の如き地球を宇宙の中心となし、太陽を始め夥多の星宿其の周圍を廻轉すとなしたるフトレミ式の學說であつた。蓋し有名な

る學者コバルニカスの天體の運行と題する書は、ザビエーが印度に向て歐州を發足せし二年後の一五四三年に刊行せられて、歐州の學界を震動し。又ブトレミ派正統天文学の學說を打破せんと試みたるガリレオが宗教裁判所に引き出され、その恐怖すべき天文学上の異端邪說を放棄すべしとの宣告を受けしは、それより九十年後の一六三三年であるからだ。さはいへ、ザビエーの天文学上の知識は日本人のそれに勝つたものがあつたので、學者多く之に敬服し斯る高尚なる學問上の知識を有する人の説く所の宗教にも必ず眞理なかるべからずと思惟し、進で新宗教に入つたものも尠なからずあつたやうだ。

五 ザビエー退去後の山口の教情

斯て山口の教勢次第に隆盛に赴きつゝある際、偶々葡萄牙の商船一艘豊後に來れりとの報知があつた。ザビエー則ち船長へ宛て一書を裁し、日本信徒一名を遣はして之れが消息を問はしめた。然るに、船長及び葡萄牙人等は素よりザビエーを崇拜して居た者なれば、其れの健在を聞て大に喜び直に返翰を贈つて聖師を迎へた。其と同時に豊後府内の城主大友義鎮も葡人より聖師の高徳を聞て之れ慕ひ、言を卑ふし禮を厚くし

ザビエー山口
を去る

て彼を招待したのでザビエーは一先ヅ山口を退去するに決し、平戸よりコスモ、ド、トレーを招いて之れに山口の布教を委托し、フェルナンデを留めて之れが補佐となし、己はベルナルド以下の基督教徒を伴ひ、一五五一年の九月中旬山口を發足して府内へ赴いた。

山口の内亂

ザビエーが山口を退去したのは日本曆の天文廿年(一五五一年)八月上旬であつたが、同年八月廿八日大内氏の家老陶隆房の亂起り、山口大に亂るゝに乘じ、佛教徒の切支丹信者を害するあり。トレー等も亦其の難に遭つたが、家老内藤隆世及び其の夫人の被保により避難して殺戮を免かるゝを得た。既にし義隆敗れて自殺し、大友義鎮の弟八郎義長、陶氏に迎へられて大内氏を嗣ぎ、山口の城主となるに及び、稍小康を得、其の保護によりて基督教は倍々盛になつた。

山口縣史及び大内氏實錄によれば、天文十九年の八月頃より山口の國主大内義隆の家宰陶尾張守隆房同僚杉重成と睦じからず、且主義隆が重成の讒言を容れたるを怒り、八幡宮の祭禮の時義隆を途中に狙はんとせしため城下大に騒ぎしも、後、事釋け平和に納まりしか、尾張守年老ひたれば隱居せんと許りて其領地なる常田に歸り、竊かに若山城を修めて將になす所あらんとす、天文二十年八月陶尾張守隆房竊に淺竹彌五郎を

使者として豊後の國主大友義繼の次男八郎を迎ふるの約を爲し、廿八日尾張守兵を率ゐて山口を襲ひしかば義隆遁れて法泉寺に至る、然るに尾張守の兵、翌廿九日を以て法泉寺を攻めたるが、義隆棄く罷はず、遂に軍破れしかば辛ふじて遁れ出で長門を指して走り、翌三十日大津郡深川村大寧寺に於て其子と共に自殺す、大友八郎は兄義隆の危ふんで諫むるをも顧みず、尾張守の乞に應じ、翌天文二十一年の二月十一日豊後を發し、三月一日周防國佐波郡多々良濱に着き、大内氏の祖先淋聖入國の例に倣ひ一日間此處に止まり、同三日を以て山口に入り大内を襲ふて名を大内義長と改めたり、其の後數ヶ月を経て陶尾張守晴堅(隆房の改名)と同僚との紛議も全く落着せしかば四民始て安堵するに至りたりと。

陶晴堅の反亂の際、山口に居たフェルナンデがザビエーに報告した書翰中に遭亂の記事あり、左に之れを轉載す。

我等は是の騷亂の時殆ど殺害せらるべき危険に遭つたが、不思議にも免かるゝことを得た。此の戦亂の爲め山口の市街は一週の間、晝夜とも焼けつゞけ、炎々たる火煙は天を覆ひ、淋漓たて鮮血は地に流れ、ものすさまじき事云はん方なしで。暴徒等拔扈し人を殺すこと無數であつた。平常我等を憎み我等が財産を奪はふとする者共は、是の機を利用して我等を殺さうとして搜索すること頗る急なりであつたから、我等はいそひで衣服などを匿した後、アントニヨ門弟を内藤殿の許へ遣はして

山口内亂の際
に於ける宣教
使の避難

相談したら、我等一同ひとまづ其の館へ來るべしとの事であつた故、直に館を指して赴いた、其の途中威嚴しく裝束したる數多の武士共に遇つた。彼等は我等を指して此奴等こそ這次の騷亂を惹起せし悪魔だ、我等は是奴等を殺さねばならぬのだ、何ぜなれば此奴等は常に大言して石及木の像は人を救ふの力なきものだ云つて口を極めて言つたからだ云つて居た。かくて我等は辛ふじて途中の難を通れ、無事に内藤殿の館に着いた。其の時夫人は我等のために或る寺院の座敷を借受けられたが、其の寺院の僧侶等は平常我等を仇敵の如く思つて居たので、我等に宿を假すことを喜ばなかつた。さうして悪魔を居らしむべき座敷はないと云ひ、或は天主は何故に此の危難を救ふて安全なる天國へ招かないのだなど嘲つて、容易に座敷へ入ることを承知しなかつたが、内藤夫人の倚頼もだし難きと、我等を此の寺へ案内したる僧侶の懇請により詮方なく我等を堂の片隈に入れて呉れた。斯て是處にあること二晝夜にして、再び内藤氏の館に至り一室の中に匿れ、擾亂の終るまで此處に留まつて危難を免かれたのだ云々。

山口にて一五五一年十月二十日

ザビエー豊後に至り大友義頼に謁見す

六 豊後府内に於るザビエー
扱てザビエーが豊後府内へ到着したのは一五五一年（天文廿年）の九月下旬なるべし、在留葡萄牙人は彼を歓迎するに王侯貴人の禮を以てし款待至らざるなしであつた。彼が登城して領主義鎮に謁見するや、説くに基督教大意を以てす、其の所説の新奇にして其の態度の熱誠なる、深く列席の君臣を感嘆せしめ、破格の待遇を辱して直ちに布教の免許を受けることを得た。是れ實に後に九州基督教の中心となつた豊後傳道の始である。

豊後の葡萄牙人ザビエーを歓迎す

ザビエーは一五五一年九月中旬徒歩して豊後に至る途中日田港より程遠からぬ處に至つて突然病に罹り一歩も進むことが出来なくなつた、そこへ葡萄牙商人等來つて師を迎へた。其の詳なる事情はメンデスピントの日記中に記載してある。曰く、我等は途を往くこと僅にして二人の従者を連れたる聖師に出會した、其の従者の一人は一ヶ月以前信者となつた爲め其の國主より二千金許の價値を有する官錄を刺奪せられたる周防の藩士であつた、聖師は身に粗服を纏ひ、彌撒祭の諸道具を背負ひ、徒歩せられたので、二人の信者交るゝ其の荷物を背負ひつゝあつた。正裝して乗馬に跨りたる吾等奉迎人の面々は、皆其の粗略なる風采に驚いた而して聖師に馬を進めしも聽かなかつたので、我等も徒歩すべしとて下馬した。聖師は之れを止めたまふ

けれども、我々奉教人は皆徒歩することにした。かくて聖師の日田村に着き給ふや、葡萄牙人は大に喜び船に登載せる大小砲合せて六拾三發を放つて祝意を表した。砲聲山岳に響き其の音轟然として天地を震動する許りであつたので、市民は何事の起りしかと皆々懼れ戦いて居た。國主は彼の葡萄牙商船が海賊に擄はれて相戦ふのではないかと、其の事實探索の爲め直ちに一人の家老を派遣し、若し戦急なれば何時にても加勢を遣はすべしと申傳へられた、船長は其の厚意を謝し、吾等が斯の如く發砲せしは我が葡萄牙皇を始として我々一同が最も尊敬する所の大聖人フランシスコ神父の來着を祝するが爲めの儀式にして、彼の音は皆空砲の聲である云々と答へたのに。家老は聞きて大に驚き、ガマのエドワード氏に語つて曰く、余は國主に對し復命に苦む所がある。嘗て佛僧等の言に貴下等が聖人と稱する其の人は當に惡魔を使用して不思議なる術を行ひ愚民を惑はし、且つ惡魔と對談し、又其の身に繁殖せる一種の虫があつて、實に厭ふべき不潔汚穢の法船であると語つたことかある。若し國主が是等の言は佛僧等の譏謗にして事實無根のことを覺られたならば、今後再び佛僧等を見て其の言を聞くことなく、彼等に對する今日までの信用も地に落つるだらう。余今親しく貴下等が尊敬と歡喜とを以て奉迎したる人を見るに、佛僧等が嘗て國主に言上した所と違ひ全く貴下の言の誤なきを悟つたと述べたと云ふ事だ。

使者歸つて復命するや、國主は直ちに親族なる年若き貴族を使者として聖師を迎へしめた、葡船よりは祝砲十五發を放つて敬意を表したので、使者は大に満足の模様であつた、フランシスコ聖師は國主の書面を受け、翌日早朝河を下つて船江に赴くべきことを諾した。葡船の長を首として其の乗組員一同は行列を盛にし

義頼使者を遣はしザビエーを迎ふ

て聖師を護送せんとせしに、かれは之れを不可として許さなかつたのだが、再三再四歎願して止まなかつたので誰遜なる聖師も國主及び國民が恭敬心を起すの便宜ともなり、我宗教上の利益たることもあらんとて、終に之れを承諾せられた。

ヒントは又聖師國主に謁見する時の行列及びその模様を記して曰く、各員各々其の好むところに應じて盛裝をなし、大なるパツテラ及び二箇の小船に乗込み、錦繡の國旗を懸へし、左右に排列したる笛、喇叭隊より齊しく樂を奏した。此の行列は國府口まで陸續として連なつたが、其の時陸にて祝砲の轟くを聞き觀者四方より海濱に集り來り、船の浦頭に着したときは群衆山をなし上陸爲し雄き程の盛況であつた。陸地には國主より聖師の迎ひに出張した一貴顯あり、夥多の人数を率ゐ齎し來つた轎を出し之れを聖師に勧めたが、聖師は固辭して歩行した、大友家より遣はしたる護衛兵前に葡萄牙人三十人と我等の從者其の列に加はつた。而して各人禮服を着し、首には金銀の鎖を以てに飾をなして居た。聖師は黒羅紗の法衣の上に聖祭の白衣を纏ひ、金銀箱をうちたる綠色天鷲の袈裟を掛けて居られた。船長ガマは此の行列の指揮長となつて飾狀を携へて最先に進み、其次には五名の豪商悉く諸器具を捧げて隨從した。而して其の内の一人は白羅子の幅紗にて包みたる聖教要理の翻譯書を、又一人は我等が圍らすも船中にて拾ひ上たる黒鷲天靴を、今一人は金銀にて蒔繪せるベンガル産の寶木の杖を、又一人は紫色の絹の幅紗にて包みたる聖母の油繪を、他の一人は盛美なる涼傘を來持し蕭々として進行し、城下九ヶ町を通過せしに、觀者充滿し各家の窓口屋背に至るまで人の在らざる所なしと云ふ盛況であつた。

ザビエーが大友義鎮に謁見する時の行列

斯くて聖師の一行が國主の御殿に着するや、大友家の家臣百名は鎧或は薙刀を立て各々兩刀を佩び列を正して聖師を迎へた、聖師の進で長廊下に至つたとき葡萄牙人跪いて其の携へ來た諸道具を捧げた、聖師が斯くも尊敬を受けらるゝを見たる、日本人は始めて聖師の位階高く尊嚴の身分なることを覺つたやうであつた。それより廣庭に至れば黄金の飾り輝きたる長刀を帯び、襦子或は絹地の羽織を着たる位階ある家臣集り居り、尙ほ他に六七歳ばかりの小兒、老人に手を引かれて聖師を迎へた、彼等の聖師に對するや、早敷に膝兩の恵を得たるが如き慶辭を述べ、導かれて他の室に至れば、其處には數多の國老が、國風に倣ひ、三度叩頭の禮を爲した、それより出で、一の廊下を通過した、そこには密柑或は他の樹木などにて飾物をなし、國主の弟此のところに聖師を迎へられた、斯く數多の座敷を越え漸く對面の間に達したとき、國主は四五歩進んで出で迎へた、聖師は坐に就き、日本風の禮式を爲した、國主も亦頭を垂れて御免あるべしとの挨拶をなした。云々。(ザビエー書翰集にある歴史の部を參考すべし)

七 大友宗麟と基督教

そも、豊後の大友家は、源右府頼朝時代より連綿として世々九州の探題たり。其第廿一世の主義鑑の時代より近國を掠奪して數ヶ國を領し、家富み兵強く、其の權勢漸く盛なりしが、其の子義鎮家を嗣ぐに至り、肥前を略し、豊前に侵入し、覇を九州に唱へた。是より先き義鎮未だ世子たりし時、葡萄牙商船の豊後に來航せしものあ

大友家の由來

大友義鎮

り。其の高貴なる商品を多く積みたるを見て、義鑑其の老臣と議し之れを掠奪して軍資に充てんとした。世子義鎮之を聞知し、父を諫めて事なからしめた。是れより葡人は大に義鎮を徳とした。サビエーがまだ馬拉加に居た時、日本の國主某が印度總督へ書を贈り、宣教使の派遣を請求したとの報知があつた、其の國主とは、思ふに義鎮其の人であつたのだらう。是より葡船の豊後に來るもの頻々たり。義鎮、葡萄牙人より聖師ザビエーの人となり聴き、切に彼を見んと欲し、彼の山口に居るを探知し、書を以て彼を招聘せしと云ふ。爰に於て義鎮ザビエーと相見て年來の宿志を達するを得たのである。義鎮ザビエーを見て大に喜び。初對面の挨拶終りて後、談宗教に移り、ザビエーの説述せる切支丹の奥義及び道義的の格言を聽聞して感に堪へざるものもの如く、傍らに居たるその弟を顧みて曰く、西僧の説く所は高尚にして如何にも道理に合ひたる説の如く、之れを佛僧等の説く所の小説の如き曖昧模糊たる説法に比すれば、更に確乎たる憑據と明瞭なる道理に基かざるものなきが如し。若し余をして強ひて言はしむれば何故眞神は我等をして數百年間蒙昧の中に沈ましめしや、何故此の異國人を照らせる光明を余等にも願與せざりしや疑なきあたはずだと、言未だ終らざるに、突然

義鎮ザビエー
の説教を聞く

佛僧の憤慨

身を起して義鎮に迫るものあり、これなん豊後の名僧ハクシラと云へるものにてザビエー引見の席に參列せる佛僧の一人であつた。彼は憤慨して義鎮に向て曰く、凡そ宗教の事を談ずるは僧侶の職分にして君主たる者の職分でない、たとへ主君にして宗教の事を論じ、之れが是非を判断するの才智を備ふるとも、總て宗教に關する事は宗教の學士にして佛の弟子たる僧侶に謀りて決定せらるべき筈であるとして更に佛敎の爲めに辯解する所があつたが、其所説妄誕無稽にして、其の態度あまりに傲慢なりし故義鎮之を退席せしめたと云ふ、其の所説の妄慢であつたのはいざ知らず、其の態度の傲慢なりしは實際のことであつたらう。斯くて義鎮はザビエーに晚餐を供し、彼と食卓を共にし、之を遇すること極めて丁寧なりしがば列席の葡萄牙人等は皆痛く感激した。これは第壹回會見の概況なるが、その後もザビエーはしばしば微行して義鎮に見え熱心説く所あり終に切支丹宣布の許可を得たのであると。これよりザビエーは公衆に向て公然切支丹を傳へ其の宣敎により改宗者數人ありしも其の滞在日數僅々四拾有餘日なりしを以て未だ盛況に至らず、領主義鎮を始め、有力なる士大夫の回心せしは、これより數年の後であつた。されど是の時より義鎮は切支丹に好意を有し、未だ洗禮を受けざ

ピントの記事に就て

りしも力を盡して宣教使を保護し、聖教宣布を奨励した。當時豊後日出の港に碇泊せる葡船の中にピントが居た。是れ彼が第三回目の日本旅行にして、其の日記には例の麗筆を以てザビエーを豊後へ迎へたる時の景況、登城の盛儀、さては宣教の模様等事々詳記する所あり、其の中の一節は既に上文に引照せる通だ。されどもピントの記事は往々事實を誇張するの嫌あり、殊にザビエーが葡船に乗つて出發せんとするに當り、土地の名僧フカラ殿（豊後の野津院普賢寺の住持ならん）と殿中にて五日間問答したと云ふ宗論の如き、頗る興味ある記事ではあるが、事實疑はしい點が尠なくない。その詳細の記述は後節に譲る。

ザビエー人道を説いて貧民救助をすむ

西教史にザビエーが義鎮に對する、説教の大意を叙して曰く、
 聖師（ザビエー）は王（義鎮）の放蕩なることを聞知し、五官の樂みに耽溺すれば精神信心の入り難きことを悟り、先づ王の精神に治療を施さんとして、王に其の耽溺せる不徳の恐るべきことを教誡せしかば、上帝の大に其の言を愛せられしにや、王は末だ血氣盛んなる年少にして放蕩無類なる性質を帯び、世の習慣を脱かれずと雖も忽ち悔悟し、其の罪惡の根元となるべき者を悉く宮中より遠ざけ、舊習を一洗せんことに決心せり。

斯くて聖師は王の精神を培じ最大なる不徳を驅除せし後、第二貧民に仁惠を施すべきことを告諭せり。然るに

佛僧は唯財帛にのみ心を存し、富人を貴重し貧人を嫌忌するに由り、佛神の業てし者を救ふは不正なり佛に勝れる仁惠を施さんとするは神を辱しむるものなり、神の人を困窮もしむるは全く其の罪惡を擲する爲なり。仁惠其の他百般の事に於て人道の天道に均しからんことを求むべからずとの數件を王に説得せり。故に王は其説に感惑せられ貧人を看ることと土芥の如く、更に貧民を憐れむの心がかりき。

然れども聖師は王に向ひ、縱令ひ世界に貧人ありと雖も、是れは神力の足らざると神の其の人を嚴酷に處するに因て然るにあらず、蓋人間に貧富の差等あるは俗間と宗教上の利益に於て人間に避くべからざる所たる旨を陳述し、且つ語て曰く、若し世界に貧人なき時は人間社會は存立せざるべし、若し世上に職業を勉むる工人なく、土地を耕す農夫なく、佃漁を爲す獵者なく、財を通ずる商賣なく、又需くべき物品なく、役備すべき男女なくは、工業全く廢絶し、人皆同等に歸し、國に位階等級の別なきに至るべし、就中重事と云ふべきは王事に供給する者跡を絶つに至るべし。

王答へて曰く、貴僧の説誠に眞なり、蓋余は未だ神慮の此の妙所に至りしことを知らずと。聖師又曰く、閣下觀るべし、若し人々悉く富者にして互に獨立せし時は、人間社會に何等の混亂を生じ、何等の弊俗を來し、人心一致せざるは必然なり、如何となれば人間に實際の存する所以のものは、猶平居安逸に因て不徳を生じ克苦勉勵に因て美德を生ずるが如く貧富貴賤の差あるを以てなり。

王又答へて曰く、我が佛僧は大利を抛て有徳者となるを欲せざるべし、彼等は貧人の世にあることを好んで許すべしと雖も、自ら貧に處するの勇氣なかるべしと。聖師曰く、佛僧の不正直にして理に暗きは全く之れ

が爲めなり如何となれば彼等は貧人を以て賣とせば何ぞ之れを愛せざる、又貧人を以て神の惡みを受くるとせば、何ぞ人に向て己の爲めに善を爲すことを求むるや、何ぞ世人僧に施與せざれば救はるゝにとを得ずと唱ふるや、若し佛僧等富有ならば人に施を望むべからざるは勿論にして、平生貧人ば神に惡まるゝ者なりと言ひ、而して其の身の貧なる時は神に愛せらるゝと唱ふるや。

王曰く、其事は辨せずして明かなり、これを以て我固より其の偽言たることを信ず。聖師又曰く、佛僧の談によれば貧人は神に哀訴することを得ざるべし、如何となれば神より富人に與ふるに生計に充分なる資産を以てし、而して富人若し貧人に其の財産の一部を割與する時は、神より富人を脅かすに永久の罰を以てすべければなりと。

豊後王は聖師より未だ嘗て聞かざる所の説を聞て甚だ悦び、遂に其の理の爲めに感動せられ貧人に對し、大に哀憐の情を發し、賑恤或は度に過ぐる程に至り、又聖師の説に因て宮中の制度並に法律上の規則等を改正せり。

八 佛基の問答其の一

豊後の佛僧等もその頃より二ヶ年前、鹿兒島に上陸して平戸、京都、山口の地を遊歴し、至る所で新宗教を傳へ、盛に佛法僧侶を罵倒して居た、ザビエーに就て聞く所があつたらう。彼は貧弱不潔なる印度の乞食僧で勘化の爲め日本に渡來したのだと評

ザビエーに關する種々の時

する者あり。新奇なる切支丹と云ふ佛教を宣傳し、盛に舊佛教を攻撃する奇僧であると言ふものあり。或は彼を以て不思議なる魔術を行ひ愚民を誘惑する怪僧であると傳ふる者あり、其の噂さまちくにして容易に其の真相を知ることが出来なかつたのだが、今やまのあたり其の堂々たる容儀に接したのみならず、領主より新宗教宣布の許可を得たとの事を聞き、危惧の念に堪へなかつたのだらう。領主大友義鎮がザビエーに切支丹宗の宣布を許可したのは、將來は兎もあれ、その初は外國貿易を獎勵する一手段としての政策に外ならなかつたのだが、佛教の僧侶等にとっては自家の面目に關する由々敷一大問題であつたのである。

然るに、ザビエーはしばしば殿中に伺候して教を説き、義鎮以下君臣を啓發すると少からずで、其の結果は殿中の廓清となり、棄兒、隨胎の禁令となり、貧民の救助となつて、社會的救濟事業の端緒を開くに至つた。又其の出て教を傳ふるや、府内城下の臣民は領主が破格の尊敬を以てザビエーを待遇したのを見て、其の説教に聽従する者多く、就中カナハマの有名なる僧侶酒井シランなる者が、ザビエーに説破せられて改宗してより以來、洗禮を願ふ者續々踵を接して起り、其の數五百人の多きに達し

豊後に於ける切支丹の感化

た。僧侶平なるあたはずで、即ちザビエーを法敵視し、さまざまの策略を施して、之れが宣教を妨害せんと試みたが、こと皆畫餅にぞくし領主の保護優さによつて流石の佛僧等も策の施すべき余地なく、思ひ迫つて急に近傍の僧侶を招集して一大評議會を開き、遂に宗教問答を以てザビエーを屈服せしめやうと一決した。さうしてフカラ殿といふ大僧正を擧げて闘手とした。彼は府内から十二リグの所にある有名なる寺院の住持で、豊後の大學林で三拾年間教授の職にあつた博學多識の學僧だと云ふ事だ。

ザビエーの豊後に來たのは日出港に碇泊してゐた葡萄牙船に便乗して一先づ印度に還り日本及び支那の布教に關して圖る所あらんが爲めであつたのだが、出帆の期までには、まだ若干の餘日があつたので、其の間を利用して大友氏に謁見し、府内の住民に傳教するの機會を得て意外の好成績を見るに至つたのだ。既にして葡萄牙船の艤裝成り、出帆の期日確定したるを以てザビエー參殿して義鎮に別を告げ將に退出せんとする際、名僧フカラ殿登城して領主の御前で西僧と相見んことを乞ふとの旨を申し入れた。義鎮はそれを聞いて驚いた。博學多識の譽たかきフカラ殿とザビエーとの會見

が如何なる珍事を惹起せんも知るべからずと心中窃に惑ふ所があつたが、遂にザビエーの承諾を得て會見を許した。やがて佛僧フカラ殿來つて義鎮に拜謁し、更にザビエーに向つて初對面の挨拶を述べ、各々席定つて後ち義鎮佛僧に來意を尋ねた。フカラ殿答へて。

拙僧の參殿したのは他にあらず、西僧の日本を發途しない前に面會を遂げ外國から持參した切支丹とか申す佛敎に付て質問致したい爲である。

と云つて義鎮の許可を願ひ、更にザビエーに向ひ其の顔面をつらくながめながら貴僧は拙僧を見た覺えがないかと

突然に奇問を發した。ザビエーは更に面會した記憶はないと答へた。するとフカラ殿は失笑しながら其の徒僧を顧みて

この西僧は拙僧と百餘度も會合して居りながら、それを知らぬ振をしてゐるのは奇怪千萬だ。斯る鼠輩を屈服させるのは容易の事だ。

と私語し、更にザビエーに向ひ、

さらば貴僧は實に拙僧を知らぬと云ふのか、曾てヒエノイヤマ（比叡山）の港で貴

僧は余に貨物を賣り渡したことがあるのを覺えないのか、貴僧は今に尙其時の貨物の残余を所持して居ないのか。

と詰め寄つた。ザビエーは何か心に當ることがあつたと見えわざと色を和らげ従容として答へた。

こは貴僧の御言葉とも覺えず、若し貴僧が眞面目に余に答辯を求め給ふのなら、今少し判然したる御質問を願いたい。余はもと商賈にあらず、又ヒエノイヤマは嘗て見たことがないと御答へするの外はないのだ。

と言つた。佛僧等はその言葉を聽いて愕然たる状をなして。

人としてかほどまで記憶の乏しい者があるのか、又このやうに信實の乏しい者が世にあるべきであるか。

と云つて嘆息した。

余は正實である。

とザビエは襟を正して叫んだ。

貴僧もし余を記憶に乏しい者となさば、余をして回想せしむる事を務められたい。

然れども貴僧も亦領主の御前であることを記憶せられたい。此處は不正實を吐露すべき場所でない。

と恚う警告したのは、ザビエーがフカラ殿はヘレネの哲學者ピタゴラス一派のやうに靈魂輪廻の説を信じ、人は皆前世の事を記憶し居るものとするの説によつて問答して居ることを悟つたからだと云ふ事だ。

今より千有五百年前余がヒエノイヤマに居た時、貴僧は絹、羅紗、百端を高價で余に賣りつけたではないか、貴僧はそれを覺えないのか。

と、またしても、フカラ殿は同じ様なことを繰返して質問した。そこで、ザビエーは義鎮に向ひ、今度は此方からフカラ殿に質問したいと願ひその許可を得て、嚴然として佛僧に向つて言つた。

「貴僧は幾歳であるか」

「余は五拾二歳だ」

僅かに五拾二歳に過ぎない貴僧が、どうして千五百年も前に貨物を賣與したる事を知り得るのか、貴僧は日本の歴史を閲した事はないのか、日本諸島に人類の居住し

始めてからまだ千年に満たないし、その以前は無人島であつたと云ふ事だ。殊にヒエノイヤマの開墾されたのはそれより遙か後世の事だとは歴史で讀む所ではないか。

と突き込まれて少しく狼狽したが、直に陳容を立直し更に言葉を改めて曰く、

余はこれから貴僧の了解し得ない事を了解させやう。貴僧は今歐洲に於る人々の現在の事を知るにより、余は過去の事に明なるを明言した。故に貴僧は先づ此の世界の無始無終なること、人間の靈魂の不死不朽なること、死は身體に効驗を及ぼすも靈魂には効驗を及ぼさないことの三事を知るべし。蓋し人は其の出産を司る所の星の各々異つたる形狀に従つて其顔容、體力を異にし、生者あり、死者あつて相循環す。これ天の通法にして、身體の機運此の如しだ。又靈魂なる者は一度其の體を離れる時は他の體に移轉するものだ。されど、天より得たる固有の性情を變ずることはないのだ。蓋し善人の靈魂は聖賢、豪傑、王公、僧侶の體に移り、悪人の靈魂は其の罪に相應してそれぐの獸身に入るのだ。然るに人間の中にも才智の勝れたる者あり、又余の如きその精神に確乎れる記憶を有する者あり、是等の人は皆限りな

き年間にあつたものぐの事又は偶然に起つた事なども皆悉く記憶して居るのだ。それに反し、精神暗愚にして記憶と判断とに乏しい者もある。此等の人は何事でも記憶する所がない、貴僧の精神の如きはその類だ。貴僧が余と會合したことを忘れたのも之れが爲だ。

と放言した。これに對するザビエーの答辨は何んなであつたか、この論場に列して兩師の問答を筆記して居た葡萄牙人の言ふ所によれば、ザビエーは之れに對し確乎たる理論に訴へて佛僧の所論を滅茶滅茶に破砕したと唱ふるも、記者親ら才智なく、學識なきを告白し、ザビエーが佛僧の説を論破した高遠なる理論は其の能く理解し得なかつた所だと言つて其の議論の筋道を傳へなかつたのは遺憾である。思ふにその葡萄牙人とは日本記行を物して名聲を博したる有名なるメンデス、ピント其の人なるや疑ない。當時ザビエーの豊後に於ける動作の記事は、概ね皆ピントの筆に成つたもので従て其の記事は虚構のことが多く、問答そのものも、彼の捏造に成つたものなるやも知るべからずだ。其の記述は讀で面白きも眞偽混合の嫌あるは惜むべきの限りで。この事は後に問答の眞偽を批判する時に譲つて、前に立ちもどり、兩師の問答のことを見

やう。

さてもザビエーは佛僧の所論に對し、世界不朽の生物がありし例なきことを、道理に照して説明し、更に靈魂移轉の説を辯駁して餘蘊なからめたので、佛僧等遂に辭なく更に轉じて倫理上の問題に移り、改まつて義鎮及び老臣の方に向ひ、

「西教の如き五官の快樂を禁じ、日本の貴顯や、僧侶等が、今日に至るまで爲し來つたる所業を誹議するが如きものを速に日本より放逐するのが正理にはあらざるか」

と。それは佛僧等が義鎮等君臣の平常安逸に耽り、操行修らざるを以て、之れに迎合して不倫の行爲を容認すれば、彼等の味方となつて有利の裁斷をなすべしとの老猾なる思案より出たるものだ。然るに、ザビエー師は更に憶する色なく、佛僧等の倫理上の缺點を指摘してこれを攻撃するや、其の猛烈にして熱火の如き辯論は滿堂の君臣を動かし、諸員均しく西僧の説是なりと呼稱して賛意を表するに至つた。佛僧等大に怒り、佛徒にあるまじき暴狀をあらはしたので殿中の人々之をなだめすかせども聞かず、ますます禮儀を亂し、甚しき暴言を吐いて止まなかつたので、義鎮已を得ず之れ

倫理の問題に轉ず

佛僧等の暴狀

を殿中より追ひ出した。佛僧等相率ひて市中を徘徊し、義鎮等君臣の壓迫を述べ、君公は西僧の説に迷ひ昏に僧侶のみならず、諸神を絶滅し、佛教を廢棄するの意あるを以て僧徒は山門に退去し佛閣を閉鎖すべしと揚言して。人民を煽動した。

果して其の翌日に至り佛僧等は府内城下の寺院を悉く閉鎖し、葡萄牙人を追放せざる上は神佛の供養をなすを禁ずとの旨を門前に掲示し、以て義鎮を威嚇し、人民を煽動した、其の反響意外に甚しく、市中大に動搖し、頑冥の徒相結んで外人を襲撃し一大騒動を起さんとし、形勢極めて不穩であつた。葡人難を船中に避け帆を揚げて遠く沖合に通れ出たが、ザビエーは獨り府内に止まつて奉教者を保護し、たとへ暴徒の襲撃に遇ふも信徒を棄るに忍ずとなし、難に殉ずる覺悟を定め泰然として動かず、以て信徒を慰撫奨励しつゝあつた。既にして葡萄牙人等ザビエーの安否を心もとなく思ひ、歸り來つてザビエーを保護し、義鎮亦兵を出して、暴民を制したので、騒亂忽ち鎮定して平靜に歸した。

九 佛基の問答 其の二

佛僧等の教唆によつて起つた府内の騒亂も意外に速に鎮定し、僧侶等復策の施すべ

府内に排外人運動起る

佛基問答の二

き様がなかつたので、再び西僧と問答を戦はし、多数の勢力を以て、之を壓服してくれんと評議一決し、領主義鎮に見え再び西僧と會見して宗論を戦はし、佛基兩教の優劣を決定せんことを乞ふた。

義鎮其の不可なるを知るも許さずんば却つて僧侶の兇暴心を激する虞あることを探知し、左の條規の下にその請願を許可するに至つた。

一 萬事靜肅を旨とし喧諍罵詈を慎むこと

一 聽斷人を立て議論の範圍を規定し雙方の可否を裁決すべき事

一 聽斷人は佛僧以外の出席人之を勤む、但し聽斷人中可否相分るゝ時は多數を以て決すべき事

一 フカラどの若し議論に敗を取る時は、爾來佛僧等は日本人が眞神の教を奉ずることにつき、決して故障すべからざること

かくて問答開催の當日フカラどのは三千の僧侶を引卒して登城し、ザビエーも亦數多の葡萄牙人を従へ美々しき行列をなして參殿したのは、頗る偉觀であつた。然るに義鎮は佛基双方の應援者多數臨場する時は、爲に騒動を醸すの惧あるを掛念して、

其の人員を制限し、佛教の方はフカラ殿の外四名以上問答の席へ出るを許さなかつた。基督教の方も亦同數の出席者に制限されたのだらう。義鎮高座を占めて自ら會場を取締り、聽聞の貴顯、紳士は堂上に充満して立錫の地もだもあまさない程の盛況であつた。

義鎮は先づフカラ殿に向ひ、ザビエー師の宣傳する宗教を日本に於て許可すべからずとなす所以の理由を簡略に釋明すべしと命じた。フカラ殿即ち基督教を許可すべからざる所以の理由數點を擧げて之れを應じた。即ち基督教は日本の宗教に反し、帝國の基礎にしてその保護主たる八百萬神を批判するは其の一なり。神佛の恩寵を蒙り衆人に其の欲する所の幸福を授くることを司る佛僧徒の名聲威權を好んで毀傷するは其の二なり。將軍家を始め佛教諸宗派の名僧、智識等が認許せる事柄を以て非常の罪惡として禁ずるは其の三なり。(偶像を拜する事、又は一夫多妻等の事などだらう)、基督教を信ずる者に非ざれば死後の幸福を得ずと説き、阿彌陀、釋迦、地藏、觀音の諸佛等は神の審判を受けんが爲め今尙ほ陰府にあつて人を地獄に導きつゝ苦難の中に呻吟しつゝありと云ふは其の四なりと。義鎮ザビエーをして之れに答へしむ。ザビエー即

佛僧基督教を許可すべからざる理由を述べ

ち起立して一つの先決問題を提出して曰く、論題の條項多端にわたるは徒らに混雜を増すのみにして、如何なる名論卓説も之れが爲め往々にして無効に終る虞あれば須らく先づ一箇の問題を討議し、然る後他の論題に移るべしと。爰に於てフカラ殿改めて一の難問を提出した、曰く、基督教は日本全國に於て神として崇敬する神佛を否定し、之に神たるの榮譽を歸せざるの理由如何と。

ザビエー之を聞き基督教の眞理を證明し、偶像教徒の迷謬を論破すべきはこの時なりと思惟し、先づ天地萬物を創造し之れを主宰する所の第一原因の存在を説明せんと試み、聽聞人の知識に應じ、更に顯著にして了解なし易き理論を應用し、受造物を目標として造物主の存在に論及した。彼は先づ宇宙形體論的證據より説き先づ宇宙の存在は自存にあらず、偶發にあらず、必ず自存的、必然的、無限的の第一原因より生出せし理由を詳述し、その第一原因の神たるべきを論證し、尋いで目的論的證明に移り意匠論に轉じその原因たるものの、大知大能たるを論證した、其の舉證の一節に曰く、

凡そ偶然に來る物は順序、定度、堅牢の三者一事も有ることなし、而るに世界の如く

ザビエーの有神論と惟一神

順序正しく且つ確乎不變の物あるを他に見ずと論じ、更に理解し易き比喩を列舉して堂々と辨じたてたが、殊に列席の文武百官を感服せしめたのは、ザビエーが天文、生理の學説を掲げて造物主の智慧を論證した點であつた。其の滔々たる辨證を聞くに至り、聽聞人の感激は殆ど其の頂上に達した。爰に於てザビエーは尙ほ其の論旨を進めて辨證すること數千言、終に世界萬物を創造せる全能不朽なる唯一神の存在を證明し天理を柱ぐるにあらずんば之れか存在を否定する能はざる旨を述べて其の論を結んだ。義鎮を始め群臣皆ザビエーの所説に感服した。其の論旨の明晰なる恰も太陽の物を照すが如しだと云ひ、佛僧フカラ殿も已を得ず眞神の存在は否定することが出来なると言つてザビエーの説に服したとふ事だ。佛僧等は果してザビエーの所説に感服したのだらうか、必しも然らずと思はれる。特に怪む、此の際フカラ殿が原因結果の無限的連續を唱へ、佛教的宇宙觀や、凡神論を提出してザビエーを惱まさなかつたことを。此の問答に關し、西教史の記事は、ザビエーの論旨を詳細に記述しながら、佛僧の所説に至つては唯簡單なる二三の事を記するのみで、恰も西僧が演説者で、佛僧は單に聽聞人に過ぎなかつたかの觀あるは怪むべき疑點である。

ザビエーは更に著名なる比喩を擧げ其の論鋒を進めて曰く、
 今茲に旅人あり路を行くの際、偶々森林中に魏然としの雪霽に聳へたる宏壯美麗な
 宮殿を發見したと假定せよ、其の設備の調和せるその裝飾の完全なる一として人目
 を驚かさぬものはないと云つた風のものならば、其の旅人は必ず思ふだらう、これ
 は何れかの、君主の建設したるものであると。然るに若し人あつてそれを否定し、
 それは王公貴人の建築したものでなく、附近の山より崩落したる土塊中より現出た
 る美石が集合して偶然に斯る宮殿を造立したのだと主張せば旅人は必ず其の人を目
 して狂人となすだらう、其の狂人となすは言はずして明白だ、今それ物質、形状、平
 均、調和、秩序、美麗と云ひ其の各部分の法則と云ひ一として人目を驚かさざるは
 なき此の一大世界は則ち宮殿にして、其の宮殿は更に工人の手を経ずして偶然に生
 出せるものと信ずるは實に愚の甚しきものと云ふべしだ。

それより尋いて佛基問答を繼續すること前後五日間、ザビエーは佛僧等のと質問に
 應じて神は惟一ならざるべからざることより、始祖アダムの罪業、神子耶蘇降誕の始
 末、救世の事業、十字架上の死、其の復活、昇天及び最後に於ける神の大審判等にか

基督教の要義
を説く

ゝる基督教の要義を論辨した。又實際問題として佛僧者が施與者に賦與する所の夫の
 血脉と稱する爲替手形の如きは、來世に通用すべきものに非ず、精神界に通用すべきも
 のは仁愛の行爲より生ずる功德のみと斷じ、又佛僧等の富人にこびて貧人を賤しむる
 の行爲を詰責し、貧人は富人よりも比較的罪業少なきものなるが故に彼等は富貴の
 人よりも却つて神の國に近きものであると論じ、貧富にかゝはらず、何人と雖も眞神
 の啓示を信奉し、その聖旨を行ふものは、皆救はるべしと説き、最後に佛僧等の提出
 せし質問、即ち何故眞神は多年の間日本人を棄て、顧みず、聖旨を傳達せずして久し
 く之れを無知蒙昧の中に沈淪せしめたのかとの疑問に對し、たとへ日本人が神の直接
 の啓示に觸るゝ事なく、又その傳達に接せざるも、人間はその野蠻たると文明たるとに
 かゝはらず生れながらにして神より其の精神に深く銘刻せられたる道徳法の嚴然たる
 あれば、人々が善惡を知らずと言ふを口實として、罪業の冤を訴ふことを得ざるべ
 しと辨した。此の答辯は何故曾て基督教を聞くの便宜を有しなかつた人が天罰か蒙る
 べきやとの疑問に對するものとなるも、佛僧等の提出せる疑問の要點を説明するには
 極めて不徹底であるのに佛僧等が尙ほ押しして問ふ所のなかつたのは不思議だ。要する

に佛僧等がザビエーの所説に對して辯難を試みんとすれば判者の地位にある義鎮等は之を壓伏してわざと勝利をザビエーに歸さしむるが如き傾向あつて依估最負の沙汰多く、此の五日間の問答はザビエーをして、其の云はんが欲する所を盡さしめたにか、はらず佛僧等は其の質議辨駁を意の如く盡し得なかつたやうな觀がある。而して西教史は此の問答の結果として殊に愉快であつたのは佛僧等の中互にその宗派を異にする者があつた故、問答中彼等の間に宗論に就き異議を生じ、互に激論したることで、すはや大事を惹起せんとしたが、義鎮之れを仲裁して漸く和解せしめたりと叙し、更に記して曰く、

佛僧等は聖師と議論を爲すこと五日に及び種々耶蘇教を排撃すれども、遂に聽斷人の裁判に因て論勝を聖師に歸せり。是に於て王（義鎮を云ふ）は聖師の講述せる宗教は佛教より能く天地人道に適當する旨を述べ、而してフカラ殿及び其の從僧に向ひ謂て曰く、

此の西教の教法の如き神聖なる教法を誹議すべからざる事は、汝等の能く了解せし所なるべし。余は汝等の嚇怒に因て汝等の宗法の貴重ならざることを知るを得た

り汝等去れよ、今より一層嘉良の人となる事を學ぶべしと、蓋し佛僧等は此の辭に因て恰も雷電に撃れしが如く甚だ昏冥し、切齒、憤懣、種々王を惡言して退散せり。而るに聖師は之れに反し泰然として居たりしかば、王は聖師の手を執り、家臣を悉く引卒し、恰も凱旋の時戰勝者を迎ふるが如く師を其の館まで見送れり。此の如くして議論決定し、其の成果は大いに耶蘇教の名譽となれり。云々。

一〇 佛基問答の眞偽

以上は西教史に詳記する所の問答の大意を掲げたものであるが、果して此の種の問答が佛基の代表者間に行はれたかどうかは大なる疑問である。爰にその疑問とすべき點を列舉せんに先づ

佛基問答は果して事實か

第一の疑問

第一に此の問答に關する一般的記事の出所に就いて觀察せねばならぬ。西教史は此の問答の席に居た葡萄牙人の言に據るとすれば、其の材料の大部分はその葡萄牙人の傳説に基きたるものである。而して其の葡萄牙人とは何人か、これ即ち有名なる東洋漫遊者メンデス、ピントその人なるや明らかだ。前にも述べた如く、當時豊後の日出港に碇泊せる葡萄牙船の中にピントあり是れ彼が第三回目の日本旅行にして、その物

せる東洋紀行中に豊後於けるザビエーの事跡を叙し、又此の問答の状況茲に經過を述ぶること極めて詳なれど、該書は前にも云つた通り事實を言はんが爲よりは寧ろ遊戯の爲めに作られたるが如しとの學者の定評あるものにして、其の記事の大部分は小説的にして讀んで面白きも事實として信用爲し難きもの尠ならずだと。されば此の問答の記述の如きも他に之れを證明する書物があるのでなくば容易にその事實たるを信ずるあたはざるものである。

第二はその問答中の理論的部分の材料は何人より傳へたものであるか。西教史は之を傳へたものはビントにあらざるを證明して曰く、「その者（問答の席にありし葡萄牙人）又記して曰く、余は聖師（ザビエー）が佛僧の妄想を撃破せし深密なる理論を人に傳ふる能はず、如何となれば余はその理論を説明すべき才力なく又學識もなければなり」と。成る程ビントの記述せる問答の記事は佛僧の質問として歐州人の興味をそゝる如き問題をかゝげ、その前後の事情を面白く又可笑しく記述せるにかゝはらず、ザビエーの之に對する答辯中の神學的議論は殆ど之をばふけるは將にその自白せるが如しだ。然るに西教史には之れを詳記し、これはその事情を聞知せる宣教使に就いて聞き

第二の疑點

たる歴史家の説によるとあるも、その宣教使とは何人なるや明かならず、由しこれを事實とするもその宣教使は何人によつて其の事情を聞知したのか。當時問答の席に居つた日本人は勿論ビントやガマでさへも斯る議論を能く理解するものゝなかつたことはビントの自白せるが如しだ。さればその宣教使はザビエー自身より聞知せるものと想像せねばならぬ。ザビエーは果してその事情を某宣教使に傳へたのか、それは疑問である。さるにてもザビエーがその書翰中にこの事を傳へなかつたのは不審である。彼は日本に於れる其の經歷及び一般の状況に關し細大洩さず歐州のゼスイト本部へ報告せるにかゝはらず、此の問答の事に關し一言半句も記載する所なきは如何、此れ大に疑ふべき點ではないか。思ふに西教史の記者はビントの紀行文に基いて此の問答の始末を叙述し、ビントが理解しあはなかつたと言ふ點は、佛僧等の質問の條項に適當したる學者の理論を其の中に添加したのではあるまいか。

第三、假りに此の問答を事實として觀察を下すに、何人がザビエーの所論を通譯したかと云ふ疑問がある。當時貿易上の關係より葡萄牙人にして日本語を理解し、又日本人にして葡萄牙語を語る人がないのでになかつたが、然しそれは日常の事物に關する

第三の疑點

談話、若くは商業上の取引に關する言語を理解せるに過ぎずで、哲學、宗教に關する理論の如きむづかしいものに至つては彼我共に之れを理解するものは稀であつた。又ザビエーが豊後に伴つて來た日本人の門弟は鹿兒島にて洗禮を受けたベルナルト平戸にて入門せるマツシユー、山口にて信者となつた魯連須の三人だが、ベルナルト、マツシユーの二人は漁夫の子にして、信者となつてから、ザビエーに隨從して旅行せる故多少葡萄牙語を學んだであらうが、元來無學の者共だから到底斯の理論を通譯すべき力量のなかつたことは明らかだ。魯連須は元來が佛僧の出身なれば多少の學問あり後には有力なる宣教者となつて傳道界に活躍せし人なれば彼にして葡語に通じて居たならば、その通譯は容易であつたらうが、如何にせん當時はまだ彼の回心の日尙淺く信者となつてより直に外國語を學んだと想像するも學修漸く半年に滿ざる彼は、固より通譯の任に當る技倆はなかつたのだ。

さればこの佛基問答の通譯は如何にせしか、これ大なる疑問である。もしそれザビエーに至る所で其の國語を自由に語り得るの奇蹟的異能を賜はつて居たと主張するものあらば吾人復何を言はんやである。

東西の文書は
あらはれたる
佛基問答

これ此の宗論その事の實否に關して疑なきを得ざる所以だ。嘗に西教史にあらはれるもののみならず、日本の文書にあらはれたる佛基の宗論に關しても荒唐無稽にひくするものが多い、それは後に記述することにしよう。而して其の宗論の實否如何にかゝはらず、それを爰に掲載したのはそれによつて當時切支丹の傳へた教義の一端と佛僧等の事情とを知ることが出来るからである。

一一 ザビエーの晩年

上の尊崇する處、下之れ做ふの風習殊に盛なる時代に於て、ザビエーが中國及び九州に於て最も權威あつた三大諸侯、即ち島津、大内、大友を歴訪して基督教宣布の許可を得、教會の基礎を据えたのは大成功と云べしだ。不幸にして鹿兒島にては一時其の公許を取消されしも、既に播きし種子は枯死せずして發芽生長すべき望あり。山口府内、兩所の布教は倍々盛にして將來の盛運期して待つべき景況であつた。然るにザビエーは府内に止まること、僅々四拾有餘日にして、葡萄牙船長の招きに應じ、其の商船に便乗して日本を辭することとなり。一五五一年(天文二十年)十一月二十日大友義鎮に別を告げ、印度へ向て出帆した。是の時日本人の教徒マツシユー及びベルナ

ザビエー日本
を去る

ルドの外、大友家より印度總督へ派遣したる使節の一行も亦同船した、而して其の使命は印度總督と通商の約を結び、且つ宣教使の派遣を請ふのであつた。(大友義興が砲術傳習の爲家臣植田玄佐、渡邊宗覺又は横田某を西洋へ遣はしたる事が書物に見ゆれども其時が詳かでない、ザビエール同乗せし使節と何かの關係はなかつたらうか又同行者の教徒中マツシエーは印度臥亞にて病死し、ベルナルドな羅馬及び葡萄牙に至りコインブルの學校に入りしも是又病死したと云ふ。

ザビエールが日本に滞在したのは貳ケ年と四ケ月で、其の間の閱歷は既に述べた如く、日本の布教は前途有望であつたに拘はらず、何故中途にして印度へ歸還せしが、其の理由に關して諸説あり。印度教情ザビエールの歸還を途儀なくせりと。然るにザビエールの書翰によれば、日本へ派遣すべき宣教使を選択すること、支那の傳道を開始せんと目的であつたやうだ。ザビエールは日本人の概して聰明にして學問あり、知識あり、道理に訴へて事物を辨することに痛く敬服し、其の書翰中に叙して曰く、日本人は才智と勇氣とに富で心廣く學を好めば眞理を信ぜしむるには充分の望ありと。又曰く日本人は學を好み道理に通ずるも、未だ地球の圓體なる事及び其の運行の事を知る者がなかつたので、余等は其の理由及び其の他天文に關する事を説明せしに、彼等は悦び

ザビエールが中途日本を去つた理由

て之れを聞き、且つ上流社會の人は余等を敬慕して益々其の説の蘊奥を叩けりと。印度の蒙昧なる士民にのみ接し居たザビエールは、日本人の聰明は痛く驚き、是の如き國民に布教するの前途甚だ有望なるを期すると、同時に派遣宣教使の人物を精選せざるべからざるを切に感じたのだ。彼が日本派遣宣教使の資格に就ての意見は既に前に述べた通りだ。又彼は日本に在る文明、學問、技術、文藝は皆支那より傳來せるものなるを知り、且つ日本人一般に支那を文物の國として尊重し、其の政治、法律、學問を贊稱するのみならず、若し切支丹にして眞理ならば、何故に支那人が之を信せないのかとの疑問を受けたことが屢々あつたので、若し支那人を教化し得ば、日本の布教を盛ならしむることは容易であるとの感想を懷き、日本の傳教を他の宣教使等に委託し、身を以て支那傳道に當るの覺悟であつた。是れが彼の日本を去つた理由である。

さてザビエールの乗りし船は途中難風に遭ひしが、辛ふじて支那の三竈島さんざんじまに着し、此處よりしばし便船を換へ、一五五二年(天文二十年十二月)一月廿四日コシン府こしんぼに着した。其の臥亞に到つたのは二月であつた。ザビエールは臥亞にて耶蘇組イエズイットの總長ロヨラよりの辭令に接し、印度及び東洋全區の布教部長に任ぜられた。斯くて臥亞にて日

ザビエール臥亞に還る

其の死

聖徒に叙せらる

本派遣宣教使を選定し、同行して馬拉加に到り、途中諸種の艱難を経て支那の三竈島に至つた、是處より支那本部へ入らんとせしも其の計畫意の如くならず。兎角する中、遂に熱病に罹り、一五五二年（天文二十一年）十二月二日享年四拾七歳にして三竈島の海濱にて病死した。其の後數年を経て羅馬法皇はザビエーの聖徳及び功績を善し、封ずるに聖徒の位を以てした。斯くして東洋の大使徒は逝いた、其の播いた所の聖教の種子が發展成長して一大喬木となつた日本切支丹の盛況を見なかつたのは遺憾である。

第三章 九州地方に於る切支丹の盛況

一 山口の切支丹

一五五二年（天文二十一年）の八月師父バルタザル、ガルー Palthazar Gago 修通士エドワード、シルヴァ Edward Silva、ジョエル、アルカセヴァ Pierre Alceva の三人鹿兒島へ着船し、豊後へ至り、大友義鎮に謁して印度總督の書翰并に進物を呈した。是れは聖師ザビエーが印度に於て選定し新に日本へ派遣したる宣教使である。師父

數名の宣教師渡來す

山口の切支丹教會の情況

トレーはフェルナンデを遣はして彼を山口へ迎へ、此處にて聖子御降誕祭を祝し、且つ土地の有力なる信徒と協議し、基督教的事業として、先づ慈善會を興し、市内に名譽ある人をして之れを管理せしめ、教會堂の入口に慈善箱を掲げ廣く士民の寄附を募り、是れ一は佛僧等が改宗者を嘲り、彼等は布施を佛寺へ納むることを避けんとし、貪心より新宗教へ歸依せりとの口實を鉗せんためだと云ふ。而して其の集め得たる慈善金は偏く患者に施療するの費となし、又殊に貧者を顧みる所があつた。これ日本に於ては貧者を神の罰を蒙つたるものとして輕蔑するの風あるが故だと云へり。當時日本に於ける耶蘇組派はその宣教使を始め信者一同身を持つること極めて嚴格にして、本に於ける己と熱心とは切支丹信者の特色として以て他宗徒と區別し、又殊に佛敎より轉宗し來つて切支丹の修道士となつた回心僧の德行は著しく、夫のバツサイ的なる佛法僧等に優る所あつて大に世の注意を喚起したが、これ新宗教が當時の日本人を引付け得たる一の原因なりと云ふ事だ。斯くてガゴはフェルナンデを伴ふて豊後府内に居住し、シルヴァと魯連須とは山口に留まつてトレー師を援け、アルカセヴァは大友義

鎮の書翰を携へて印度へ還つた。日本の教情を報告し更に多数の宣教使の派遣を乞はんと爲であつた。

當時山口と府内とは切支丹宗門布教の中心であつた。大友義鎮の弟八郎義長が陶晴堅の迎ふる所となり、山口に至り大内氏を嗣いだれば、既に述べた如しだ。是れより先き、義長が未だ豊後に居た時、ザビエールと會見し、山口に在る切支丹を保護すべきを約した。爰に於て大にトレー等を保護し、切支丹公許の裁許状を與へたのである。其の文面左の如し。

周防國吉敷郡山口縣大道寺事從西域來朝之僧爲佛法紹隆可創建彼家之由、任請望之旨所令裁許之狀如件。

天文廿一年八月廿八日

周防介押宇

この裁許状にある大道寺とはザビエールが大内義隆から下賜された切支丹寺だ、佛法紹隆とある佛法は宗教と云ふ意味で、所謂切支丹佛法だ。

是れより先き老臣内藤隆世と其の一族三百餘名を始め有力なる土民の歸依するもの

京都の僧二人

山口に來り切支丹となる

山口に於ける切支丹の盛衰

多々あつて、切支丹ますます盛になつた。爰に京都の佛僧某々等二人新來の外國人に會見し切支丹を研究せんとの好奇心に驅られ、遙々山口へ來り宣教使トレー師に面會して質問討議する所があつた、一日トレーの談、偶々使徒パウロの事跡に及ぶや、佛僧等問て曰く、使徒パウロとは何人ぞやと、依てトレー師は詳にパウロの改心始末を語つた。彼等大に感じトレー師の言末だ終らざるに佛僧の一人叫で曰く、貧道も亦改心して切支丹となるべし、余は從來迫害者サウルの如くであつた故に、爾後改心して使徒パウロの如くならんことと欲すと公言し、他の佛僧と共に洗禮を受けて耶蘇組に入門し、一人はパウロ他はバルナバと稱し、山口附近の村落を奔走して新宗教の宣布を努めた。斯る形勢であつたので爾來改心者續々起り、大内義長の治世五年間に切支丹信者の數三千有餘人に達せしが、弘治二年（一五五六年）毛利元就對陶晴堅の亂起り、山口復亂れ、大内義長敗死するに至り、宣教使は信徒の勸告を容れ、難を避けて豊後府内へ赴いた。而して新領主毛利元就は切支丹を喜ばなかつたので、是の時より以降宣教使の此の地に在らなかつたこと數年、爲めに此の地の切支丹は甚だ振はなかつた。

二 印度支部長ヌゲー來朝

一五五六年（弘治二年）七月耶蘇組の印度支部長メルキオル、ヌゲー Melchior Nugnez は師父カスバル、ヱイレラ Caspar Vielda 及び數名の修道士を伴ひメンデス、ピントと共に來朝した。是れより先き、アルカセヴァの日本より臥亞に還つて大友氏の書翰を總督府に呈し、且つ日本傳道の盛況を報告するや、大に宣教使の心を動かし、日本の傳道に獻身せんとする志願者が續々輩出した。支部長ヌゲーも亦其の中の一人であつた。然も彼をして日本行を決心するに至らしめたのはピントの勸諭があづかつて力あつたと云ふ事だ。一日ピントはヌゲー師を見て、告ぐるにザビエーの日本に於る事業を以てし、且つ勸むるに身を以て日本教化の大任に當らんことを切言し、ヌゲー師にして日本へ赴くの志あらば、余も亦生命を堵し財産を提供して以て隨從せんと誓ふた。ヌゲー氏痛くピントの志に感じ、同僚と協議して愈々決心を堅ふし、一五五四年（天文二十三年）臥亞を發し、馬拉加にて冬期を過し、翌年支那に入り、順風を待て出帆せんとせし際、耶蘇組の總長ロヨラより苟も支部長の重職を辱ふする者は輕々しく其の任地を遠く去るべからずとの旨を記したる書翰に接し、且つ臥亞よりも頻りに彼の歸還を促したので、遂巡決せず將に中途より引き還さんかと思案最中であつ

たが、たま／＼日本より歸港せる葡商の齎せし報告に接して又々心動き、平戸の領主松浦隆信の宣教使招聘の信書を手にするに及んで、再び前進するに決し、直ちに平戸へ向て航行せしが、風波意の如くならずして平戸でなく豊後の日出港へ着船することゝなつた。斯くてヌゲーは府内に至り、領主大友義鎮に謁し、フェルナンデを通譯として印度總督の使命を傳へ、且つ基督教の要義を演説すること數時間義鎮をして速に改宗して切支丹に歸依せしめんと熱心最も努めたのである。然るに、義鎮は既に基督教の眞理を確信する者なるを公言せしも、未だ洗禮を受くるの機宜に非ずと稱して勸誘に應せなかつた。蓋し其の頃豊後の佛教徒は頻りに新宗教に對して惡聲を放ち、士民を煽動して反對の行動を執らしめんとしつゝあつた際なれば、今義鎮にして洗禮を受なば、それを口實として領内爲に反亂の起る虞があつたからである。是れよりヌゲー師は平戸へ至り、領主松浦氏を見るの豫定であつたが、不幸にして病に罹り速に印度へ歸らざるべからざるに至つた。彼が印度へ向け出帆するに當り、數名の葡萄牙人を耶蘇組に加入せしめた。其の中にルイ、アルメーダ Louis Almeida なる者あり、葡萄牙の紳士である、彼は數年前印度を経て日本に來り醫術を業とし傍ら貿易に従事し

て居たのだが、其の將に本國へ歸らんとするに當り、宣教使カゴアの勸に應じロヨラの精神鍛鍊法を修めて大に感ずる所あり、日本傳道の爲に獻身せんことを誓ふに至つた。彼は日本婦人の間に墮胎の惡風あり、且つしばしば生活難の爲に幼児を殺する習俗あるを聞き、私財五千金を投じて棄兒院と、癩病院を設け、又施療院を建て貧民を救助した大友義鎮其の擧を賛し、其の費用を給し、また乳母を備ふべき料として田畑を寄附した。是れよりアルメーダは其の醫術に於て、慈善に於て、傳教に於て、日本切支丹宗中の有數なる人物となつた。

三 平戸の松浦氏と切支丹宣教使

山口の戰亂以來大友氏の居城豊後府内は九州切支丹宗唯一の根據地となつた。支部長コスモ、ド、トレー宣教使を總轄して布教に努めて居た。當時九州地方へ印度より新宗教傳來せりとの噂、遠く京都まで聞えたものと見え、比叡山の僧侶某の書を寄せて宣教使の上京を促す者あり。鹿兒島の島津氏、平戸の松浦氏も亦各々宣教使を其の領内へ派遣せんことを懇請し來つた、田は既に熟て穫時かりしときになれり、されど收穫は多く工人は少し、トレー師一々其の要求に應ずる能はず、漸くにして宣使教を配置

比叡山島津氏
松浦氏宣教使
を招聘す

しヴィレラ、ガゴア及びアルメーダ Louis Almeida を相前後して各地へ派遣交代せしめたが、教勢次第に發展し、九州各地を初め、近畿地方に切支丹寺の建設を見るに至つた。京都及び其の附近の宣教、又は政教の關係を叙述する前に、先づ九州地方宣教の狀況を記述して長崎港の由來に及ぼう。

松浦氏の居城肥前の平戸にはトレー師がザビエーに代つて山口へ赴任せし以來、宣教使の在留する者は一人もなかつたのであるが、葡萄牙の商船は依然として平戸港へ來航したので貿易は倍々盛になつた。されば宣教使は其後も時々是の地に往來して居たやうだ、天文二十二年（一五五三年）葡萄牙船隊の平戸へ來着するや、宣教使ガゴアは府内より是の地に來り、葡萄牙人の懺悔、告解を聴き、且つ祭祀を執行し、又日本人の間に布教し、士民に洗禮を施した。平戸候松浦隆信は之れを見聞して、葡萄牙人と宣教使との間に離るべからざる關係あるを悟り、葡商を永く平戸へ來らしむるには宣教使を駐在せしむるに若し、然らずんば葡商も亦遂に此の地を去て他港へ移らんことを惧れ、書翰を印度へ贈つて宣教使を招聘した。是れ先に印度の支部長ヌゲーが日本へ來朝の途次落手せしものだ。其の書に曰く、

松浦隆信と宣
教との關係

ザビエー聖師會て弊邑に遊び臣民若干に天主の教を授けぬ。余甚だ之れを悦び百方盡力して其の教を奉ずる者を保護し妨害を受けざらしめぬ。其の後豊後に住する師父某弊邑に来ること二回、同族地頭等に洗禮を授けたり、余また其の説ける所を聽きしに、皆善く意に適し肝に銘するに足る、因て近日洗禮を受けんと欲す、竊むらくは尊師弊邑に臨みて余が意を慰めよ、誓て特別の敬禮を以て尊師を待ち、厚く同社の師を遇せん。

因に云ふ是書をメゲーに渡せし者は船長ガマーだ。彼はメゲーの日本來朝の途にあるを告げ松浦氏をして是書を贈らしめたのである。

書中同族地頭も洗禮を受けとあるを見ればトレー師の去つた後も切支丹が大に傳播して居たやうだ。然るに、メゲー師は既に述べた如く、病の爲め平戸へ來ることが出來なかつたので、松浦氏の宣敎使を招致せんと念愈々切なるものがあつた。そこでトレーは先づ宣敎使ガゴを此の地へ派遣し、後ち又ツキレラをして之れに代らしめた大曲記に曰く南蠻船より切支丹宗として珍敷佛法渡りけり。昔よりの神社、佛寺は皆天狗なりとて笑ひけり、彼宗體に成る程の者には過分の珍物を取らする間子細も

平戸へ宣敎使を送る

知らぬ者は皆慾に任して成る者多し。然れば平戸も「エキレンシヤ」とて寺を立けり。御親類衆に籠手田兵部少部殿兄弟御成候、乍去道可様(隆信)には我國の神國の子細を思召し不信仰なされける云々と。爰に云ふ籠手田兵部少輔とは鷹島、生月兩島の領主にして教名をアントニーと稱し、其の妻子等皆既に洗禮を受たが、宣敎使の來住せるより二ヶ月にして鷹島に六百人生月に八百人の受洗者があつた、後には全島悉く改宗して切支丹宗を奉ずるに至つた。永祿七年頃(一五六四)フロエー師が是の地に在し頃葡萄牙人から其の友人に贈つた書に左の如く記載してある。

「余以爲アントヌ(籠手田兵部少輔)候の領地、鷹島、生月の二島に聖靈ありと。

其の島民久く異教に沈溺し居しに今斯くの如く厚く聖教を信じ眞心を發露する、其の狀余の如き現にそれを目撃せし人を除けば誰れ獨り之れを知り之れを信するものなかるべし。余は曾て鷹島人の如き基督教者を見ざりき。此の民は一夜たりとも異教者と交通するを欲せず、毎金曜日教師の讀經を聽くの際、貴賤、老幼、父子を論ぜず、皆信心の堅き事嚴石の如く、涙を流す程痛く其の體を打ち、男女多くは膝行して信者の墓所なる山頂にある十字架の所まで行けり、他人若し説教場に於て彼等

鷹島、生月の信者

を見れば、歐洲の熱心者と思はざるものなからん。而して彼等は能く斷食に耐へ身を嚴格に保たざるもの少し。われ等此の信者を想像する時は己れ自身は基督信者ならざりしかと思ふ程なり、君は彼等を以て徒に眞神を口にのみと思ふべけれど其の實決して然らず、躬から基督及び聖母の賛頌を吟するなり。彼等の德行上に付き言はんと欲すれども之れを盡し得べからず。唯一言以て之れを盡さば聖靈此の二島にありて信者と俱に存亡す」云々と。

その信仰の熱烈なる、迫害も之れを絶つあたはず、威武も之れを屈する能はず、水火の洗禮を受けてます／＼堅固となり、徳川氏の嚴密なる禁教令の下にあつても秘密にその信仰を維持し、子々孫々相傳へて以て明治維新の時代に及んだのは此の兩島の切支丹である。

當時平戸に居つた宣教使はヱイレラにして、此地に留まること僅々數ヶ月に過ぎなかつたが、其の間に千三百有餘の士民に洗禮を施し、三箇の佛寺を改變して切支丹寺となしたと云ふ。切支丹の盛況是の如きに至り、勢ひ佛教徒との衝突を免れない、佛僧等は切支丹の日に月に隆盛なるを目撃して憤慨措くあたはずして、百方之れが妨害

平戸に於る切支丹の隆盛、
佛教徒との衝突

を試みた。或時夜間竊に基督教徒が樹てたる墓地の十字架を引き倒して切支丹に侮辱を加へたので、之が動機となつて久しく兩者間に鬱勃せし敵愾心を爆發した。是れより争闘絶える間なく、切支丹の徒は之れが復讐として佛寺を火し、佛像を焼き佛者は又佛陀の爲に怨を報いんとて市民を煽動して切支丹教徒を迫害せしめ、其の軋轢ます／＼甚しく物情恟々であつた。折しも其の頃松浦家と大友家の間に不和を生ぜしかば、佛僧等は是機に乗じ切支丹宗徒を誣て敵國の間者となし、宣教使の追放を領主に迫つたので、隆信如何ともする能はず、勢の不可なるを觀て宣教使を諭し、一先づ其の領内より退去せしめたのである。是れ實に一五五七年（弘治三年）頃の事だ。然るに、其の後も基佛兩教徒間の軋轢止まず、十字架を拜せしとの故を以て主人の爲に慘殺されし婦人があつたと云ふ事だ。それは恐らく切支丹殉教者の最初の者であつたのだらう。

四 大村純忠と切支丹宣教使

宣教使追放により松浦氏と宣教使との間に不快の感を惹起せしも、利益を主とする葡萄牙の商船は依然として平戸港に輻輳し來たので、松浦隆信の意稍驕り、復宣教使の

大村純忠其の領地横瀬浦を開く

意向を顧みなかつた。然るに其頃大村の領主、大村純忠が宣教使と特約を結び、其の領内の横瀬浦を開いて葡商を誘致するに至り、爲に平戸の繁榮を滅殺するに至つた、ケンブルの日本歴史に當時の情況を述べて曰く、「此の時に當つて日本帝國は未だ鎮鎗せられず、其の大小名の將軍に服従するや尙ほ嚴正ならざりしを以て、日本人の國內又は海外に旅行すること自由にして、其の商用等によつて行かんと欲する所の地は何處として行がざるはなく、外國の人民と雖ども其の何等の要務たるに論なく國中何れの港にても其の便利とする所に隨つて入港するを得たり、是れ即ち葡萄牙人が始めて日本に渡來せし時の情態にして九州の大名等が彼等を款待する頗る優渥を極め、且つ葡萄牙人と貿易を開きて各々其の臣民を利せんとするの熱心より、諸大名の間に競争心を喚起し、各人銳意自己の港をして外人の撰擇に適せしめんことを勉めたり」と。此の如く當時の日本では居留も旅行も極めて自由であつたので葡商等は貿易上の利益と宣教使の便宜とに従つて、何れの浦へでも其の市場を移すを避けなかつた。況哉、大村純忠の提供せる約條は葡商に最も有利なる條件であるに於てをやだ。其の特約左如のし。

當時の日本は
外國人の居留
も旅行も自由
であつた

一 基督教の寺院を創設し、宣教師を充分に給養し、葡萄牙人の爲に横瀬浦の一港及び其の周圍二里四方の地を開き、諸税を免じ、又切支丹僧侶の許諾なき異教者は一人も港内に住するを得ざらしむべし。

一 葡萄牙人等港内に在住するものへは何人に論なく、諸税を免除し、自今十ヶ年間葡萄牙人と貿易を營む諸人へも課役一切を免除すべし。

横瀬浦とは佐世保軍港の西南岸に位する處にして、今川内村と合併して瀬川と改稱す、是の時府内にゐたトレー師は大村氏の横瀬浦開港の書を得てアルメーダを大村へ遣はして商議せしめた、而して己れは老軀をひつさげて平戸へ赴き、葡萄牙商人等に横瀬浦へ移ることを諭した。爰に於て平戸港内に居た葡萄牙船長等は直は碇を揚げ、吾人は切支丹を迫害する地に留つて貿易する能はずと公言しつゝ、平戸港を出帆して横瀬浦へと赴いた、大曲記に曰く、「平戸津へ南蠻船着船候も豊前屋形其頃九州の管領にて候へば、彼の御下知にて候、聊も私ならぬ子細にて候を大村殿をして横瀬浦に町を立て南蠻船を呼取なされ候間、大村純忠公「キリシタン」に御成候間、平戸のエキレンシヤ（切支丹寺）も横瀬浦へ引け申候間、諸國の商船も平戸の瀬戸を打通り横瀬

葡萄牙船横瀬
浦へ移る

浦へと通りければ地下に居住の旅人も横瀬浦へと通り候間、平戸は大分物さびしく成候も子細有ることにて候」と。

大村純忠の横瀬浦を開いた理由

そも、肥前の大村家は（現代の大村伯爵家）九州の名家有馬家と其の祖先を同ふしたる舊家である。天文十九年大村の領主純前の薨するや、老臣等相議し有馬晴純の第二子藤童丸を迎へて大村家を嗣がしむ、之れを純忠とす。而して純前の庶子貴明は其の生母の素性賤しきを以て出て後藤家を嗣ぐ、純忠大村の領主となつてより銳意して國政を執り數年の間富強の方法を講じて居たのだが、國風に妨られて事、志と違ひ苦心の効空しかつた。蓋し大村家の領地、各郷各村には各々領主あつて其の所得を専有し、純忠は大村の領主たる名あるも、其の實収入少なく財政極めて貧弱であつた。然るに、其の頃隣國にて盛行はるゝ外國貿易の利益大なるを聽き、老臣等と協議し外國人を其の領内へ引寄せんとて、横瀬浦開港の條件を提出して以て宣教使に謀り初て其意志を達したのだと云ふ、或は云ふ純忠曾てグイレラの著した書を見て感ずる所あり、親しく宣教使に會して教を受けたいと志して居たが、老臣等の反抗を憚り、因て貿易を口實として宣教使を招待したのだと。其の動機は何れにあつたとするも、是

純忠家臣等と共に洗禮を受

の時より以來横瀬浦は葡萄牙人の貿易場となり、諸國の商人等も特權を利用して此地に移住し來る者多く、忽ちにして一寒村より變じて一繁榮なる市場となつた。トレイ師はフェルナンデを伴ふて豊後より是の地に來り、純忠も亦別宅を是の地に構へ、しばしば宣教使と相見るに至つた。

斯くて純忠はトレイ師より教を受けること數年、遂に永祿六年重臣二十五名と共に洗禮を受けた（西教東には永祿五年とあり又重臣の數三十名とす）大名にして領洗し切支丹となつた者は彼が始めである。トレイは純忠にバルトロミウと云ふ教名を授けた、純忠の洗禮を受けた動機に關して説あり。純忠は葡萄牙人が其の地から逸去せんことを恐れ、世子の誕生を條件として信教を約したるに、忽ちにして夫人妊娠したるに因り止むなく重臣等と洗禮を受けたのだと（史學雜誌）其の心に眞の信仰なく、單に葡萄牙人を領内に抑留せんが爲め、已を得ずして洗禮を受けたのだと云ふは純忠を誣ふるの言としか思はれない。蓋し徳川時代に於ては切支丹信者と云へば亂臣賊子以上と見做され、人間にして人間にあらざるが如く嫌惡せられたる時に當り、其の祖先に切支丹信者があつたと云ふは、大村家に取つて最大恥辱であつた。さればたとへ純忠の洗禮を受けたことは否定する能はざる

も、せめては幾分にも其の恥辱を軽くせんとして、愚にも已を得ずとて云つたのではあるまいか、然も此れ大に純忠の人格を傷くるものだ。彼が眞の信者であつたことは其の受洗後の舉動が證明する所だ。されば西教史に記する所が却て事實なるや明だ。曰く、「純忠トレー師及びフェルナンデより、しばしば基督教の大意を聴聞し且つ質問して其の教義を極めしが、一日アルメーダよりコンスタンチン大帝の改宗談を聞き深く感ずる所あり、翌朝使者をトレー師の許へ遣はして曰く、純忠既に基督教の大綱を悟り中心實に其の教を信奉せり、幸に神の思恵を垂れ給ふて授くるに一男を以てせば、其の時公然信仰の告白をなすべし、若し然らずして一子誕生の前に信仰を告白せば、國亂を醸し危険を招くの憂あり、爲に基督教の進歩を妨ぐるべし、然れども領主は内心に奉教するの目標として衣上に十字架繫帶を充許する事と、信仰を速かならしめんが爲に、一子降誕を神に祈らんことを師長に頼ましめければ、師長は其の請を許可せり。×××それより二月を経て、純忠重臣三十人を卒めて横瀬浦に至り、トレー師に會して曰く、余曾て尊師に誓へり、神が予に一子を恵むあらば公然信仰を告白して洗禮を受けんと、然るは近頃吾妻姪みたり、願くは吾に洗禮を施し重臣三十人も

純忠の受洗に
關する西教史
の記述

之れを俱にせんことを欲す、尊師是れを允許せらるゝや否やと、トレー師之れを聞き大に喜び感涙を流して曰く、王の願意は予の認む所なり。是の希望だに遂げなば死すとも遺憾なしと、因て神に感謝し、純忠を以て羅馬のコンスタンチン大帝に比して之れを賞揚し、その前途帝の如く基督教を保護せんことを求めたり」云々。

純忠は有馬家より入つて大村家を嗣いだ人で切支丹となるには最も困難の地位にあつたのに、それにも拘はらず受洗したのは深く感ずる所があつたからなのだらう。

五 切支丹に因んだ大村家の内憂外患

純忠洗禮を領せし日、其の兄有馬義貞(或は義直)が佐賀の領主龍造寺隆信と交戦するを聞き、兄の爲に出陣するに當り、兵士を率ゐる摩利支天堂まろしあてんに至り、神像を拜殿より出し、劔を以て其の首を斬り、火を放て、神社、偶像を焼き、其の跡に十字架を立て、之れに勝利を祈つて出發した。然るに、その戦争は勝利であつたので、それは神の保護によるものと思ひ凱旋後其の信仰倍々深く、神社を破棄し、佛像を燒棄し、佛寺を改造して切支丹寺となし、排佛、毀社の勢頗る猛烈を極めた、佛僧等大に怒り非切支丹武士と通じて純忠を廢するの隱謀を企てた。初め純忠の洗禮を受くるや、トレー

純忠の排佛毀
社

師に告ぐるに神社、佛閣を毀ち偶像を廢棄するに過激の處置を爲すべからず、是れ等の事は時を待て徐々になし、以て偽教の根本を刈るべしであると誓つたのにかゝらず、今や卒先して斯る過激の舉に出で反抗を誘致するに至つた。純忠の夫人於ゑんの方は其の夫君が祖先の宗門を棄て、新宗教に歸依せるを憤つて居たが、彼女も亦久しからずして回心して洗禮を受くるに至つた。

永祿六年七月の干蘭盆祭に純忠祖先の佛寺に參詣したる際、其の位牌を取り之れを一括して香爐に投じ、祖先祭典の費用を以て貧民五六千人を給恤した、排佛毀社の勢倍々盛になつた。こゝに於て老臣等も亦純忠に反きて陰謀黨に組し、是の機を以て純忠を廢せんと謀るに至つた。反切支丹の陰謀とは宣教徒を殺し、純忠を廢し、先に出で後藤家を嗣ぎたる貴明を立て、大村の領主とせんとするのであつた。反徒等平戸の松浦氏及び佐賀の龍造寺氏に援を乞ひ、其の承諾を得た。機既に熟せり。反徒等純忠を欺きトレー師を横瀬浦より大村へ招かしめ、道に要して之れを殺さんと謀つた。永祿六年八月十七日（一五六三年）反徒等二手に別れ、一手は横瀬浦街道に出てトレー師の來るを待ち、他の一手は大村城下に迫り火を放ち亂に乗じて純忠を捕へん

大村家の内亂
老臣等の陰謀純忠兵を得て
反徒を破る

とするのであつた。斯くて街道に出たる一手はトレー師を迎へん爲に送つた使者一行の還り來るを遙に認め要撃して之れを殺害し、直に轉じて他の一手に合し進で大村に迫り火を放て城下を焼きたてた。純忠事不意に起りて防禦の術なく、辛ふじて包圍を突破し、附近の林叢に遁れて潜伏した。居ること五六日、一支那人の食物を供するありて漸く饑を凌ぐを得た。それより後、數日夜陰に乘じ林叢を遁れ出て、大村附近の孤城に據り、寡兵を以て籠城した、大村、横瀬浦相尋て陥いつた、反徒の勢ますます猖獗となつた。純忠内に兵少なく、外に援なく孤城落日命旦夕に迫る。反徒等使者を城内に派して純忠に勤むるに速に切支丹を棄て佛教に轉宗せんことを以てした、純忠聽かず反徒等海陸より迫る、城兵日々に減じ海陸の對鎖嚴重にして援兵を得るの望なく、糧食既に竭き、城將に陥らんとするの刹那、純忠の父有馬晴純來り援け、暴風又起つて盡く松浦氏の艦隊を破壊するに至つた、純忠大に喜び此の機に乗じ突出して反徒を破り之れを走らせた。蓋し、是の時馬にも反亂起り、佐賀の龍造寺と内外相應じて義貞を攻めたので、義貞漸く身を以て免かれたやうな始末にて、其の弟純忠の危急を救ふことが出來なかつたのだが、其の父晴純二子の危急を見て大に苦心し己れ再び國

政を執つて有馬を治め、又私に反徒の巨魁を誘ふに利を以てし、遂に其の援を得て大村に進軍し純忠を重圍の中より救出したのである。而して有馬晴純は今回の反亂が新宗教に因て起つたものなるを以て深く基督教を嫌惡し、其の領内へ布告して新宗教を禁止した。蓋し當時義貞は未だ切支丹宗に歸依し居らざりしも弟純忠の勤により領内口の津を開放して貿易場となし、且つ宣敎使を款待して居つたので、口の津、島原其の他の地方に於て新宗教稍々盛であつたのである。

措て大村純忠は其の父晴純の援を得て反徒を破り、其の巨魁を誅し漸く秩序を恢復し、内に仁政を施して以て領民を撫育し、外は和戰其の宜しきを得て戰國争亂の際に處し、列藩に對して能く其の藩の勢を維持して來た。然るに天正元年諫早、松浦、有馬の三大名相聯合して純忠を攻めた。家臣の中、非切支丹徒の之れに應ずるものあつて純忠再び危急に迫つたが、切支丹武士の奮闘により之れを撃退するを得た。蓋し、諫早氏は純忠の義兄弟なるも、純忠の佛敎に轉宗せざるを惡み、有馬義貞は其の領内口の津へ葡萄牙人の多く來らざるは其の弟純忠の妨害に因ると信じて彼を怨み、松浦氏は開港場の問題に關して純忠に含む所あり、相聯合して大村を襲つたが却て其の破る

純忠再渡の危

所となつた。然るに純忠は勝利を得たと雖も敢て兄義貞に怨を報いることなく、却て之れを恕すること基督の教の如くせしかば、義貞感奮し後ち遂に回心して洗禮を受くるに至つた。

大村純忠は斯くして再び危険を免かれたと雖も、家臣の中切支丹を非とするものは佛僧等と相謀り、しばしば敵に内應じて純忠を危地に陥入れたので、今後如何なる陰謀を逞するやる知らず、今や宗教問題は純忠大名たる地位の得喪問題となつたので、之れに對するの道を講じ、先づ其の家臣を始め領内の人民を基督教化せんと試みた。大正二年（一五七四年）正月元旦、純忠、參殿の家臣及び佛僧等に會し、告ぐるに、神の恩惠の偉大なるを以てし、群臣一同基督教を研究して速に改宗すべし、佛僧等も亦其の宗旨を變更して切支丹に轉ずべしと懇々諭告し、其の言辭剴切を極めた。衆皆唯々として退いた。是れより傳敎隊を組織し之れに護衛を附して領内の各市邑を偏く巡回布敎せしめた。大村領内の士民は靡然として切支丹に傾いた。改宗せしもの貳萬人の多きに及んだ。大村領内六拾ヶ寺の僧侶中退去したるものは僅々數名にして、餘は皆新宗教に歸依した。爰に於て、純忠、是等の佛寺を改造して切支丹寺となし、改宗した

純忠家臣僧侶に諭告す

る僧侶を用ひて新宗教の宣傳者となし、ますく傳教を盛になした。

六 宣敎使トレイ等の遭難

大村内亂の報豊後に達するや、道路相傳へて云ふ、純忠、義貞の二君弑せられ、トレイ師以下の宣敎使皆殺さると。非切支丹の徒は之れを聞いて大に喜び、切支丹の徒を嘗つて曰く、此の宗門に至る所で騒亂を醸し人民を苦むる所の邪教だ、之れが信奉者は其の貴族たると平民たることを問はず、何れも皆之れが爲に危険を蒙るは神佛の罰にして、基督の神之れを保護する能はざるは其の無能たるの明證ではないか、切支丹宗たれんと欲する者は、豫め先づ危害に罹るの覺悟勿かるべからずだと嘲笑した。豊後にある宣敎使等も亦平和の攪亂者と見做され、至る處にて凌辱を蒙り、白刃の其の身に及ぶごとはしばしばであつた。豊後に在る切支丹宗徒の最も憂苦とせる所は日本切支丹の開祖たるトレイ師及びフェルナンデの慘殺せられしとの悲報であつた。因て宣敎使等はアルメーダを遣はしてトレイ師等の安危を探られしめた。然るにアルメーダは高瀬に至りて始てトレイ師等は無事にして難を葡萄牙船に避け、大村の領主純忠も亦孤城に嬰守して奮闘しつゝあるとの吉報に接し、大に喜び、それより潜行して

豊後の宣敎使等大村の亂を開きトレイ等の安危を氣遣ふ

島原、口之津を経て、横瀬浦に達し、トレイ師に船中に會し其の無難を祝して感謝措くあたはずであつた。蓋しトレイ氏の危害を免かれたのは、反亂の當日。純忠の召に應ぜずして使者のみを還らしめたからで、偶然だとは云へばいへ全く神の攝理によるものとせねばならぬ。

トレイ師横瀬浦を去る

斯て騒亂の爲に横瀬浦の人民は離散し港内は全く荒廢に歸したので、トレイ師は斷然住所を變換するに決し、アルメーダ及びゴンザレズの二人を従へ島原に赴いたのだが、領主有馬晴純が宣敎使の滞在を許さざる旨嚴命したので、長く是の地に駐まること能はず、因て有馬の信徒を慰諭して時機の到るを待たしめ、己は大友氏の領地高瀬の天主堂に赴いて逗留した。其の間青年傳道者の一人フレール、エドワード、シルフ病に罹つて卒去した。彼は豊後に在て傳敎し、其餘暇日本の文典を作つて以て外人の和語を學ぶの便に供する等勤勉至らざるなく、前途有望の青年であつたが、終に逝いた、人皆其の死を哀まざるはなかつた。折しも有馬晴純薨去し、義貞再び政治を執るに至り。是の地の門戸切支丹の爲に再開されたとの報告に接し、僅に愁眉を開くを得た。

傳道者シルフ死す

七 葡萄牙貿易場の變遷

葡萄牙船再び
平戸に來る

横瀬浦の陥るや、宣教使の平戸へ來るものもあつたが、松浦氏は之れを冷遇して顧みなかつた。然るに葡萄牙商船の再び平戸港へ出入するに至つて大に之れを欸待した。爰に於て宣教使は松浦氏をして平戸に於ける切支丹に便利を與へしめんと苦心して居た。永祿七年葡萄牙の商船二艘支那より來りて平戸港へ入り、尋て又セント、コロワ號と稱する葡萄牙の宣教使三名を載せて同港へ至ると聞き、鷹島に居た宣教使フロアエーは葡萄牙人に商業上の利益を得せしむるは神の榮光を増加するものだし、又平戸の領主は葡萄牙人との貿易を廢するを欲せざるのを奇貨として船長に命じ、其の船を港外數里の外に停泊せしめた。これ平戸の領主松浦氏をして宣教使は葡萄牙人に對しても大に權威あることを知らしめて己等に敬服せしめんとの策略であつたのだ。領主松浦氏、人をして其の入港を促さしむるも、船長は宣教使フロアエーの許可を得ざれば、船を港内に入れ難しと稱して其の命に應じなかつた。松浦氏は固より貿易の利を重ぜし人なれば、何とかして葡萄牙船を港内へ入らしめんと欲し、やがて特使をフロアエー師の許へ送つて前日待遇の疎略なりしを陳謝し、爾來必ず切支丹宗徒の取扱を鄭重に

宣教使と松浦
氏との軋轢

すべければ、曲けて船を港内へ入られたとし請求した。然るに宣教使等は猶も領主に詭計あらんことを疑ふて、其の積荷を陸揚するを許さず、先づ宣教使を平戸に住居せしむる事、及び自費にて天主堂を平戸に建る事の二ヶ條を要求し、領主其の約を履行して後ら始て貿易をなすことを許した。フロアエー師等が曩に驅逐せられたる頃、住居せし家屋を與へられしは一五六四年の八月にして、(永祿七年)當時新來の宣教使はマルキオル、ド、シダレト、バルタザル、カブルの三人にして、やがて彼等は松浦氏に謁して厚遇を受けた、而して平戸の切支丹寺の建築竣功せしは是の年の十二月八日にして之れを天門寺(じんもんじ)と稱した。(西教史)

平戸の松浦氏は葡萄牙人との貿易を持続せんとの熱望より餘儀なく切支丹の徒に特權を賦與せしとは云へ、因より宗教を敬愛するの精神なければ、家臣等の切支丹に反對する者あるも之れを看過して顧みながつたので、彼等は機に乗じて切支丹宗徒を窘迫するを憚らなかつた。籠手田氏(こてだし)は即ち彼等の最も注目する處であつた。大村純忠使を贈つて籠手氏の神國擴張の爲め努力するの勞を謝し且つ之れを賞した。反切支丹の徒は之れを以て陰謀の密書となし使者四名を殘殺した。されど籠手田氏には手をつく

平戸に於る反
切支丹の紛擾

ることは出来なかつた。又其の頃平戸に在留せしアコスタ師の許へ印度より平戸の切支丹寺に安置すべき聖母の尊像を贈り來つた。然るに松浦氏の家臣加藤某なる者、中途にて之れを奪ひ之れが眼を抜き醜體として之れを己の室内に置き人々の侮辱するにまかせた。籠手田氏大に怒りて其の無禮を責めた。アコスタも亦彼等の不法を領主へ訴へたが、顧みられなかつた。爰に於てアコスタ師はまた、復、葡萄牙船の平戸へ入港するを妨げんとて船長に其の意を通じたので、是の時支那より來港せし貿易船シャンド、ペリラ號は俄然針路を轉じて大村の領地福田浦へ向つて航進した。平戸候松浦氏は之れを聞いて大に怒り、直に五拾艘より成る艦隊を派遣し葡船を捕獲して平戸へ引き來るか、然らずんば之れを擊沈すべしと命じた、然るに其の進撃功を奏せず却て葡船の爲に擊退せられた。是れより以後葡萄牙の商船は平戸を見棄て大村領の福田浦へ出入することゝなつた。是れは純忠が横瀬浦の代りに新に開港せる貿易場にして一時は大に繁榮したが土地が不便であつた故か久しからずして長崎へ移るに至つた。(元龜元年)長崎拾芥に南蠻船大村の内横瀬と云所に五六年渡海し、其の後平戸に二三年來る。此所にて日本人と口論をなし平戸を立去り、又大村の内福田浦へ二三年來ると云ひ。

福田浦

大村記に「永祿五年横瀬浦南蠻船入津、同十年まで來る、同十一年福田浦へ入津、元龜元年長崎浦へ入津となる」とあるは是である。福田津は今福田村と云ふ、浦上の西、稻佐山の麓にして外洋に臨み、其の港澳は神の島の北、一海里に當る處で極めて狭少であると云ふ事だ。

長崎開港の由來

長崎港が外國貿易樞要の市場となつたのは元龜元年以降である。長崎三百季間は之れが由來を記して曰く、「元龜元年に葡萄牙商船風難に遇ひて西浦福田と云ふ所に漂着したる時、(實は永祿年中の事にして、漂着に非ず前記の如し)長崎の良港たるを検知し來年よりは此の港に來るべければ其の用意あり度と領主長崎甚左衛門に堅く約し貿易を遂げて出帆したり。甚左衛門は大に悦び直に其の由を大村丹後守純忠に具申し大村の家臣友長某と議して町的地割を爲し高來、大村、平戸、島原等所々の商人を呼寄せて家屋を建築し、諸國より來るべき商人等の旅店をも取設け、凡そ五六町の町を造り待受たるに、翌元龜二年の夏(實は元年ならん)に至り、約束に違はず南蠻船媽港より二三艘打連れ貨物を積載して長崎に入津した。是れよりして長崎は南蠻人通商の定港となり、次第に商館をも設けたれば我方にてり追々に移住する輩多く數年ならずして貿易の一要港たるに至

り、純忠資を投じて切支丹寺を建設す。永祿十一年に至り落成したり。然るに天正の初に至り（或は云ふ天正五年）長崎甚左衛門は軍資に差支へ（大村と龍造寺との戦争）葡萄牙人に謀り長崎の地を抵當として巨額の金を借入れ以て一時の急に投じたりしが、其の期限に到りて之れを返済せず、餘りに迫られて甚左衛門は長崎を去り時津に退きて其の督促を避けたり。葡萄牙人は之れに由つて大村丹後守に訴へ甚左衛門へ貸たる金が我等の私金にてあらば兎も角も計ふべき次第も候はんが是れはゼズイト派教會の傳道資金にてあれば損失と相成りては宗門の體に對して申譯なし、此の上は直に貸金を返辨あるか、然らずば長崎の土地を教會に渡さるゝか、兩條の中に取極め玉はるべしと迫る、大村氏とても甚左衛門が爲に代償する程の餘裕はなく、さりとて長崎の土地を教會に渡し與へんも有繋に爲し難き所なれば、如何にすべきと返答に差支へて月日を送るに、教會よりは益々大村に迫りて己に事を及ばんとす、有馬修理太夫は此の葛藤を聞及び、兩者の間に立て調停し、遂に大村を説き長崎を教會に渡し與へたりとて何條仔細の有るべきやとて遂に長崎の地を擧てズズイト教會の所領に渡したり、是れよりして長崎は切支丹領と成り」云々。爾來長崎は宣敎使の管轄に歸して市

中の政治を沙汰し、切支丹寺を建設し、九州地方切支丹の根據地となり、外國貿易の一大市場となり、數年を出ずして人口三萬以上に達し、樞要の地となつたのである。

第四章 九州地方に於る切支丹諸大名

一 基督教に接せし九州の諸大名

九州諸大名の内、逸早く基督教宣敎使に接せし者は鹿兒島の島津氏、平戸の松浦氏、豊後の大友氏であつたが、就中、大友義鎮、宗麟は初より基督教を保護して宣敎使を欵待せしも故ありて未だ受洗するに至らず。大名にして新宗教に歸依せし最初の者は實に大村の領主丹後守純忠である、是れ則ち永祿五年のことにして其の詳なる事跡は前章に於て已に叙述せしが如し。

大村純忠改宗以來國富み、兵強く小國でありながら九州大名中に稍々頭角を擡ぐるに至つたので、之れを見聞する者切支丹の神の御利益偉大なるを信じ、競ふて宣敎使を其の領内へ招致せんと試みた。五島の領主宇久氏は其の最たるものであつた。宇

切支丹に歸依したる最初の大名

五島の領主宇久氏

久氏、後ち五島と改む、武田大膳大夫有義の三男、宇久次郎家盛の子孫であると云ふ。初て宣教使を招いた領主は五島若狹守純玄の祖父に當る人だ、彼は永祿七年平戸在留のバルタザル、ガゴ師に書を寄せ基督教宣教使を一人五島へ派遣せられんことを要求せしが、越えて二年永祿九年に至り、アルメーダ、魯連須の二人遣はされて初て是の地に至る。島主大に喜びて之れを迎へ、一日家臣四百餘人を殿中に召集し、領主夫妻を始め殿中の侍女等皆列席して基督教の説教を聴聞した、其の時の説教者は日本人にして能辯を以て有名なる魯連須其の人であつた。彼れは基督教の要義を演述すること三時間其の所説極て剴切にして其の辯舌亦爽であつたので、聴者皆醉へるが如く感嘆措くあたはずで。アルメーダ立て質問を促せしに敢て一言を發するものもなかつた。爰に於て領主群臣に代り謝して曰く、天地萬物の創造者及び宇宙の主宰者は獨り眞神のみであるとの高説を聴き一同深く感佩せりと。斯くて是の説教の噂、市中に傳播せらるゝや、人々争ふて新宗教に歸依んとせしが、爰に端なくも一箇の災害發生して此の氣勢を挫折するに至つた。領主は平生頗る壯健の質であつたが偶然此の日を以て發病し、熱度烈しく、氣息奄々、命旦夕に迫るが如く、容體極めて危険となつ

島主家臣と共
に切支丹の説
教を聞く

切支丹に對す
る流言蜚語盛
に起る

た。そこで釋徒は直に流言を放て島主の急病は神佛の責罰だ、是れ島主が基督教宣教使を招き、日本の神佛を蔑し、佛僧を誹謗せしが故であると云つた。島民は領主の仁政に悦服し常に之れを敬愛して居たので、佛僧等の流言を聞くに及んで、宣教使を見ること恰も君主の敵の如く、機を見て之れを殺害せんとした。佛僧等は倍々勢を得、恣に殿中に侵入し佛力を以て領主の平癒を祈り、因て以て宣教使追放の許可を得んとたからんだ。然れども、彼等の祈禱は毫も効驗なく領主の病はますます、重るばかりであつた。アルメーダ等は衆怨の中に包圍せられ、事の爲すべからざるを見て、痛哭嗟嘆し、天を仰ぎて只管基督教に迫り来る禍を免かれんことを祈願した、乍ち天より、汝往いて島主の病を醫すべし、疑ふ勿れ唯信せよとの聲を聞いた。蓋し彼は元と醫士にして其の術に長じたる者であつたからだ。爰に於てアルメーダ自ら危険を侵して殿中に伺候し、強て領主の病床に侍り、勸むるに靈藥を以てせしに、其の効驗乍ち顯れ、次日に至りて熱度大に減じ、僅々四日にして全く快復するに至つた。之れを見聞したる殿中の人々は勿論市中の人々の歡喜湧くが如く、奥方及び公子等は親しくアルメーダの宅を訪ふて感謝を表し、市民一同も亦皆其の醫術の靈効を驚賞して喜んだ。爰に

於て佛、基の地位顛倒し、島主は基督教の許可を全島に布達し、人民も亦靡然として新宗教に傾き、基督教の氣勢頓に揚つた。然るに、其の後數日魯連須人民を集めて説教しつゝありし際、突然市中に火災起り全市の大半を焼失し、尋て島主復た指頭に一腫を生じて大に惱んだ。衆人は復た之を目して神佛再び怒を發するの徴となした。斯る災害の頻々として起るのは新宗教の所爲であるとして甚しく宣教使等を嫌惡し。島主に迫つて彼等を放逐せんとした。アルメーダは醫藥を以て島主の苦痛を和ぐることを得しも、火災の損害に至りては償ふに由なく、此の如く一難去て一難來り、天災、地異を以て悉く宣教使の所爲となし、之れを妄信誹謗するに至りては復如何ともするに由なく、領主に請ふて自ら退去せんとした。島主は慰諭して之れを許さず、却て家臣に諭すに基督教を信ずべきを以てし、アルメーダ等も亦銳意布教に務めた結果、島主の家臣二十五名及び全島の奉行某を始として奉教者續々起つた、さうして此の地と奥浦の二ヶ所に基督教寺院の建設を見るに至つた。然るに其の後間もなくアルメーダは病の爲に退去し、魯連須も亦京都へ赴任せしが、永祿十一年ジョン、バブチイスト、ド、モン John Baptist Monts 師來るに及び、世子父君の默諾を得て洗禮を受

島主の世子及
び家臣等洗禮
を受く

世子ルイの熱
心

けドム、ルイと稱した。尋てアレキサンドロ、ワリニャーニ Alexandro Valignani 師がモンツ師に代るに至り、世子の夫人及び従者百有餘名また洗禮を受けた。それは元龜元年頃の事だが、是れより先き、非基督教徒は一貴人を主謀者と仰ぎ、平戸の松浦氏と通じて、反旗を翻したが、島主の爲に征服せられて失敗した、然るに今世子の回宗せしを見て復之れに反對し、島主に迫つて世子を復宗せしめんとした。島主は己を得ず世子に復宗を諭したが頑として應ぜなかつた。島主其の子の決心堅きを見て大に感服し却て反徒を制して以て世子の志を果さしめた。既にして父君没し世子ルイ代て島主となるに及び、自ら全島の使徒を以て任じ、親しく諸島を巡回して人民を教へ、諭すに基督教に歸依すべきを以てし、頗る溫和の手段を以て士民を勧誘して布教に務めたるに其の結果頗る良好で、數年ならずして全島殆ど切支丹となるに至つた。島主ルイは天資溫和にして人民を愛し徳政を布いて全島を統轄し能く人民の疾苦を顧みたので、士民皆悦服し全島始て平和を得た。其の切支丹寺に詣づるや、島主の爲に別席の設あるに拘はらず、神前に於ては我も民も等しく其の臣僕にして、其の間に上下の隔てあるべからずと云て、自ら普通席に即ぎ禮拜したと云ふ事だ。彼は實に基督教主義を政

治に生活に實行せんと試みたる有爲有徳の君主であつたが、惜哉天此君に年をかさず、天正四年壯年にして逝去した、人民其の死を哀むこと父母に喪するが如しであつた、其の子純玄幼にして叔父玄雅後見となつた。玄雅基督教を喜ばず、其の後見職となるや、首として基督教徒を迫害し、宣教使を追放し、十字架を倒し、其の寺院を破壊し、基督教徒に迫りて佛教に復宗せしめたので、志ある者は皆難を避けて長崎へ赴いた。斯くて五島の切支丹は表面絶滅せし姿であつたが、文祿三年玄雅朝鮮陣中に卒去し、純玄國政を執るに至り父の志を嗣いで基督教を保護したので其の勢復々盛になつた。(五島の系圖詳ならず藩翰譜によれば朝鮮陣にて卒したる幼主純玄にして其叔父玄雅其後を承て島主となつた如く記載しあるも俄に信じ難い本文は切支丹大名記の記事に據る)

二 天草諸島の切支丹大名

肥前の天草群島は當時大友義鎮の配下にぞくし五人の小名之れを分割して居た。其の中の一人なる志岐兵部少輔鎮經は葡萄牙人を其の領地に招いて貿易の利を得んと欲し、其の手段として先づ宣教使を招待せしに、其の頃京都より九州へ來り長崎に静養しつゝあつたヱイレラ師之れに應じて志岐島に赴き、領主を初め島民六百人に洗禮を

志岐兵部少輔
鎮經

施した、其の後ミセス、ワゼー師の來つた時千三百人の改宗者を得、切支丹全島に盛になつた。然るに、島主鎮經の志は宗教よりも寧ろ貿易上の利益を得んとするにあつたので、斯くまで宣教使を欵待せしに拘はらず、葡萄牙商船の來航稀有にして、貿易の發展意の如くならなかつたので、遂に公然基督教會を脱し、其の領民にも轉宗を命じたと云ふ事だ、是れは永祿九年より十一年に至るまでの出來事である。然るに、其の後永祿十一年宣教使カブラルの一行を乗せたる葡萄牙船は志岐島に來航し、彼處にて宣教使會議の開かれたのを見れば基督教禁制は一時のことであつたかも知れない。藩翰譜によれば島主鎮經は有馬晴信の第六子慶童丸諸經を養ふて子となすとあれば、切支丹に縁故深かつたのは知るべきである。(諸經は大村純忠の弟にして有馬晴信の叔父に當るのだ)

永祿十一年(一五六八年)天草本渡の領主天草伊豆守も亦宣教使を招待した、然るにルイ、アルメーダは此處に來つて布教に着手する前、伊豆守をして左の四條件を約せしめた、是れ從來の實驗により慎重の態度を執るの必要を覺つた故であると云ふ事だ。其の四條件とは(一)公然切支丹を宣布するの免狀を受る事。(二)最初數日間の説

天草伊豆守種
元

教には領主自ら出席して人民に模範を示すこと。(三)若し切支丹宗を善良と認めれば、公子の一人をして宗門に入らしめ、人民の洗禮を受んと望む者に信教の安全を保證する事。(四)領主の費用を以て本渡城下に切支丹寺を建設する事等がそれだ。領主之れを諾す、アルメーダ即ち來たつて布教する事數日、貴族及び家臣の洗禮を受た者數百人、教勢特に盛ならんとせるに至り、佛僧徒等は伊豆守の兄弟二人を教唆して反を謀り、領主をして切支丹教徒を追放せしめんとし其の勢一時猖獗であつたが、大友義鎮兵を遣して反亂を鎮定し、伊豆守も亦改宗して切支丹信者となつた。是れは元龜元年の事だ。(一五七〇年)然るに、其の後再び反亂起るに及び、伊豆守直に之れを擊破し、尋て令を出して佛僧等を追放し、商人にして佛僧に加擔せし者は速に改宗して切支丹に歸依するか、然らずんば直に領内より退去すべしと嚴命して事初て平いだ。是れ天正六年の事にして(一五七八年)此れより切支丹倍々盛大となり、寺院の建設せられしもの二十有餘、信者の數五千有餘人に達した。後年秀吉家康の切支丹教徒を迫害せし時、天草島は教徒の避難所となり、切支丹の根據地となつた。

三 肥前の有馬家一族

有馬修理大夫
義貞有馬修理大夫
晴信

肥前高來の城主有馬修理大夫義貞は晴純の長男にして大村丹後守純忠の兄だ、義貞の純忠の勸諭に應じ宣教使を介して葡萄牙商人を其の領内に誘引せんと欲し、有利なる條件を以て口之津を開港した。當時支部長トレー師は病て行く事が出来なかつたのでアルメーダをして已に代つて赴かした、彼は口之津に至り布教すること一ヶ月に滿ずして改宗者貳百六拾人を得た。口之津の奉行及び其の家族も其の中にあつた。それより島原に至つた。彼處には既に日本人の傳道者が在て布教に務め居たが、アルメーダ至るに及び城主の子女及び家臣六拾名が洗禮を受た。其の城主某は義貞の義兄であるとの説なれど其の姓名詳ならずだ、然るに、其の後葡萄牙人の口之津へ來るもの少なきを以て弟、純忠の妨害に因るものと信じて之れを怨み諫早及び松浦と同盟して純忠を撃て却て破られたが、此の際弟忠純の怨に報ゆるに徳を以てする基督教徒たるの態度に深く感服し、天正四年(一五七六年)改宗して切支丹となりアンデレと稱した。義貞の基督教的生活は甚だ短かつたとは雖も、其の宗教を宣布するに熱心なると、其の領民の義貞に悦服するにとの厚きとにより、翌年義貞卒せし時、領内の信者二萬人を數ふるに至つたと云ふ事だ。長子義純父に先んじて死し、次子晴信位を嗣ぐに至り、其